PL
811
A8Z52
1938

East
Asiatic
Studies

Masamune, Hakuchō
Bundan teki jijoden

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

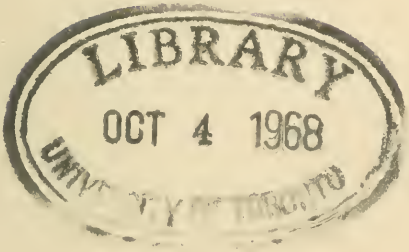
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

文壇的自敍傳

正宗白鳥著

中央公論社版

DL
B1
A6Z52
1938



目次

文壇的自敍傳……一
獨り合點……一〇一
河上博士のこと……一二七
久米正雄論……一三九
西園寺公の心境……一五五
文學者としての逍遙先生……一七三
文章論……一九五

思想・無思想……二一三
劇場風景……二三九
左團次・菊五郎・その他……二五二
劇場にて……二六九

文壇的自敍傳

文壇的自敍傳

一

外面的波瀾の乏しい日本の文學者の傳記でも取扱ひ樣によつては、政治家や軍人のやうな世間的に華やかな偉人型豪傑型の人物の傳記にも劣らない興味あるものとなりさうである。私はまだ讀んでゐないが「國木田獨歩」や「德冨蘆花」は、すでに、ある作家により、傳記的小說としてその生涯を表現されてゐるやうだ。岩野泡鳴の傳記は、舟橋聖一氏の筆で、或雜誌に連載されてゐる。これは、小說的潤色を施されたものではなく、實生活を忠實に詳細に調査した純粹の傳記で、明治以後の日本の文學者の傳記として、これほど委曲

を盡したものは、今まで世に現はれてゐないやうである。泡鳴は自から進んで平地に波瀾を起したやうな人間で、同時代の他の作家よりも、生涯の實錄が面白味を有つてゐさうだ。私は泡鳴とは可成り親しくしてゐたので、舟橋氏の泡鳴傳を興味をもつて讀みながら生前の彼の風丰や行動を追想してゐるが、實物を直接によく知つてゐると、偉人についても左ほどに尊敬は寄せられないものなので、舟橋氏が見てゐるほどには、この特色のある作家論客を重大視されないのだ。

私が泡鳴君に初めて會つたのは、明治三十八年（私が二十七歳）の頃であつたと記憶してゐる。季節は多分初夏であつた。私が粗末な單衣をだらしなく着流してゐたが、泡鳴も同樣であつた。私の奉職してゐた讀賣新聞社へ、突然訪ねて來たのだ。新體詩人の仲間に岩野泡鳴といふのがあることは知つてゐたが、その作品にも文學觀にも、私はまだ少しも接してゐなかつた。來訪の趣旨は、私が讀賣紙上で、當代の新體詩と新體詩人とを、概括的に罵倒したのに憤慨して「この沒分曉漢をやつゝけてやらう」といふ意氣込みで、議論を吹掛けるためであつたらしい。ところが、會つて見ると、私の方で取合はないためか、大した意見も吐露しないで、快活な大聲で文壇の噂をして、獨りで面白さうにカラ〳〵笑つた。それで、私も相手の人となりに好意を寄せて、「新聞に何か書いたらどうだ」と勸め

た。泡鳴は喜んで承諾して、直ぐに、私の擔任してゐた日曜附錄（文學美術關係の感想評論を二ページに亙つて滿載したもの）宛に寄稿した。私が、彼の文學論に價値を認めたのではなく、偶然の訪問を機緣として採用したのに過ぎなかつたが、丁度自然主義勃興前で、彼の所論も文壇に刺戟を與へるやうになつたので、この頃から、讀賣の文學欄が潑剌たる生氣を放つことになつたのだ。泡鳴もあの時私を訪問せず、訪問しても私に不快な感じを與へてゐたならば、有力なる讀賣に寄稿の便利が得られず、從つて、文壇進出が困難であつたであらう。

彼は、大抵每週續々と寄稿した。當時、私は獨身の下宿住ひであつたし、泡鳴は、妻子はあつても家庭を嫌つてゐたので、原稿持參で新聞社に訪ねて來ると、よく一しよに街上をほつき廻つた。喫茶店カッフェの類ひのまだ無かつた時代なので、二人は、歩くのも詰らないし、家へ歸つたつてしやうがないといふ場合に、撞球と圍碁を試みることがよくあつた。泡鳴はこの二つの競技を以前から樂しんでゐたのだが、私は玉突は泡鳴に勸められて時間潰しにやつて見る氣になつた。半年ばかりは殆んど每晩、森川町の下宿の近所の玉屋へ通つてゐたが、ちつとも上達しなかつた。大晦日の夜、玉屋から歸つて來ると、島村抱月氏によつて再興された早稻田文學初號が屆いてゐたので、心を躍らせながら、卷頭論文

「囚はれたる文藝」を一氣に通讀し、自分も身を入れて小說を書かなければなるまいと、多少發憤したのであつた。

その頃泡鳴と親しくしてゐた間に、彼獨得の熱烈なる文學論を屢々聞かされてゐた譯だが、私の方では、彼を重んじてゐなかつたので、いつも空氣焰のやうに見做して聞き流してゐた。そして、時々訪問して教へを受けてゐた田山花袋氏と、それから同窓の先輩島村抱月氏の說に最も耳を傾けてゐた。明治四十年（？）の一月號に「新小說」で數人の新作家の短篇を掲載することになり、私もその仲間に加へられ「醜婦」と題した拙いものを寄稿したのであつたが、その月の「イブセン會」例會の席上、泡鳴は「君の今度の小說は、僕の考へとすつかり同じだ」と、ぶつ切ら棒に賞讃した。「君の考へと同じぢや困るね」と、私は答へたが、どこが泡鳴の考へと同じいのか、その時も分らなかつたし、今も分らない。兎に角あの小說を褒めたのは泡鳴一人であつた。私は、それまでに、三四篇の短篇を書いたきりであつた。自分から興に驅られて進んで書いたのではなくつて、「新小說」編輯者後藤宙外氏などに勸められて、原稿料欲しさに澁々重い筆を動かして、どうにか小說らしい體裁のものを捏上げたのに過ぎなかつた。しかし、人間は、自己以外には出られないものなので、處女作に於て、すでに後年の自分の作品の風格は決定されてゐるやうなも

のだ。無論絶えず、時代の感化を受け、見るもの聞くもの、讀むものによつて心が動かされてゐたのに違ひないが、現存の誰かゝら、或は、過去の作家外國の作家の誰かゝら、特別に感化されたことはなかつたやうである。「玉突屋」とか「地獄」とかは、チェーホフの或短篇を眞似たところがあるが、それは皮相の點だけで、實物はよくも悪しくも自分のものなのだ。三十歳前後の私の初期の作品には、讀書から得た影響よりも、むしろ肉體の不健康、精神の衰弱が反映してゐるのぢやないかと、今私は追想してゐる。二十代の私は甚だ不健康であつた。養生もしなかつた。自暴自棄と云つたやうな氣持を有つてゐた。幼少の頃から本を讀むことは何よりも好きで、學生時代にも絶えず讀書はしてゐたのであつたが、學校卒業(二十三歳)後は次第に書冊に親しまなくなつた。少年期のやうな讀書慾が復活したのは、四十餘歳で大磯に引籠つてからの事で、外に仕樣事なさの讀書三昧であつた。若しも、二十代三十代に讀書を續けてゐたら、森鷗外夏目漱石、或は千葉龜雄君の何分の一かの多讀者博學者になつてゐたであらうが、肝心の壯年期に怠けてゐたので、學者には成り損ねた。たつた一つの外國語さへ充分に讀みこなす力も養ひかねて、多年憧憬してゐる外國文學も徹底的に味讀されないでおしまひになりさうだ。

それに、學校卒業後、基督教を放棄して心がのび〳〵したことは事實だが、一度少年期

に強烈に心に浸み込んだものは、完全に拭ひ取れないものらしく、夜半目醒めた時なんかに、暗闇のなかにゐるやうな手頼りなさを覺えることもあつたのだ。年少期の私は、内村鑑三先生の講演や著書に最も感激してゐたが、先生は、ダンテの地獄篇を日に一回づゝ讀み、全部三十四回を讀了るまで、恐怖に襲はれて毎夜眠れなくつて、家人にも心配させたと云つてゐた。これが本當なら、バンヤンとか法然上人とかと同樣に、宗教の極致に達し得る素質を具へた人として尊崇してもいゝのだが、今考へると、内村先生の述懐は少し誇張された言葉であつたらしい。來世を信じ、地獄天國の存在を豫想するのも、多くは心の遊戲のやうなもので、心の底の底までそれを信じて疑はなかつたなら、現世の幸福なんか、死後永遠の生命に比べると、どうでもいゝ譯なのだが、内村先生も中世紀の信者とは異つて、そこまで徹底して考へてゐなかつたらしい。宗教も文學同樣、要するに世の中の色取りであつて、信者は、唯一絶對の眞理を把握してゐる譯ではないから、時と場合で、卑近な現世にうまく處するためには、どうにでも調子を變へて行くのが常例である。

「肉體は亡ぶとも精神を殺す勿れ」とか「肉體を滅しても魂を滅すことの出來ない人を恐るゝ勿れ」といふやうな基督教的常套語は、どの國でゝも、どの時代にでも、或種の内省的人物によつて發せられるのだが、それは、昔私などが内村先生から聽かされた精神用語

同様に空疎な言葉で、誰も眞劍にそんな意見を服膺する者はないだらう。簡單明瞭で、現在の生存に執着してゐる人間の本性から云つて、肉體を賭して、捉へ所のない精神をも魂をも顧慮されないのが普通である。三十歳前後の私は、肉體の衰弱とゝもに精神までも衰弱してゐる人間の妄想を、不器用な筆を動かして吐露してゐたもので、現實の社會を克明に描寫してはゐなかつた。こと更描寫を避けたのではなくつて、小說に肝心なものは描寫であると信じながら、あり〳〵と事物を文字の上に浮べるやうな巧妙な描寫は爲し得なかつたのだ。

さういふ小說でも、日露戰爭後の文壇の新しい氣運に適應してゐたのか、世に認められて好評を得たので、私には今でも不思議に思はれる。當時は、島崎藤村の書きおろし「破戒」が自費出版で世に現はれ、國木田獨步の短篇集が出版され、それから間もなく、田山花袋の「蒲團」が「新小說」に揭載されて、文壇は活氣づいてゐた時であつた。私は學生時代から時々田山氏を訪問してゐた。同級生に新體詩を田山氏に見て貰ふつもりで二三度出掛けた男がゐて、一度私はそのお伴をして、嘉久井町の氏の新宅へ行つた。後で考へると、氏が新婚後間のない頃であつた。座に小島某氏がゐて、文學談をしてゐた。シャトーブリアンの「ルネ」を飜譯してゐると云つたりしてゐた。そこへ又獨步が來訪した。私は初

めて獨歩に面接したのだが、彼の名聲が、まだ微々たる一新體詩人として知られてゐた程度であつたので、私もさしたる敬意を寄せてゐなかつた。眉目清秀の青年であり氣焰家であるとして印象された。彼は早稲田の文科の學風をつけ〳〵と非難した。田山氏もそれに同意をした。穩健とか折衷とかいつた態度がいけないと云ふのであつた。新體詩も搖籃時代だからいゝものが出ないのだと、私が云ふと、獨歩は直ちにそれを跳ね飛ばすやうに「さうぢやない。テニソンなんかの詩よりも、シェレーやキーツの方が傑れてゐる。詩でも何でも時代の若い時にいゝものが出る」と云つて、田山氏もそれに同意した。

田山氏は、後年代々木に自宅を新築するまでよく轉居してゐたが、私は氏の轉居先を引き續いてよく訪問した。そして氏の現代日本の文壇や海外の文學についての漫談を聞くことを樂しみにしてゐた。抱月泡鳴或は逍遙先生の文學談よりも田山氏のが當時の私には最も興味をもつて受入れられた。「龍土會」といふ會合へもをり〳〵出席するやうになつたのも、氏に勸められたゝめであつた。龍土會は明治文學史に記錄さるべき會で、麻布の三聯隊の近所の洋食屋龍土軒が會場であつた。フランス風の料理が食べられるとかで、岩村透と云つたやうな美術家が同好者と會食したことが、この起りであつたらしく、私が加入した時分には、小山內薰、蒲原有明、國木田獨歩、生田葵山、柳田國男といつたやうな、新

時代の青年文學者がその常連であつた。島崎藤村氏にはじめて會つたのも、この會であつた。その時は柳田氏が幹事であつたが、會場には特に同氏の自宅を當てられ、更科蕎麥をふるまはれた。藤村氏については、田山氏から、考へ深い文學者として屢々噂を聞かされてゐたし、問題の「破戒」出版後ではあつたし、私は、目のあたり非凡人に接してゐるやうな氣持で氏を見てゐた。花袋と異り獨歩と異り、藤村氏は口が重くて、態度も沈着なので、私は初對面の時から、近寄り難い親しみ難い先輩として仰ぎ見てゐた。

今になつて回顧すると、少年時代の文學愛好心は不思議なものである。私はまだ故郷にゐた十五六歳の頃に、「文學界」を購讀して、古藤庵（すなはち島崎藤村）の「悲曲琵琶法師」といふ、爲體（えたい）の分らぬものを、分らぬなりに愛誦したり、「國民之友」新年號附錄所載の北村透谷作の「宿魂鏡」といふ不思議な小說を、これも分らぬなりに幾度も讀返して感動したりしてゐた。今それを批判的に思ひ浮べると、「琵琶法師」は兎に角、「宿魂鏡」は、透谷の作中では、樋口一葉の「たけくらべ」が彼女の作中で最も傑出してゐる如く傑出してゐるのである。透谷のは一葉の作品のやうに日本趣味の現はれでなく、一般向きでなく技巧も冴えてゐなかつたが、當時の文壇には珍らしく獨創的分子がそこに含まれてゐたと思はれる。一葉の夭逝は惜しむべきであるが、それよりも透谷の早世が一層惜しむべきで

あつたと、私は今になつて感じてゐる。

「破戒」には、「罪と罰」から思ひついたらしい所があり、その以前の「水彩畫家」は、ハウプトマンの「寂しき人々」に甚だ類似してゐるのだが、この新味のある「水彩畫家」について、田山氏が私に云つたことがある。「鷗外さんはこの小說に感心してゐるに違ひないのに何とも云はない」と、森鷗外が青年作家を引き立てようとしないのを不滿に思つてゐるらしかつた。田山氏は、以前鷗外一派（露伴絲雨など）の新作合評會で小つぴどくやつつけられた事を思ひ出してさう云つたのであらうが、私などは一時代新しい文壇に出てゐたので、鷗外露伴などを念頭に置いてゐなかつた。藤村ほどの優秀な新作家には、鷗外の批評なんかどうでもいゝぢやないかと、田山氏が氣にするのを、むしろ不思議に思つてゐた。泡鳴は、讀賣新聞の文藝欄で、「鷗外逍遙漱石などは二流作家だ」と放言したほどであつた。これは自然主義文學全盛時代の論壇の意氣込みを、無鐵砲な泡鳴が代表して云つたので、或意味では痛快であつたが、こんな風だから、泡鳴はあちらこちらの文壇人から反感を抱かれ、讀賣の文藝欄は自然主義の宣傳部のやうに思はれ、私もつひに讀賣から放逐されることになつたのだ。「早稻田文學」と「文章世界」と、讀賣の文藝欄が、自然主義の本部見たいに思はれ、實際にもさう云ふ色彩を帶びてはゐたが、私はこの派の文學を鼓吹

すべく熱心ではなかつた。第一泡鳴の議論に私は感心してゐなかつた。せつせと原稿を持つて來たから載せただけだ。當時の日曜附錄の主な寄稿者は、小山內薰、石井柏亭、近松秋江などで、極左的（泡鳴だからむしろ極右的と云ふべきか）自然主義論者は泡鳴一人であつた。

話を前へ戻して。……藤村花袋獨歩などは、硯友社時代に文學に志してゐたので、文壇に認められるまでは苦勞したらしいが、廻り合せのいゝものは、さしたる苦勞なしに、トントン拍子に世に出られるものらしい。夏目漱石の出世の華やかさに比べると、私などは微々たるものだが、概して評判がよくつて造作なく名譽ある新作家になつてしまつた。田山氏は、私が涙を呑み齒を嚙み締めて新聞縮輯の苦役を忍びながら、ひそかに文學に努力して、他日の成功を夢見てゐたかのやうに見做して、何かの回顧錄に書いてあつたが、それは、氏が自分の文學青年當時の氣持をもつて他を類推したので、私は、新聞記者稼業に苦しんでゐたのではなかつた。上司小劍氏などはよく知つてゐるだらうが、私は甚だ氣儘に勤めてゐて、今日の新聞記者の働き振りに比べるとノンビリしてゐたものであつた。たゞ月給は甚だ輕少で、それだけでは獨身暮しも出來かねる程であつたので、醫書か雜文かを書いて小遣錢を取る必要があつた。小說を書いたのも文壇的野心のためよりも、差當つて

必要な金を取りたいためであつた。年少の頃から文學は愛好してゐて、書けたら何か書いて見たいくらゐに思つてゐたものゝ、自分が小説家として相當の地位を占めることなんか、豫想もせず熱望もしてゐなかつた。

明治四十一年に、一月の早稲田文學に「何處へ」、太陽に「玉突屋」、三月の中央公論に「五月幟」を寄稿して、どれも評判がよくつて、新進作家としての確固たる地歩を占めた。「五月幟」は、題材を故郷に取つたので、田舎者の私には適當してゐたのであらうが、「何處へ」は上つ調子の淺薄なものであつた。今の私は、自己の作中であゝいふ作品を最も厭はしく思つてゐる。とても讀返す氣になれないものだ。しかし、あの頃の青年にはあんな氣持に共鳴した者が多少はあつたやうだから不思議だ。「五月幟」の原稿は、中央公論社へ屆けると、その日のうちに、編輯者の瀧田哲太郎君が角帽で袴の學生姿を、森川町の下宿の私の部屋に現はして、挨拶もろくにしないで、「今度のあなたの小説はいゝですなあ」と、息をはずませて勢ひ込んで云つた。私は呆氣に取られた。彼は私にお構ひなしに、細かに私の新作の批評をして、續けて四月の春季附錄に是非書いて呉れと頼んだ。私は、中央公論には、それまでに一度十數枚の短いものを寄稿したゞけであつた。この雜誌も、その頃はまだ、「新小説」や「太陽」ほどの權威がなく、瀧田君も編輯者としてまだ重きを

置かれてゐなかつた。當時、彼の心醉してゐた作家は、小栗風葉小杉天外の兩氏で、この二人の描寫の巧みなことを頻りに推讃してゐた。藤村花袋には感心してゐないらしかつた。私も、風葉天外の作品には自分などの企て及ばざる妙所に富んでゐるとは思つてゐたが、作中の人物に共鳴するところはなかつた。風葉氏は、眞山青果氏などゝ一しよの酒席で、「五月蠅」を褒めてくれたが、その次手に「何處へ」の結末を「まづい」と低い聲で一言附け足した。「その通りだ」と私はひそかに同意してゐた。それとゝもに風葉氏の有名な長篇「青春」をも、「まづい」とひそかに思つてゐた。氏は、大酒家で、生活振りはだらしのない方であつたが、文學には身を入れてゐて、師紅葉の如く、一字一句も苟もしない忠實な作家であつた。それのみならず、時代の新思潮に遲れないやうに努力してゐたやうであつた。氏の或作品は今讀んでも相當讀み應へがするのぢやないかと、私は漠然追想してゐる。しかし、「青春」(これは、私が間に立つて主筆に勸めて讀賣に連載された)は、多少「ルーヂン」などに似た所もあり、作者が努力して新傾向の作風を試みたものであるに關はらず、上つ調子で淺薄であつた。坪内博士が、或時、「青春」を評して、「あなたは天才だわ」「僕が天才?」と云つたやうな會話は、たまらない、鼻持ちがならんと云はれたことがあつたが、私も同感であつた。「何處へ」は、技巧のまづい「青春」であり、「青春」は兎に

角文章の整つてゐる、しかし内部に藝術味の缺けてゐる「何處へ」であつた。これは明治文學全體から云つても悲しむべきことなので、明治の「ルーヂン」も明治の「父と子」も世に現はれかけんとして、作家に天分乏しきため現はれそこなつたのだ。「何處へ」が、どつしりした藝術的表現を具へ、作中人物の心理をも底深く洞察し追究してゐたなら、時代精神を示した一つの代表作として異彩を放つたのかも知れない。

私が「五月蠅」で當てゝ以來、よく田舍を材料とするので、泡鳴が或時、「小說家は都會を書かにや駄目だよ」と云つたことがあつた。「さうだとも」と私は答へたが、泡鳴に云はれるまでもなく、私は第一、關西の田舍言葉がきらひであつた。そのくせ、私の初期の小說は、田舍言葉丸出しであつた。自然派文學は、泥くさい田舍つぺいの文學のやうに云はれてゐたが、藤村花袋の小說の會話が私同樣、甚だ田舍臭かつた。都會小說を書いてゐたつもりの泡鳴の小說がまた甚だ田臭を放つてゐたから面白い。泡鳴は私より七八歲の年長であり、私よりも外國の書物を多量に讀んで居り、詩小說論文を多量に書き續け、しかも絶大な自信を持つてゐたに關はらず、容易に文壇の認むるところとならなかつたが、後進の私が造作なく過分な評判を得てゐるのを見ても、憎惡をも反感をも抱かず、いつも快く交際を續けてゐた。私は數年間は泡鳴と最も懇意にして、互に隔てなくさま〴〵な噂話を

してゐたが、泡鳴をさほど重んじもしなければ、面白い人とも思つてゐなかつた。不遇でも元氣で、生々と生きてゐた泡鳴と異り、私は、新進の花形として、いろ〳〵な人から甘い讃辭を聞かされながら、心は快々として樂しまなかつた。當時の私の生活振りを最もよく知つてゐるのは、新聞記者であつた七年間、毎日顏を合せてゐた上司小劍君であらうと思ふ。私よりも私の事をよく知つてゐやしないかと思ふ。「あの時分僕はどんな風に生きてゐたか」と、傍觀者たる上司君に訊きたいやうに思ふ。「冷靜な哲人のやうな態度で人生を傍觀してゐる作家」として、私の作品は批判されてゐたが、これは私には腑に落ちない。私は自分の作品の批評では、田山氏の意見にいつも耳を傾けてゐた。氏は私の小說をよく褒めてくれた。奬勵もしてくれた。或忘年會の席上で、氏は、早稻田文學新年號所載の私の小說「地獄」を賞讃したあと、「ぢふ自愛せよと云ひたい」と附け足した。これは作品に陰慘な氣持が出てゐたので、作家の心境を憐んだための言葉であつたらしい。

私が、四五年間寄寓してゐた森川町の下宿を去つて、お粗末な貸家でも、はじめて自分の家を持つことになつたのは、明治四十一年の九月で、新進作家として持囃されてゐた最中であつた。上京後十數年の下宿生活に完全に別れを告げた譯だが、それも、下宿屋の主人や女中が想像してゐたやうに、結婚して家庭を持つためではなく、近松秋江君の妻君が、

年寄りのいゝ女中があるからそれを使つて家を持つたらどうだと勸めて、いろ〳〵世話をして呉れたゝめであつた。さういふことがなかつたら、私は、何時までも殺風景な下宿生活を續けてゐたかも知れなかつた。汚い衣服を着て汚い夜具にくるまつて寢ても、私は左程苦にしなかつたので、花形の新進作家に似合はない見窄らしい生活振りであつた。それでも、老婢との新生活でも、下宿よりは住心地がよく、食物もうまく、心が落着いて執筆に便利でもあつた。私は午前中に私の仕事を濟ませて、午後は勝手に早く新宅へ歸つて、せつせと原稿書きに努めた。この時はじめて萬年筆を買ひ、また英譯のモーパッサン全集を購つた。

轉居後間もなく來訪した德田秋聲君は「かうして家を持つて見ると、妻君が必要になるだらうね」と云つたが、泡鳴は「スペンサーは獨身で一生下宿暮しをしてゐた。君もさうしてゐればいゝ」と云つてゐた。當時の泡鳴は、家庭生活に惱んでゐたので、下宿の獨り暮しを是としてゐたのだ。秋聲君は他日「よくあんな婆さんのお給仕で飯が食へると思つてゐた」と話したことがあつたが、これには私も同感であつた。しかし、既に三十歳に達してゐても、その頃の私は、まだ結婚慾に驅られてはゐなかつた。心に現實の或女性が印象されてはゐなかつたので、異性思慕の感じも單純であつた。泡鳴氏にしても秋江氏にして

も、異性關係の悦樂も苦惱も味得してゐたのに、私は殆んど何も知らなかつたと云つていい。小說家たる資格に缺けてゐた譯であつたが、早くから結婚して生活難に心がいちけるのもいい事ではあるまい。

東片町の新宅で、「地獄」その他幾つかの新年號の原稿を書き續けてゐた時分、「新小說」所載の永井荷風氏の新作「隅田川」を讀んで私は大いに感動したのであつた。氏の歸朝後の作品はどれも皆清新な味はひがあつたが、江戸藝術の風趣豐かな「隅田川」には、異國情調の作品にも優つて懷かしい思ひがされた。十餘年間も下宿住ひをしてゐた田舍者が、江戸趣味の小說に共鳴するのは不似合のやうだが、西南戰爭後に生れた私は、年少の頃から馬琴京傳三馬種彦春水などの江戸末期の戲作を愛讀し、上京後も歌舞伎座や明治座の舊劇に心醉してゐたので、一方聖書やツルゲーネフやモウパッサンを耽讀してゐたにしても、江戸が心の故郷になつてゐたのであらう。私などがまだ純粹の新人になり得なかつた所以である。「君は永井のものを褒めるが、あれは紅葉とちがはないぢやないか」と、泡鳴は反對したが、泡鳴は國粹家ではあつたが、江戸文學には親しんでゐなかつたらしい。彼の方が私よりも、新人の骨法を備へてゐたやうである。泡鳴の傾倒してゐたボードレエル、ヴエルレース、或はアランポーの詩魂に比べると、「隅田川」の哀愁的情趣なんか、甚だ甘い

ものであるらしいが、我々はその程度のものを鑑賞し得るに過ぎないのである。

全體、自然主義文學は、當然發生すべくして發生したので、意味のあるものであつたが、一般多數の小說愛好者には左程喜ばれなかつたらしく、私などの小說集は豫想外に賣行が惡くて出版者を失望させた。この派の黨首とも云ふべき田山氏の小說集にしても、賣行は夏目漱石に遠く及ばなかつた。世の中は廻り合せのいゝものが得をするので、自然派作家が議論倒れで、大して面白い作品を出さず、讀者を惹付ける力を失つてゐるところへ、荷風氏のやうな、古くも新しくも情味のある作品が出たから、一層盛んに迎へられたのである。しかし、當時の文壇人の人氣は他の社會の人氣に比べると、實質的には微々たるもので、一葉が「たけくらべ」でどれほど文壇の名聲を得ても、讀者の數は知れたもので、收入も僅少で陋巷に窮死したばかりでなく、荷風潤一郎の出世作だつて世間に廣く流布したのではなかつた。漱石の「猫」や「坊つちやん」の一般的人氣は、明治以後の文壇では空前で、自然派作家の空人氣とはちがひ賣行もよかつたのだが、それだつて漱石の存生中には生活を豊かにするほどには到らなかつたさうだ。近代の西洋諸國の傑れた詩人小說家が社會に優遇され尊敬され、物質的にも惠まれてゐるのと比較にならなかつたが、よく考へると、必ずしもそれを憤つたり悲しんだりするには當らないのだ。明治時代の文人には、

東洋の文人氣質があつて、お互に貧乏で世間から「三文文士」呼ばはりされながら、世間の俗物どもを見下すだけの氣概があつた。實業家から贈與される僅かな救助金を有難がるやうなことはなかつた。官僚から輕視されてゐたゝめに、書いたものを意地惡く注意されることも少く、却つて氣樂であつた。

二

明治十二年生れの私は、六十歳といふ自分で信じられぬほどの老齡に達したので、肉體ばかりでなく頭腦の働きも鈍つて來たが、ことに感ぜられるのは、記憶の衰へである。今回文壇人として經て來た自分の過去の生涯を書きしるすに當つても、記憶のあやふやなのに呆れてゐるが、それでも大體はまだ覺えてゐるつもりでゐる。

私は明治三十六年の六月一日から四十三年の五月末まで讀賣新聞社に奉職してゐたが、私としては青年時代に七年間新聞記者を勤めてゐたことはいゝ經驗であつたと云つていい。奇警な批評を下す人として知られてゐた岩村透といふ西洋美術研究家が、私の最初の短篇集「紅塵」を一讀して、「この作者は、下宿屋住ひをして新聞社へ通つてゐるだけの經

驗で小說を書いてゐるといふ感じがする」といふ意味の批評をしてゐたと、岩村氏の知人であつた小山内薫君が私に話したことがあつたが、それは平凡な適評であつた。

私は、早稲田の文學部卒業後、學校の出版部に入つて「文學講義錄」を編輯してゐたが、一年足らずで辭職した。それで、坪内博士の立案と監督で富山房から出版された世界文學の梗概叢書や少年向きの文學叢書を五六冊執筆したり、短篇小說の飜譯をしたりして、氣儘な下宿生活を續けてゐた。イリアッドの梗概とマーテルリンクの戲曲數種、それから少年物として、アラビアンナイトの短い話二つ三つを解り易く譯したりしたが、校閲者たる博士は私に向つて「君の少年物はよく出來てゐる。この方面を一生の事業としたらどうだらう」と、日本の文壇にいゝ少年文學の無いことを說かれて、私にその專門家たらんことを勸告された。私は「考へて見ませう」くらゐの返事はしたが、當時の文壇語で謂ふ「お伽物」作家になる氣は毛頭無かつた。ところで、博士に褒められた、アラビアンナイト種の少年文學「不思議な魚」は、やまと新聞（？）紙上で、山田美妙によつてさんざんにやつつけられたのだ。富山房の編輯員が批評文掲載の新聞を數枚揃へて私のところへ持つて來て「參考のため讀んで見ろ」と勸めたが、私はざつと一瞥したゞけで、よくも讀まず、さして氣にもしなかつたが、高がお伽物の一小冊子の批評が數日の新聞紙に連載さ

れ、微を極め細を盡すのは不思議と云ふべきであつた。富山房の社員で世界文學編纂にも關係のあつた杉谷代水君が私に向つて「批評のなかに、肝心の執筆者の君の名は一度も出てゐないよ。校閲者の坪内逍遙の名前ばかりが持出されてゐるのだからね」と云つた。山田美妙は女性關係事件で早稲田文學からもその不品行を手酷く攻撃され、「文學者は實驗を名として不德なる行爲を敢てして可なるか」といふ問題を提出され、それが美妙を文壇から放逐する力を有つてゐたと、私はかねて聞いてゐたので、その恨みを美妙はここで報いんとしてゐるのだと思ひ當つた。さうすると、私は傍杖をくつたやうでもあり、また「坪内先生に御迷惑を掛けて相濟まぬ」といふことにもなるのであらう。美妙の批評は、丹念に誤字の指摘をしたり用語の不穩當を非難したり、言葉の下品なことを頻りに例を擧げて說いてゐたやうであつた。たとへば「何々したこともあつたげな」といふのなんか下卑た言葉だと云ふのだ。「あつたげな」の如きも、實は坪内博士の訂正語であつた。その後博士を訪問すると、博士はにがり切つた表情で「美妙の批評は間違ひだらけだが、一應參考のため、讀んで見るのはいゝ」と云はれた。

今私は回顧して、落伍者の心理を美妙の上に見て興味を覺えてゐる。美妙は、ろくな作品は殘してゐないが、二十歳前後であれだけの事を爲し遂げたのは、兎に角才人であつた

ためだ。しかしこの才人は逍遙紅葉のやうな真面目な努力はしないで、思ひつきで世間をアッと云はせようとばかり考へてゐたらしい。明治二十何年かの發行の「國民之友」に、諸名家の愛讀書が掲げられてあつたが、美妙のは、沙翁、ミルトン、ゲーテ、シルレルと大變な並べ方であつた。あの時代に、二十歳を越したばかりで、そんなものが本當に讀めたかどうだか、考うるまでもないことだ。美妙の氣取りは少しひど過ぎるが明治二十年代から三十年代に亙つた時代には、美妙的態度は流行してゐたのである。二葉亭と鷗外とはさすがに歐洲文學をよく讀みこなしてゐたので、從つて、今になつても、彼等の飜譯や感想批評が、他の群小作家と異つて光彩を放つてゐるのだ。

私は西洋の短い、譯し易い小説の飜譯を、時々博文館なんかへ賣りに行つてゐたが、明治三十六年の初夏の或日、其處の編輯局の應接室へ原稿持參で長谷川天溪氏を訪問して、そこへ來合せた田山氏などゝ世間話をしてゐるうち、田山氏は「君も定職があるといゝがね」と云つた。長谷川氏がそれに應じて「讀賣で美術記者を捜してゐると石橋君が云つてゐたよ。訊いて見よう」と云つて編輯室へ入つたが、やがて、石橋思案氏を連れて來た。それで思案氏は讀賣の主筆に電話を掛けて私を紹介してくれた。私は、翌日、足立北鷗氏を新聞社に訪問して來意を述べ、數日後に入社の約束が出來て、月給も他の早稲田出身者の

例に倣つて、初給十五圓と極つた。帝大卒業者なら少くも二十圓は與へられるらしかつた。

私の負擔する仕事は、主として「よみうり抄」の材料の蒐集で、別に教育方面の擔當をもさせられた。「よみうり抄」とは、島村抱月氏が命名したのださうだが、成程抱月氏らしい名のつけ方だ。その欄内には美術家の消息が傳へられるのであつた。當時は、新聞編輯も悠長なもので、社員の數は僅少であり、一刻を爭ふやうな忙しさはなかつたやうだ。入社當時、最初に驚いたことは、折にまかせて誰かゞ猛烈に「ワイダン」をやつてゐることであつた。社員は大抵二三十代の青年で、新入社も古參者の壓迫を受けることもなく居心地が惡くはなかつた。專用の人力車で、美術の會合とか美術家の私宅を訪問して材料を採るのだが、それは何でもないことであつた。當時の讀賣新聞は、美術新聞と云はれ、美術家に重要視されてゐたゝめ、美術については何の素養もない私でも、役目の力で至る所で優遇された。下宿屋のまづい飯を喰つてゐた私も、頻繁にいろんな料理屋なんかへ招待されて、つまりは無錢遊興の味を覺えさゝれた。「ワイダン」に驚いた私は更に「無錢遊興」に驚いたのだ。私は下宿屋から出て、それらによつて先づ人生を見たのである。私の入社後間もなく社をやめた早稻田出の知友を訪ねると、彼は、二社をやめてからうまいものが喰

へなくなつて痩せた」と、笑ひながら自分の頬ぺたを撫でてゐたが、その有様は、記憶の衰へた私にも今見る如く眼底に印象されてゐる。

お抱へ車で飛び廻るのは面白かつたが、車夫の給金が十六圓で私の給金よりも一圓多かつたくらゐだから、車上で威張つてもゐられなかつた。それで、月給だけでは下宿料にも足りなかつたので、勢ひ内職の原稿稼ぎをしなければならなかつたが、それは私の將來のためによかつたのだ。多額な月給を授けられてゐたなら、記者生活に安んじて面倒な原稿書きをする氣にはならなかつたかも知れなかつた。私の入社したのは日露戰爭の前年で、政治方面では風雲激しかつたらしく、クロパトキンとかいふロシアの大官が日本へ來遊して、舞子の濱で風月を樂しんでゐるらしく裝つてゐるといふやうな噂が私の耳に入つてゐたが、文壇はその頃ます〳〵沈滯してゐた。小杉天外氏が寫實主義を唱道して、書きおろしの長篇小說を、二三種單行本として發表したのが、注目に價したくらゐであつた。天外氏は、硯友社文學から後年の自然主義文學への橋渡しの役を勤めたやうなものであつたが、孤軍奮闘の意氣を有つてゐた。私は缺員があつたから美術記者になつたのだが、柄にない展覽會の批評をするよりも、文學批評をやりたくつて、自發的に紙上で新作品の批評を試みるやうにした。「よみうり抄」にも、美術紹介ばかりでなしに、文壇の消息をも傳へるこ

とにした。これは好結果を齎した。當時英國留學中の抱月氏も、小劍氏に宛てた音信に、「この頃よみうり抄が揮つてゐる」と書いてあつたさうだ。種取りに美術家を訪問するよりも文學者を訪問するのが、私には一層興味があつた。ところが坪内先生を訪問して、「新作の御計畫か新しい文壇感想がおありになつたら知らして下さい」と頼むと、「作家はやたらに前觸れをするのはいゝ事でない」と先生は拒絶された。今の言葉で所謂、自己宣傳はいけないとの事なのだ。然し、みんながさうであつたら、よみうり抄記者は勞して效なしなのだ。それから植村正久先生に向つて、「この頃新聞社へ入つてこんな仕事をしてゐます」と報告すると、「ホウ。それは詰らない仕事だな」と、先生、例の小さい目をしよぼしよぼさせて、豐頰に笑ひを忍ばせて云はれた。これも御尤もの批判だが、私は張合ひのない思ひをさせられた。それで、坪内銳雄君にその話を傳へると、「宗教家こそ詰らないことをやつてるぢやないか」と、同君は私に力をつけるやうに云つた。

當時讀賣の小說の挿繪は、梶田半古氏が書いてゐたので、美術家社會の現狀について全然豫備知識を有つてゐなかつた私は、何かにつけて同氏に教へを受けた。文壇消息を集めるについても、硯友社方面では誰に訊ねたらいゝかと、梶田氏に訊くと、「それは風葉が一番いゝだらう。秋聲は氣六ケしい」との事であつたので、私は、早速小栗風葉氏を筆苟

町の家に訪問した。氏は快く、硯友社系の文士の動靜を知らせてくれた。紅葉山人がすでに重患に罹つてゐた時分であつたが、瀨沼夏葉といふもに、ロシアのチエホフとかいふ小說家の短篇を譯してゐるといふことも聞かされた。當時、ゴルキーの短篇集の英譯は輸入されてゐて、私も短いのを一つ譯したことがあつた。シエーンキウィッチの短篇數種、バルザックの短篇なども、英譯によつて譯すことは譯したが、誤譯だらけで拙劣なものであつた。しかし、西洋の短篇小說のうまさ、面白さは、自分で譯して見ると一層よく感ぜられて、日本にもかういふ文學が出て來ればいゝと空想されたが、私などでも西洋の近代文學の刺戟を受けて、日本の文壇に舊套を脫した新味ある文學の出現を渴望したのによつても、隱約のうちに新氣運の崩してゐたことが察せられる。

私の入社した年の秋に、圓十郎が歿し、紅葉も逝去した。その年の春菊五郎が死し、翌年の春齋藤綠雨が死んだ。演劇の方面でも小說の方面でも、時代は推移してゐたのである。年少の私は讀賣新聞社としての紅葉についての弔詞を書き、圓十郎追悼文を感慨を籠めて書いた。ところで、綠雨が陋巷に窮死した時には、私などには何の感じも起らず、一片の追弔の辭も紙上に述べる氣はしなかつた。藝術家の運不運は測り難いものである。これはずつと後の事だが、國木田獨步が茅ヶ崎の南湖院で病死した時には、讀賣は全一ペー

ジを獨歩の記事で埋めた。明治以來今日まで、日本の文學者の死がこれほど大袈裟に新聞に取扱はれたことはなかつた。それも、讀賣に於ける紅葉、朝日に於ける漱石のやうにその新聞社と特別關係のあつたものなら兎に角、獨歩は讀賣に何の緣故もなかつたのだから、たゞ文豪を尊重したためにさうした譯であつた。當時如何に自然主義が全盛であつたかゞ、それによつても察せられるが、しかし、自然主義文學が榮えてゐるとか、獨歩の小說が認められてゐるとか云つても、それは社會の一隅的存在である文壇だけの問題であり、廣い世間では何とも思つてゐなかつたのだ。主筆の思ひつきで、獨歩によつて紙上を賑はしたのだが、文學に興味のなかつた編輯長は、「どんなえらい小說家か知らんが、こんなに書立てるのは新聞としていゝ事ぢやないと思ふ」といや味を云つてゐた。私も同感であつたが、表立つて反對すべきことぢやないから、主筆や三面主任の爲すにまかせて、默つて傍觀してゐた。

紅葉山人の長篇は大抵讀賣に連載されてゐたのだが、私の入社後では、小杉天外氏の「魔風纏風」や、「コブシ」や、幸田露伴氏の「天打つ波」などが揭げられた。その頃は、朝日などはまだ純然たる通俗小說を揭載してゐて、文壇の問題になるやうな小說は、最も多く讀賣に出てゐたのであつた。また當時の讀賣の文學附錄には、角田浩々歌客といふ評

論家が匿名で毎週堅苦しい文學評論をしてゐたが、これは文壇的に相當重んぜられてゐたやうであつた。大阪毎日の記者であつたので、讀賣では絶對に名を秘する必要があつたらしい。雜誌はその頃、初期の早稲田文學は廢刊されてゐた。「太陽」の文學評論は以前、高山樗牛によつて重きをなしてゐたのだが、その頃は大町桂月が擔任してゐた。桂月は文章が平明で所論は率直であつたが、浩々歌客も同樣、讀者に新たなる感激を與へる評論家ではなかつた。すべて凡庸であつた。新作品の發表の大舞臺は「新小說」であつて、主立つた作家の顏が毎月竝んでゐたが、代作が多いと云ふ噂を私は耳にしてゐた。その頃のこの雜誌の新年號には、多數の名作家の新作が集められ、見たところ華々しかつたが、大抵は代作だと云はれてゐた。兎に角代作横行の時代で、文壇の沈滯はそれによつても察せられた。早稲田の文科出身者の新年會の席上で、坪内博士は、今度の「新小說」のうちでは、二つ位いゝものがあると云はれた。それは夔庭筆村の滑稽小說と、二葉亭の飜案小說を取りあげられたのであつたが、文壇に新味のなかつたことはそれによつても察せられた。

私が入社した翌年（明治三十七年）に日露戰爭が起つたので、私は、上野公園の梅川樓で催された畫家寺崎廣業支那漫遊送別會の席上で、宣戰布告の噂を聞いたのであつた。この會には、橋本雅邦も出席して一座の大先生として奉られてゐた。何となく春めいた晩で

あつたと記憶してゐる。餘興には延壽太夫の淸元があつて「吉田屋」が語られたが、田舍者の私もこの時は感に堪へたのであつた。女中どもが廊下の障子の側に集つて洩聞きして「家元はうまいわねえ」と囁いてゐたのが今も耳に殘つてゐる。いよ〳〵開戰になつたといふので、貴家達も何となく不安な空氣に包まれて、送別の酒宴にも不斷のやうな活氣はなかつた。日本美術院といふ團體は、日本美術協會などの舊套墨守の團體に對抗した新派とも云ふべきもので、橋本雅邦岡倉天心兩氏が先頭に立つて指導してゐた。前者は創作家で後者は評論家であつた譯だが、岡倉氏は天才肌の人らしく、その天才的行動を私は美術記者となつて以來屢々聞かされた。最近この岡倉天心といふ風變りの學者が、日本精神勃興の氣運につれて、新たに回顧されて尊崇されてゐるらしい。私は、美術記者奉職中幾たびか氏の風丰に接したが、直接に面談して、氏の卓見を謹聽する機會はつひに得られなかつた。「岡倉といふ人は、新聞記者を利用しようと思ふ時には會ひたがるが、さうでない時には面會謝絶だ」と聞いてゐたので、私は押付けがましく氏を訪問しようとはしなかつた。それで、いつも宴會の席などで偶然氏を傍觀したゞけで、つまり醉つ拂ひの岡倉天心を知つてゐるだけなのだ。

最初に會つたのは、寺崎廣業の渡支送別會ではなく、歸朝歡迎會の席上であつたやうに

記憶してゐる。場所はやはり梅川樓であつた。美術院の一味徒黨が集つてゐたが、ぶよぶよ肥つた赭ら顏の、目の充血した天心先生は、酒が廻ると傍若無人だ。聲は猫撫聲といふべき女性的の柔しい聲で、居住ひも崩さず泰然としてゐるのだが、言ふ事は成程天才的なのだ。既に大家であつた廣業氏に向つて、「君なんか繪かきぢやない。繪かきの資格はない。紙屑拾ひにでもなれ」と云つて、他の列座の大家や大家の卵どもにも、同樣の罵倒を試みたりした。廣業氏は「紙屑拾ひになります」と謹んで御返答申上げる有樣であつた。雅邦翁は、取成し顏で「先生があゝ仰有るのは、君達の爲めを思つてゐられるからだ」とか何とか、眞面目くさつて宥めてゐた。私は傍觀しながら「こんなに威張り散らして、誰からも反抗されず、みんな恐入つてゐられるやうだと、さぞいゝ氣持だらう」と、ひそかに思つてゐた。「繪のかけるのは橋本先生一人だ」と天心先生は云つたが、繪の分らぬ私は、「あんな古くさい繪がいゝのか」と、むしろ不思議に思つてゐた。

當時谷中の美術院の境內に寄寓して、孤獨清貧に安んじて、何かの研究に沒頭してゐた鹽田力藏といふ奇人を、私は屢々訪問して、よみうり抄的材料を貰つてゐたが、この酒宴の席で、美術家でない某氏が、天心先生の前に座を進め、面を正して「あなたは鹽田のやうな男をお近づけになるからいけない。あれは詔諛の徒です」と、語氣烈しく諫言を呈し

たところが、先生は「おれは諂諛の徒が好きだ」と、一言で跳返したので、某氏も二の句がつげなかつた。この言葉は、私が年少の時に聞いた金言として、心魂に刻まれてゐて、後年折に觸れて思出してゐる。岡倉氏ばかりではない。誰でも諂諛を好むのだ。私も好きだ。諂諛でないやうな諂諛には、甘味量り知られざるものがあるらしい。

その後數年、岡倉氏一派が玉成會といふものを組織して、在野の青年美術家を養成せんとした時、やはり、同じ場所の梅川樓改め常盤華壇で發會式が催された。數名の幹事(?)は會長指名といふことであつたが、世間普通の例によると、表面は會長任せでも、豫め衆人の適當と思ふ者が選ばれてゐて、會長は豫定の名前を讀上げるだけなのだが、岡倉會長は、そんなことに拘泥しないで、安田靱彦氏など、數名の青年を獨斷で指名した。年齢や世間的地位を無視して、會長自身が俊秀と認めたものを選んだのであらう。安田氏などは先輩を差置いて重要な役目を命ぜられるのを憚つたのを、揃つて會長の前に出て極力辭退した。しかし會長は取上げなかつた。「僕の命に從はないのなら、僕は會長を止める」と斷言した。私が見てゐると、美術家の間にはひそ〳〵話がはじまつて場内動搖の色が見られた。私はこの會では岡倉氏の側に坐つてゐたので、傍觀するにも興味が深かつた譯だが、氏は何かのはずみで、私が讀賣の記者で、變な美術批評を書いてゐる人間であることに氣

づいて、私に美術の話をしだした。これ幸ひと、私の方でも質問を呈出して卓見を伺ふ心構へをしてゐたが、そこへ、尾竹竹坡君が突如として立上り、「この會はもう止めだ」と、叫ぶでもなく呟くでもなく、中音で云つて退場しかけた。場内はざわめいた。「信實は」と云つて、信實の説明を私に向つてしかけてゐた岡倉會長も、話をそれつきりにして座を立つて、「貴様達何を云ふ？」といつた調子でみんなを叱り付けてゐたやうであつた。それで、私は、明治の天才の卓越した美術觀を永久に聽き損ねたのである。

その後、岡倉氏などの別莊や美術院の研究所のある常州五浦の海岸に、初秋の頃、私なども招かれたことがあつた。波打際に假設されたいろ〳〵な露店で榮螺の壺燒などを食べたり、別莊の庭で催された盆踊りを見たり、甚だ趣味豐かな譯であつたが、當時新進作家になりかけてゐると、ともに、不眠症に惱まされてゐた私は、興味を覺えるどころではなかつた。往復とも樋口龍峽氏などと汽車が一しよであつたが、私が英譯のダンテの神曲を携へてゐたのを見た樋口氏は、「僕もダンテはよく讀んだが、和田垣謙三さんは、ある時暗誦して僕等に聞かせたことがあつた」と云つてゐた。剽輕な和田垣氏がダンテを讀んだつて何にもならないだらうと私は思つてゐたが、社會の各方面の大家に對する敬意を、當時の私は何かにつけて失つてゐた。「何處へ」のやうな小説を書かうとする氣持は、年々心底に

醸されてゐたのだ。五浦では岡倉氏夫妻が盆踊りの群にまじつて滑稽な手振り足振りで踊るのを茫然として見てゐた。そして、私の宿は横山大觀氏の別莊に割當てられたのだが、私は、ダンテを側に置き波の音を聞きながら一睡もしなかつたのである。翌日は、研究所へ行つて、研究生の作品を觀せられたが、そこへ岡倉氏が浴衣掛けでやつて來て、安田君の豐太閤の下圖を取上げて激賞し、「安田君がどうこれを仕上げるか、樂しみだ」と云つてゐた。寺崎廣業などに紙屑屋になれと云つた岡倉氏がこんなに褒めるのなら、安田君は餘程の俊才であらうと私は推察した。

後日、私は岡倉天心著の「茶の本」を讀み、日本人でこれだけ英文が書けるのは珍らしいのであらうと感心したが、內容にはさして感心しなかつた。その道の人なら誰でも知つてゐる程度のことを述べてゐるに過ぎないので、常人の氣づかないことを觀破した天才的の批判は殆んど見られなかつた。

も一つ、岡倉氏について思ひ出されるのは、氏が「新小說」誌上で、問ひに應じて文學觀の一端を洩らしてゐたことである。當時の小說の物足りなさを述べ、「星亨を泣かすやうな力のある小說」が出ることを望んでゐた。坪內博士も私に向つて「岡倉の說に同感だ」と云つてゐられた。これによつても、星亨といふ人が傲岸不遜冶徹に於て一代を絕してゐ

たことが想像される。そして、岡倉氏の感想はちよつと聞いたゞけでは氣が利いてゐると思はれるが、よく考へると、膚淺な評語に過ぎないのである。第一、讀者を泣かせるのを小說の本領のやうに思ふのは、卑俗な文學說であるが、それだけではない。星亨その他世上に跋扈してゐる豪傑は、若し小說を讀むとすると、造作なく泣くのではあるまいか。浪花節の「神崎何がし東下り」を聽いても、芝居の「寺子屋」を觀ても、涙潸々たるのではあるまいか。彼等を泣かすやうな小說を要求するのは、論じ詰めると、講談的小說の要求になるので、卓見でもなさゝうである。

さて、日露の大戰爭がはじまると、新聞社內は活氣を呈した。原稿の締切時間が午後四時で、紙面の記事の多くが一昨日の事件の報道であるやうに悠長に構へてはゐられなくなつた。しかし、私の受持方面は相變らず悠長であつた。坪內博士の「桐一葉」が開戰當時、東京座で芝翫（今の歌右衛門）我當（先代仁左衛門）などによつて上演されたので、私は進んで應援することにして、我當その他の俳優の苦心談を聽いて紙上に掲げたりした。それを機會に、續けて劇評を擔任することになつたが、これは主筆や編輯長に命令されたのでも、許可を受けた譯でもなく、演藝欄の記者から招待券を貰つて、勝手に批評を書いたのであつた。美術批評と云ひ劇評と云ひ、今から考へると隨分暴評であつた。その

頃は西の二階棧敷が新聞記者席に當てられてゐて、招待日には、招かれざる記者までも座に加はつてゐた。當時の新聞劇評家の主なるものは、三木竹二、伊原青々園、杉贋阿彌、岡鬼太郎、松居松葉などで、いづれも專門家で、舊劇については造詣深く、私はこれ等の劇通の批評を參考に讀んで蒙を啓かれてゐたが、しかし、歌舞伎は團菊の死とゝもに光を失つて、早晩滅亡するものであらうから、俳優の瑣末な技藝をかれこれと批判したつて仕方がないと思ひ、何か新しいものゝ出現を期待してゐた。私の暴評は社內でゝも非難されてゐたらしく、主筆は、新左團次に對する私の暴評の攻擊を、左團次贔屓の有力者から聞かれたと云つて、ひどく不機嫌な顏してゐた。松居氏は爭鬪心の强い人であつたので、氏の新作に對する私の批評を默殺し得ないで屢々憤りを發し、或時は「今朝寢床の中で君の批評を讀んだ」といふ書出しで、卷紙で一間にもあまる長い皮肉的冷笑的な手紙を寄越したことがあつた。川上音二郎一座が、長田秋濤氏の諷案的戲曲「王冠」を演じた時にも、劇評家籠絡術に長じてゐた彼の術中に陷らず、過激な非難を下したが、川上はそれについて反駁を試みるべく、私を新聞社に訪ねて來た。毆りつけられでもするかと思つて會つて見ると、自分の仕事を援助して呉れと云ふことで、和やかな顏で柔しくゴどうか助けて下さいな」と云つた調子であつた。ところで後で知人に聞くと、川上は私をうんと凹ませて

來たと吹聽してゐたさうである。

三木竹二氏が或時「君も方々でいぢめられるね」と憐れむやうに云つたので、私は「こんな詰らない仕事はどうせ長くやらないつもりですから」と答へた。ところが世はさまざまで、私の惡評でさへ一方では歡迎されたのだ。三木氏も「自分が云ひたくつても云へないことをあの男は云ふから面白い」と云つたさうだ。坪內博士も同樣の意味で云はれたことがあつた。私の住んでゐた森川町の下宿屋では隣室が小村外相の令息欣一氏の部屋である、同氏は芝居好きで私の劇評を、お世辭半分にしろ愛讀してゐると云つて、時々私の部屋に來て觀劇談をしてゐる。この小村氏は、講和問題から起つた燒打騷ぎの際、下宿屋へ大事な荷物を運んで來たりしてゐた。それは、九月の初旬で、學生はまだ新學期の課業のはじまらないために歸京せず、下宿屋はひつそりしてゐたが、私は下宿屋の窓から、方々に上る火の手を見ながら、世の中はどうなることかと氣遣つてゐた。

三

日露戰爭前には、どの新聞も閑文字に富み、「讀賣」はことに文學新聞美術新聞の面目を

備へてゐたのだが、私は、東京留學前の少年時代から學生時代に亙り、卒業後にも斷續的に購讀してゐた唯一の新聞は國民新聞であつた。雜誌は「國民之友」新刊書も民友社本に最も親しんでゐた。「讀賣」には文學趣味があつたにしても、紅葉山人などの小說や艷種記事が呼物になつてゐたことによつても推察される如く、戲作者的舊趣味が紙上に漂つてゐたが、「國民」は、當時の年少讀者を喜ばせるやうな、清新な文學趣味に富んでゐた。文章からして飜譯口調で、バタ臭かつたが、そこに我々は魅力を覺えてゐた。首領德富蘇峰氏をはじめ、山路愛山、竹越三叉、宮崎湖處子、塚越停春樓諸氏の、文學論、史論、紀行文、世上見聞錄、新體詩など、國民新聞に揭載されたものを、私はすべて愛讀してゐた。久保田米僊の漫畫も面白く、日本一の畫家は米僊だと思つてゐたくらゐであつた。東京の芝居の面白さも、初めてこの畫家の劇評によつて教へられ、年少の私は都會の劇場に屢々空想を馳せた。國民新聞の紙の匂ひも好きであつた。今でもその匂ひが懷かしく思出される。

私は早稻田の文科卒業生といふだけの履歷で漫然と入社さゝれたので、特に何かの取柄のある人間として雇はれたのではなかつたのだが、社員に、本筋の新聞記事以外の閑文字を何か書かさなければ紙面の餘白埋めの出來なかつた時代であつたゝめ、屢々いろんな事を書かせられた。それが私の筆馴らしになつたと云へないこともないが、隨分詰らないも

のを書いた。詰らないばかりではない。今から回顧して、甚だしい自己嫌悪を覺えさゝれるものを書いた。しかし、人間は何もしないよりも、いやな事でも押進めてやつた方が、自己の名を世間に印象させ出世の道が拓けるらしいので、消極的善良さは人生に成功する上では大した用をなさないのである。私が當時の新聞に連載したものゝうち最も厭はしい記憶を留めてゐるのは、「大學學生々活」と題したものである。腹には何等の惡意を有つてゐなかつたにしても、いゝ加減な噂を種にしておまけを附けて、面白づくの人物批評をやつたので、所謂惡德記者の舞文曲筆に類したところがあつた。「街の人物評論」のやうに、批評される當人のいやがるやうな批評をすれば、讀者は喜ぶものらしいが、新聞記者や雜誌の原稿書きを商賣にしてゐると、讀者の卑俗な好みに迎合するために、輕々しく人を傷つけて平氣になるのである。

私は帝大前の森川町に下宿してゐたので、日本一の官立學府の學生達の日常生活に接觸してゐた譯だが、早稻田あたりの學生の生活振りとどう異つてゐるか、兩者の氣心がどう異つてゐるか、兩方の學生街の光景がどう異つてゐるかといふやうな小說家的觀察を試みることはなかつた。私が牛込の下宿から本鄕へ轉居したのは、敵の陣地へ飛込んで新聞材料を探索するためであらうと云つてゐた者があつたが、私には無論そんな探偵的興味はな

かつた。後年小説の述作に努力するやうになつても、小説の材料を蒐集するために何處かへ出掛けたりしたことは一度もなかつた。有觸れたもので間に合せてゐた。「學生々活」にしても、もつと觀察の目を光らせ、もつと熱心に調査したら、あんなに淺薄俗惡なものにはならなかつたのであらうが、當時の私は、丹念に或一事に沒頭する氣持にはなれなかつた。たゞ、毎日の職務である「よみうり抄」の材料集めのため、或は新聞の原稿依賴のため、帝大關係の文人學者を訪問してゐるうちに、おのづからいろんな噂が耳に入つたり、彼等の生活振りが心に印象されたりしたのであつた。

讀者受けはしたに違ひなかつたが、大學街では惡評も盛んであつた。下宿屋の、房州出身の女中が、「あなたは、私の家の惡口を書いたり、お客樣のことを惡く書いたりして酷いね。おかみさん怒つてるよ」と云つたこともあつたが、主筆宛てに非難攻擊の手紙を寄越したものもあつたやうだ。そのたびに、主筆足立北鷗氏は、頭髮を毛抜きで抜きながら不機嫌な顏をしてゐた。わざ〳〵私を訪ねて材料を提供した學生もあつたが、私に筆を少し愼むやうに注意した學生もあつた。閻討にでも遭ひさうな氣がした。倫理學者中島德藏氏を訪問した時、「僕もあゝいふことを書くので惡く云はれてゐるんですが、倫理的にいけない事なんですか」と訊くと、「なに、あのくらゐなことかまふものか。人間は生活のために

はいろんなことをやらなければならない」と、氏は元氣よく答へた。中島氏は、ミュアヘッドの倫理學の講述に關して、筆禍か口禍かを起して苦境に陷つた經驗があるだけに思遣りがよかつた。私が入社して間もない頃、哲學館の校長井上圓了博士が印度漫遊から歸朝したので、社命により感想を聽くべく私は訪問したが、その時、中島氏がやつて來て、「先生、お留守中申譯のないことをいたしまして」と、恭しく詫言を述べた。ミュアヘッド事件であると、私は推察して、妖怪博士といふ綽名を持つてゐる井上氏の返辭を待つてゐたが、氏は和やかな顏で首肯いたゞけであつた。新聞記者が側にゐるとかういふ重大な問題について迂濶な話は出來ないのであらうと察して、私は早速暇を告げた。ミュアヘッド事件についてハッキリ記憶してゐないが、學者が當人の豫期しない災難に會ふ一例をその時知つたのである。

「學生々活」のうちでは、帝大文科の教師の人物評をしてゐたのだが、或日、新聞の記念號に原稿を依頼するため井上哲次郎博士を訪問すると、博士は寄稿を承諾したあとで「學生々活」の非難をはじめた。あんなものを書く人間も、書かせる新聞もよろしくないと、くど〳〵と果てしなく駁撃を續けた。廣いテーブルに向つて對座してゐる私は、次第に堪へ難くなつたので「あれは私が書きました」と白狀すると、博士は「さうですか。それは

失禮しました」と云つたが、それで話をおしまひにしないで、今度は言葉を改め、さも門下の青年學生に對する如く、諄々として私に訓戒を垂れた。井上博士に對しては私は年少の頃から強い偏見を抱いてゐたので、好意ある訓戒をも身を入れて聞く氣はなかつた。私は、明治二十年代の「國民之友」に、高橋五郎氏が「僞哲學者」として、井上博士を痛烈に叩きつけてゐたのを讀んでゐたのである。「教育と宗教の衝突」と題された井上博士の基督教攻撃に對する辯駁で、數回に亙り、古今東西の哲學、文學、宗教書から引用した文辭で自己の所説を飾つてゐた。それで、曲學阿世の僞哲學者といふ斷定的惡名を、年少の私は鵜呑みにしてゐたのであつたが、歳を取つてから考へると、高橋氏の論文は甚だしく衒學的で論旨も徹底してゐなかつたやうに思はれる。井上氏の所説の如く、基督教は日本の傳統的道德觀と相容れざるところがありさうに思はれる。そして、この頃新聞で、新島襄創立の同志社大學が、教育方針に大轉向を決行し、基督教本位を拋棄したといふ記事を讀み私は大いに感慨を催した。四十餘年前の井上博士の所論が權威をもつて實現されたやうなもので、當年の「曲學阿世の僞哲學者」も、實は豫言者であつた譯だ。世の中の事は分らないものである。

當時の讀賣の連載物では、五來素川氏の「東西兩京大學」評論と、河上肇氏の「社會主

義」評論とが最も評判がよかつた。五來氏のは法科の教授の人物評であつたやうだが、私の出鱈目の人物評とは異つて、調査の行屆いた穩健な評論であつたらしい。河上氏のは當時の社會主義者を論じたので、無論マルクス以前だから、何等の危險性も感ぜられず、自由自在に筆を採つてゐたやうである。しかし、私は、法學者や社會主義者に何の興味をも感じなかつたので、兩氏の評論を殆んど讀んだことがなかつた。社會主義と云へば、私がこの言葉をはじめて耳にしたのは、上京前、岡山の宣教師の私塾に半年ばかり通つてゐた時分に、安部磯雄氏の演説を傍聽した時であつた。安部氏はその時米國留學から歸つて來たばかりで、岡山の基督教學校の校長として、日曜日の教會堂で説教をやつてゐたが、これは據ない義務としてゞあつたらしく、別に自由な講演を一週に一度づゝ試みてゐた。私などもこの方を面白く聽いてゐた。まだ東京をも知らない私は、何かにつけて安部氏の口から出る西洋の話に聞惚れてゐたのだが、その講演のうちに、社會主義の事も語られた。しかしそれは言葉として私の耳に留つたゞけで、その言葉の意味は、まだ子供だつた當時の私には、何等の刺戟をも與へなかつた。

河上氏は主筆足立北鷗氏と鄉里が同じかつた緣故で入社されたのだが、私は、七年間出入してゐた京橋際の新聞社の編輯室で知合ひになつた多數の記者のうちでは、やはりこの

人が特殊の人物として追想される。無我愛を唱道したり、栄根譚とかいふ古風な書物に感服したりして、紙上にそれ等の感想を發表して、世上の問題となつてゐたやうだが、私は氏の所説に共鳴されなかつたので、親しく話をしたことは殆んど無かつた。たゞ鉈豆煙管で煙草を吸ひ、晝餐を鹽餡の大福で濟ますやうな氏の簡素な生活振りが私の目についてゐた。それで、在社中は懇意にした譯ではなかつたのに、氏が京都大學に赴任されて間もなく、私は、秋の京見物に行つた時に、どうしたはずみか、氏を眞如堂のほとりの假寓に訪問した。用事もないのに左程親しくもない人を訪ねるなんか、私としては異例であつた。でも、意外に快く迎へられて、晝飯も饗應され、近所の秋景色見物の案内もされた。しかし、我も彼も、話らしい話はしなかつた。私は、話の範圍の極めて狹い人間であるのであらう。河上氏の京都生活についても、立入つて訊ねもしなかつたが、當時は、いろ〳〵に迷つてゐたらしい新聞記者時代と異り、後年の活躍時代とも異り、平和に靜かな學者生活を樂しんでゐたやうであつた。翌日は天長節であつたが、私は氏に誘はれて伏見から黄檗を經て宇治まで散歩して、川沿ひの料理屋で晩餐を食べて歸つた。同行者は、河上氏の先輩の戸田海市博士夫妻で、私は途中で二人の經濟學者の學問話を興もなく傍聽して、時々私に向つて何か話しかけられても、ぶつきら棒な返事をするだけであつたが、しかも、冴

えた秋日和の郊外で、一日を河上君と遊び暮したことは、私の生涯の一事實として記憶に殘つてゐる。戸田博士は、病氣のために、飯を日にしないで料理ばり食べてゐたが、その頃中央公論に出た永井荷風氏の「新歸朝者の日記」を讀んだと云つて、「西洋から歸つて來た當座は誰でもあんな風に考へるものだ」と批評してゐた。河上氏は、その後間もなく、歐洲留學の途に就いたやうであつたが、氏の人となりは、島崎藤村氏の「佛蘭西だより」の中に最もよく現はれてゐる。それを讀んで、河上といふ人はかういふ人であるかと、むしろ意外に感じたのであつた。氏は氣焰家であり論客であり、そして國粹信者であつたのだ。後年の氏はどうだか知らないが、あの頃の氏は、日本人の素質を信頼し、日本の將來に豐かな希望を持つてゐたのだ。氏は、文學者となつても、荷風流の「新歸朝者の日記」は書かなかつたに違ひない。

戰後には、どの新聞も賣行がよくなつたらしいのに、讀賣は、經濟的に思はしくなかつたらしく、主筆も焦躁してさま〴〵な計畫をめぐらしてゐたやうであつたが、それ等の計畫も不成功で、社主の本野家の信用を失つたのか、一時竹越三叉氏が主筆の椅子に座を占めることになつた。足立北鷗氏は、主筆として手腕がどうであらうとも、社員間の評判がどうであらうとも、私としては感謝すべき人である。薄給であつたとは云へ、我儘氣儘に

勤めてゐられたのは、北鷗氏が寛大であつたゝめか、心弱くて無造作に社員を放逐し得なかつたゝめであつた。主筆が變つたら、私も今までのやうにはしてゐられないで、事面倒になるに違ひないと氣遣はれた。まだ新進作家としての地位は得てゐなかつたのだから、獨身の下宿住ひの氣樂な境涯であつたとは云へ、記者廢業は何かにつけて不便であつた。人生諸相の經驗に乏しい私が、失業の恐れを、多少でも實感したのは、一生のうちこの時だけであつた。竹越といふ人がどういふ處置を採るかと不安であつたが、新主筆も社員の淘汰はあまり行はなかつた。慶應義塾出身者を入れて、早稲田系の者なんかは出すつもりでゐたとか噂されてゐたが、竹越氏も心弱い人らしく、思ひ切つた事は出來なかつたのであらう。それで「やれ助つた」と喜んだやうなものゝ、仕事はひどく忙しくなつた。私を、使へば役に立つ人間と思つて呉れたのは有難いやうなものゝ、西洋新聞だの何だのと、自分の讀み古した變なものを持つて來て飜譯させられたりして煩かつた。接近してゐると、世界的知識に富んでゐるらしい紳士で、話も面白いのであつたが、過重な仕事を命ぜられるのには當惑したので、「私も青年だから、自修の時間を與へて下さい」と申出ると、竹越氏も反省したらしく、それから私の負擔を輕くして呉れた。今時の新聞社では、そんな勝手な事が取上げられる望みはなささうだ。

私は、獨身の有難さで、午餐も、他の社員よりは贅澤にしてゐられた。よく近所の洋食屋から、大きなビフテキを一皿取つて喰つてゐたが、そのうまさは骨身に浸みてゐた。竹越主筆は、有名はハイカラで、身だしなみも行屆いてゐて、編輯室のごみ〳〵した空氣の中に身を置くには不似合なやうに、傍目にも見られたが、食物にしても、わざわざ天金のテンプラなんかを取寄せたりしてゐた。そして、社員用のお茶なんかには口を觸れないで、食後にはステッキを持つて、ウーロン茶喫茶店へ出掛けてゐた。當時の銀座では、高級の茶店は此處一軒であつた。

日本文壇史に特筆すべき、西園寺首相の文士招待事件の起つたのは、竹越主筆時代であつた。竹越氏は、編輯室での雜談のうちに、「西園寺侯を文學者に會はせて見たい」と云つてゐたが、うまく侯爵を說付けたらしく、その會に招待すべき文學者の人選を社内で相談したりした。その時分、僅か二三ヶ月間だが近松秋江君が讀賣新聞に勤めてゐたのだから面白い。適當な文學者の名前を何人か書付けて竹越氏に提出したのは秋江君であつたのだ。それを基礎として、竹越氏は他の人々にも相談して、「新聞關係者や評論家をも二三入れたい」といふ自分の好みをも交へて、秋江案は多少變更されたのだが、大體は秋江君の選擇に依つたのだ。招かれて喜んだ人も、招かれないで怨んだ人も、その選擇が秋江氏である

ことを知らなかつたし、知らせてやつても信じなかつたから不思議だ。この會は何回か續いて、新聞にも毎回大袈裟に報道された。逍遙漱石二葉亭の三氏だけは、白々しい口實を設けて、招待を辭退したが、かういふ招待に應ずるのがいゝの悪いのと、文壇で問題にしたのは野暮な沙汰である。この招待會すなはち雨聲會の第一回が催された後、唯一の評論家として招かれた大町桂月氏に會つた時、その話が出ると、氏は「僕は小説家ではなし招待を斷らうと思つたが、相手が總理大臣だからと云つて斷るのは人間が小さいと思ひ直して出ることにした」と云つてゐた。大町氏は、よく、「かうしたら人間が小さくなるとか、大きくなるとか」筆にし口にしてゐた。しかし、人間の大小を氣にして、大きく見せようと考へたりするのは、その事が人間の小なる所以ではないかと、私には思はれた。大町氏は、物事に無頓着な仙人のやうな人であつたが、「小説は小人の書くものだ」と云つたこともあつた。他人の心理をこせ〳〵と穿鑿したり、詰らない事に煩悶したりする小説は氏の目には、小人の仕業として映つてゐたのだ。

夏目漱石が「坊つちやん」や「草枕」などを發表して、名聲の高まつた時分で、竹越氏は、往年の紅葉山人のやうに、漱石を讀賣專屬の寄稿者として招聘するつもりで、自分で漱石訪問を試みたやうであつた。後で私も主筆の命令により、原稿依頼に出掛けて、この新

文豪と一時間ばかり差向ひで、ぼそ〳〵不景氣な話を取りかはした。幾度かの交渉の後、漱石は招聘を拒絶し、文學評論を一篇寄稿したゞけであつたが、拒絶の理由は、讀賣には安心して一身を托することが出來ないと云ふのであつた。それに對して、竹越氏は「自分は本野一郎氏（社の所有者）とは親友であるから、たとへ自分が讀賣を退いても、漱石氏に累の及ぶことはしない」と保證してゐたが、漱石はそれを信賴しなかつたらしい。彼もそれくらゐな世間智は有つてゐたのである。

竹越氏の主筆時代は、知人が豫言してゐた如く、果して長くは續かなかつた。新聞に對する氏の抱負は實現されず、責行もよくならず、執着心の強くなさゝうな氏は、厭氣が差して投出したのであらうと想像された。退社の際には、我々編輯員を自宅に招いて離別の宴を張り、一夕を朗かな雜談で過した。その後私は、一度思ひがけなく、氏に招かれて築地の旗亭に遊んだことがあつたが、それは、私の小說に氏をモデルにしたやうな人物が書かれてゐたのに、氏が偶然目を觸れたゝめであつたらしい。爾來三十年、同じ東京に住みながら、面會して舊を談ずる機會は一度もなかつたが、今此處であの時代を追想すると、私が一生のうちに出會つた知人の中の「優秀型の一人物」として思ひ出される。足立主筆にしろ竹越主筆にしろ、その他の社員諸氏にしろ、七年間私があの編輯局で接近してゐた

人々には、今思ひ出して不快な感じを起さゝれるやうなのは、一人もなかつた。

竹越氏が去つた後は、再び足立氏が主筆となつたので、私の仕事は一層氣樂になつた。老社長が死し、駐露大使であつた本野一郎氏が相續して、社内に大改革が起り、新しい主筆が來て、足立氏も閑地に追ひやられ、私も退社を餘儀なくさゝれるやうになつた。私は新進作家として自立し得られるやうになつてゐたので、免職も恐るゝに足らなかつたのであるが、社の方では簡單に「出社に及ばず」と云ひ渡す譯に行かなかつたのか、幹部が足立氏に命じて私に謎を掛けさせたのだ。これも私に取つては一つの人生經驗だが、どの役所でも會社でも、雇人を免職する場合にこんな廻りくどい厭な手續きを採つてゐることが屢々あるのだらうと推察される。免めさゝれる方では、この謎は隨分不快な印象を後までも殘されることであらう。或日足立氏は私を晩餐に誘つたが、私一人では興がないので、氏は上司君に同行を求めた。それで行きつけの洋食屋で三人が會食したのだが、足立氏の穩かな話にも奥齒に物の挾まつたやうなところがあつて、私も變に思つたが、その時は不得要領で別れた。迷惑なお附合ひをさゝれた上司君は、あまり口を利かなかつたが、さぞ私の勘の鈍さを齒痒く思つてゐたことであらう。しかし、私もその晩どこかをうろついてゐるうちに、ふと思ひ當つたのだ。謎が解けたので頭に淀んでゐた雲が晴れたやうであつ

た。それで、早速足立氏宛に退社承知の手紙を出して、「來月からは月給四十圓がふいになるから、その穴埋めに、數十枚の原稿を餘分に書かなければなるまい」と心ひそかに考へた。

それから數日後に、足立氏は雜司ヶ谷の私の陋宅へ訪ねて來て、別れの晩餐を共にしようと云つて、一しよに外に出た。そして、江戸川べりの橋本とかいふ鰻屋へ行つて、ぶよぶよ肥つた足立さんと痩せつぽの私とが、一杯の酒も飮まず、ぽそ〳〵と飯を食ひながら興のない話をして、それで、七年間の記者生活に淋しく別れを告げた。しかし、この時本當に心の淋しかつたのは、私より足立さんであつたかも知れなかつた。全力を盡して新聞を經營してゐたのに關はらず、事志とたがひ、社長一家の信用をも失つたらしく、主筆の地位を守ることも出來なかつたのに、その胸中の苦悶を私などに打明けようとはしなかつた。私も兎に角滿七年間勤めたのだから、多少の慰勞金も貰へるであらうと、多少當てにしてゐたのであつたが、その月の月給は私の方から電話で請求したので送つて來たゞけで餘分のものは錙一文送つて來なかつた。幾度も云ふやうだが、私は獨身だからそれでも構はないし、誰にも話さなかつたし、不平も洩らさなかつたが、女房があつたら、さぞブツブツ云つたことであらう。慰勞金なしに追つ拂ふなんて、あの時の新主筆や幹部どもは

餘程私を嫌つてゐたものらしい。しかし、本當はあの時やめさゝれたのは、私の將來のためによかつたので、あれで區切りがついて、否應なしに創作に努力するやうになつたのだ。「徒勞」とか「微光」とか、私の作品のうちでいくらか實の入つたものは、退社直後に製作されたのであつた。

私が嫌はれた原因は、新社長本野一郎氏などに對し敬意を缺いたことを書き飛ばしたゝめでもあつたが、岩野泡鳴など自然主義鼓吹の評論を掲載したりして、新聞をその派の機關紙のやうにすると思はれたゝめであつたらしい。全體自然主義は文壇でこそ威を揮つてゐたが、世間一般には嫌はれてゐたのである。日本人の文學趣味には根本から適しないのだ。だから、自然主義の名を辱めないやうな冷靜な傑作は產出されてゐないので、たゞ議論が盛んで聲ばかり大きかつたゞけなのだ。文壇でも、逍遙鷗外漱石などの大家はお揃ひで自然主義を嫌つてゐた。菊池寛氏の書いたものゝうちに、上田敏氏が「今の文壇は不良少年の手に落ちました」と、講壇にて歎息したことが書かれてゐたが、自然主義は不良青年の唱道するものゝやうに思はれてゐた。一時代前に、ニーチエ主義とは本能滿足主義と同意義で、酒を飲み女遊びをすることのやうに、世人に思はれてゐたのと同樣であつた。森鷗外逝去直後に、「明星」に鷗外の書翰が幾通か連載されてゐるのを一瞥して、私は

意外なのに驚いたのだが、京都在住の上田敏氏宛てのうちに、鷗外は、私が新社長に嫌はれて讀賣を追放された次第を小氣味よげに知らせてゐるのである。我々若輩の動靜を彼等はそんなに氣にしてゐたのかと、私は呆氣に取られた。鷗外先生にしても敏氏にしても、學殖識見兼ね備はる文豪であつて、その作品は、私も不斷愛誦してゐるのだが、官僚氣分の豐かな人物で、田山花袋や岩野泡鳴のやうな率直な野人ではなかつたと、私は想像してゐる。

在社七年間に、最も不愉快な思ひをして、今回顧しても冷汗の出るやうな思ひのされるのは、讀者懇親會といふものに出席さゝれたことであつた。廣島とか神戸とかへ、自分一人で社を代表して出掛けて、多數の聽衆を相手に演說をしたのである。近年は、文學者も皆演說が上手で、聽衆を面白がらせる技倆を備へてゐるが、昔は人並に演說の出來る者は文壇には滅多になかつた。ことに私は、演壇に立つても、何を云つていゝか見當がつかなかつた。多分支離滅裂の事を喋舌つたのであらうが、聽衆がよくおとなしく聽いてゐてくれたものだと不思議に思つてゐる。新聞販賣擴張のための會なのに、私のやうな無愛想な人間を派遣するのは打壞しであらうと思はれたが、あの時代は世が悠長であつたのか、だだ、色紙短冊の揮毫を強要されず、西洋流のサインさへ求められなかつたのは、有難かつ

た。あの頃は、人心が純良で、まだ惡弊に染んでゐなかつたゝめであらうか。

私は、神戸に於ける讀者懇親會に出た次手に奈良へ廻つて、はじめてこの名譽ある舊都の風物に接し、寺院や佛像を觀覽し鑑賞したのであつた。季節も初夏の頃であつたのだから、感激もし陶醉もしなければならぬ筈であつたが、懇親會で疲勞し、睡眠も不足してゐたゝめか、何を見ても憂欝であつた。美術記者としての紹介狀を知人から貰つてゐたので、普通では觀られないものを、觀せて貰つたりしたが、古美術の妙味は感得されなかつた。夢殿の祕佛は法隆寺境内で修繕されてゐて、係りの人から、それについての說明を聽かされたが、その尊さ有難さ、彫刻としての優秀さが、若かつた私にはつまりは分らなかつた。近年歲を取つてから屢々奈良に遊んで、老人らしく古き佛達には親しみを覺え、日本趣味禮讃のお仲間入りも、させて貰ふやうになつたが、一方古美術に對する懷疑も一層強くなるのである。

四

私の最初の短篇集は題名を「紅塵」とした。新聞社内の見聞を材料とした小品「塵埃」

が評判がよかつたので、それを短篇集の題目とするつもりであつたが、壜埃といふ言葉はあまりに殺風景なので、ふと思ひ直して紅塵と變更した。今考へると可笑しくなるが私もあの時分「紅」の字を欲してゐたのだ。ところで、紅顔の美少年なんていふ紅の字に相應はしい時代は私にはなかつたので、あの短篇集も、實は壜埃集と名づくべく適當してゐたのである。後年「微光」といふ、評判のよかつた短篇を發表した時も、作品のうちには光なんか少しも宿つてゐないのに、名前だけさういふものをくつ附けた。

學校卒業後、私は鄉里の家にも人にも接觸することは稀れであつたが、それは鄉里の補助がなくても都會で自由な生活を營んでゐられるためであつた。しかし、兩親が健全で、大勢の子供を養育して家運が榮えてゐるらしいことが、誰に聞かされるともなく、私の心に映つてゐたので、私の日常生活はそのお蔭で萎けなかつたと云つてよかつた。暮しに困るやうであつたら何時でも故鄉へ歸ればいゝと思つてゐられたのは、何かにつけて心丈夫であつたやうなものゝ、そのために生活に對して眞劍味が缺けてゐたかも知れなかつた。父祖の家が賴みにならず、早くから妻子を持つて生活に惱まされる作家は、自然に浮世の辛酸を體驗して、その作品にも現實の味はひが濃厚に漂ふ道理である。私は三代も子供の生れなかつた家に惣領として生れ、しかも祖母に育てられて思ふ存分の我儘をして幼年期

を過したので、その我儘な氣持から何時までも脫却されなかつたが、實生活については可成り細心であつた。新聞社から月給の前借をしたことは一度もなかつた。作家として原稿料の前借をしたことも殆んどなかつた。無論貯蓄はしなかつたが、收入以上の浪費はしなかつた。何事にも身分相應の限度を越えて惑溺しないのは、當時の日本流の文士氣質から云つて賞讃される事ではないので、前借は云ふまでもなく、下宿料なんか蹈倒して酒色に耽るくらゐの意氣がなくては、面白い小說が書けるものぢやないと思はれてゐたらしい。

ところで、私が新進作家として出掛つた時分には、眞山青果氏と對立さゝれ競馬馬のやうに競爭させられたのであつた。青果氏は健筆家で、一年間に九回も中央公論に寄稿したことがあつた程だが、小栗風葉氏と師弟關係を保つてゐて、師に劣らざる酒豪で、生活振りも亂暴であつた。私は親しく交はつたことは稀れであつたがその放縱不羈の行動は屢々耳に觸れてゐた。岡山縣の漁村生れと、宮城縣の農村生れ（或は生粹の仙臺兒）とでは、性質が異り、生活態度も異るのが當然で、私の方が兎に角順調に文壇生活を通過し、青果氏は文壇の軌道から離れて逆境を經たのである。二人とも「花形」といふ名に不相應に、作品集が賣れなくつて出版者を失望させたが、賣れないのが當り前であつた。どちらも面白くない小說を書いてゐたのだ。私の方が型が小さく纏つてゐて、青果氏のは茫漠として

どこか大きい所があるやうに云はれ、花袋氏も私に向つて、さういふ意味の批評をして、「體質に由るのだね」と、輕く斷定してゐた。

私が青果氏の作品に感心したのは、後年の劇作であつて、「玄朴と長英」以後のものなのだ。氏が長い間の不遇を耐へ忍んで藝道に精進したことは、昔の面目を思ひ出すと不思議に思はれるが、そこに東北人らしい根強さがある譯なのか。氏の「西鶴研究」の如きは、微細を極めてゐるやうだが、かういふ學究的辛抱は私などの全然爲し得ない所である。

競爭者として對立さゝれてゐても、私は眞山氏の作品から何の影響も受けず刺戟も得なかつた。彼は彼、我は我と思つてゐた。當時最も親しくしてゐた知友のうち、新進作家では小川未明君や近松秋江君などが、思出も多いのであるが、私の作品に對する批評だけについて云ふと、抱月花袋秋聲など先輩の評語は別として、同輩の口から洩れたり筆で示されたりしたものでは、秋江君の評語が最も私の心に觸れてゐたのである。青果泡鳴の批評などは、褒貶如何に關はらず身に染みて感ぜられなかつた。

秋江氏は私と同樣の岡山縣人である。早稻田で、史學科と文學科に三年間、私などゝ一しよに學んだ。同級生のうち二人だけが文學に志した。さういふ譯で私をよく知つてゐるのであるが、氏は小說批評について、特異の眼識をも有つてゐた。だから、氏は誰よりも

私の小説の弱點を知つてゐた筈だ。私の初期の或短篇に、「守宮が軒燈を匐つてゐる」と書いたのを讀んだ秋江氏は、「春になるとさういふことがあるが、あの小説の季節には無いことだ」と端書で知らせて來た。國木田獨歩が或時「君の株虹といふ小説は面白かつたが、晩の虹が西に出るのは間違ひだ。僕は淀川で綺麗な虹を見たことがあつた」と云つたが、私の天地自然の觀察は甚だ粗漏なのであつた。或日秋江氏の家を訪ねた時、鹽鮭の茶漬を食べてゐた彼は、「君は鮭の鹽引を貧乏人の食物のやうに小說のなかに書いてゐるが、これはうまいものだ」と笑ひ〳〵云つた。が、成程鹽鮭の茶漬はうまいものなので、私はこの頃になつてその味はひを感得するやうになつてゐる。以上は瑣末な例であるが、私に描寫の技能の乏しかつたことや、實世間の平凡な日常生活の味はひを知らなかつたことなどは、秋江氏は誰よりもよく知つてゐた。さう云ふと、氏は私の作品を全然取るに足らない駄物であると思つてゐたらしく見られるが、必ずしもさうではなかつた。自分の感じを胸にしまつて置けない性分の秋江氏は、私の作品についても、手紙や端書で讀後感を知らせて來る事がよくあつたが、時々は推讃の熱意を洩らしてゐることもあつた。それは大抵肯綮に中つてゐるやうに私には思はれた。

あの頃の文學青年とも云ふべき多くの知友のうち、最も印象深く思ひ出されるのは、平

尾不孤といふ恵まれざる生涯を過した代表的文學青年である。歐洲戰爭を境界線として、その前と後とでは、日本の社會相がどの方面でも大いに相違してゐるのだが、文壇の光景も非常に違つてゐる。以前はみんな貧乏な見窄らしい生活をした。この頃の文學青年は、日常どんな風にして暮してゐるか知らないが、あの頃は、喫茶店はなし、麻雀倶樂部もなし、映畫館もなかつたし、我々の簡單な娯樂は寄席通ひくらゐであつた。そして、お互の家へ往つたり來たりして、雜談に耽り、當てもなく街上をぶらつくのが常例のやうになつてゐた。平尾君も私が青年期にさういふ種類の交際を續けた知友の一人であつたが、この人の面目が私には際立つて追憶される。それには親しさ懐かしさの感じを以つてゞはなく、痛ましい感じの湧上る思出なのだ。

或女學生にあたへた祕密の手紙を、或新聞で暴露されて、手酷しく筆誅された彼は、坪内博士の庇護の下に、その女性と結婚して、早稲田の出版部に奉職して、さゝやかながら平和らしい生活をしてゐたやうであつたが、その後、金港堂の「文藝界」の編輯員となつて稍々得意になつてゐた間に、過勞のためか、肺患に罹つて、葉山や小田原に轉居してゐた。原稿を賣りに、小田原から上京した留守の間に、妻君に逃げられたので、彼は誰かを手頼つて京阪地方へ轉住したが、貧乏と病氣に惱まされて、京都の下宿屋で孤獨でいたま

しい死を遂げたのだ。下宿屋を追出されて、京都での唯一の同情者であつた詩人兒玉花外氏と當てもなく町をうろついて、二條城のほとりで泣き倒れたことを花外氏に私は聞かされたことがあつた。京都滯在中に、讀賣の懸賞募集に應じて脚本を投稿したが、それは可成りにいゝ物であつて、選者の一人であつた私の推薦によつて百圓の懸賞金が授けられたのであつた。當時の平尾氏に取つては、殆んどこれだけが生活費であり治療費であつたらしい。ところで、それほどの有難い金であつたに關はらず、その作品を、新派俳優によつて眞砂座で上演した時、新聞社から作者に通知しなかつたのを、彼は憤つて、私に宛てて詰問して來たのだから面白い。私は「何を云つてやがるんだ」と云つた調子の返事を出したゞけであつたが、今日になつて考へ直すと、當時の平尾氏は、たとへ窮してゐても、文學的自尊心を保つてゐたので、今日の文壇の常識から云つても、氏の詰問は當然であつた譯だ。

新聞で私行を攻撃された事。金港堂の應接室で或青年作家に唾を吐き掛けられたこと。小田原滯在中、讀賣新聞所載の小杉天外氏の小說賞讃の端書投書を、幾枚も書かされたこと。脚本上演に當つて、作家たる彼の無視されたこと。私は、虐げられたる未完成の文學者として、平尾不孤をよく思ひ出すのである。追悼會は一度、花外氏の主唱で牛込赤城神

社境内の清風亭で催されて、不孤の實兄だか從兄だかを招き、五六人の友人が集つたが、この追悼會がまた異色ある會合として私の記憶に殘つてゐる。來會者は一人として故人に對して愛情を含んだ好意ある思出を語つたものはなかつた。みんなが次から次へと何とか云つて故人をケナすと、他の者が直ぐにそれに同意するばかりで、非難に對する一人の辯護者もなかつた。それで、招かれた遺族の代表者も、「今晩は皆樣お忙しい所を弟のために手厚い追悼會をお開き下されまして」云々と、お禮を述べられもしなくつて、「あれは變な人間でして」とお詫びをするやうな有樣であつた。——不孤追悼會に鑑み、私は他日私のための追悼會が斷じて催されざることを切望して置く。そんなものを企てる知人があつたら、その發起者に呪ひあれ。

自己の體驗や自己の見聞を、有りのまゝに書けといふ田山花袋主唱の創作態度は、權威をもつて文壇を風靡したので、自信の強い泡鳴にしても花袋の文學觀によつて覺醒したのである。「耽溺」をはじめとして、自分の行動をそのままに書いて、これを小說の正道とするやうになつたのは、田山君の感化だらうと、ある時泡鳴に訊くと、當人もそれは正直に認めた。たゞ花袋の平面描寫には不同意で、自分のは立體描寫だと云つてゐた。花袋の「生」「妻」「緣」、藤村の「春」「家」、秋聲の「黴」など、有名な長篇は、描寫が平面だか

立體だかは別問題として、「有りのまゝ」といふ主義に立脚した自傳的小說であるらしい。泡鳴秋江の作品も多くはさうであると思はれる。私も花袋の熱心に唱道した文學觀の心醉であつて、「有りのまゝ」派の一員であつた筈だが、實際の自分の作品には、「有りのまゝ」說に從つたものはそんなに多くはなかつたと云つていゝ。私の作品のうちでは比較的長いものである「二家族」にしても、私の育つた父祖の家の實景をそのまゝに叙したものと思はれてゐたやうだが、あれも私の少年期の見聞を根據としただけで、多分は空想の產物なのだ。「微光」にしても忠實なる事實の描寫ではない。

私は、早稻田の學堂で坪內先生の沙翁講義を謹聽してゐた時、沙翁は全く自分を離れて、さま〴〵な世間の有樣やさま〴〵な人間の行爲を客觀的に現はしてゐると云はれるのを、文學の極致として心に留めたのであつたが、しかし、自分を沒却して他人の事ばかり寫すのは詰らないぢやないかと、竊かに疑つてゐた。小杉天外氏の寫實主義も、自分をのけ物にした世間の寫實では、書くのに張合ひがないことはないだらうかと、私は竊かに疑つてゐた。それで、「有るがまゝ」描寫を正しい小說作法として心掛けながらも、私の作品は、自己の主觀に支配された勝手な產物であつた。だから、世の中の眞相を冷靜に如實に描寫してゐると、明治文學史などに定評を下されてゐるのを讀むと不思議な感じがする。

擦つたく思ふこともある。かつて小川未明君が突如として「君はロマンチストだよ」と云つたことがあつたが、ロマンチストか否かは知らず、過去の私の作品は、客觀的分子には乏しく、むしろ主觀的傾向のものであつたと、私は心の中で自作自評を試みてゐる。

私は、年に三四回の中央公論特別號に毎回寄稿するのが、いつとなしに慣例となつてゐた。これが文壇に於ける私の地位を保つ上に大いに役に立つた事は云ふまでもなかつた。體力が弱く感興も乏しかつた私は、締切間際になつて徹夜して執筆したことなんかは一度もなく、三枚五枚とぽつり〳〵書溜めるのを例としてゐた。「微光」は、十月發行の秋季增刊のために書いたのだが、期日が切迫してゐたので、珍らしく稻毛の海岸へ出掛けて筆を急ぐことにした。行掛けに西片町の中央公論社へ寄つて瀧田社長に會ふと、社長は、絣の單衣着流しで、信玄袋を提げたゞけの私の旅姿を見て、「へえ、このまゝでいらつしやるんですか。お氣樂でよう御座んすなあ」と、面白さうに笑つた。稻毛では、海氣館の離れに一週間滯在したのだが、九月の中旬で、季節の動搖が、日本趣味相應の詩情をそゝつた。中秋の滿月が松林を照らしてゐた。久振りに吸ふ汐風はすが〳〵しかつた。疲れると散步したり玉突をしたりして、締切までに原稿紙百二十枚ばかり書いた。時間があつたらまだ書き續けられたのだが、期限が來て催促されたから直ちに完結にして、歸京した。これが

私の執筆態度で、依頼者に期日延長を申出たことは殆んどなかつた。これは、私には、書きたくてたまらないことが腹に滿ちてゐる譯ではなかつたので、何處で區切りをつけても殘念に思はないためであつた。

この原稿を讀んだ瀧田君は、直ちに俥を飛ばして私を訪問して、唾を飛ばしながら激賞したので、私も安心したのであつた。作家にかゝる幸福を與へた編輯者は古來瀧田樗陰一人であつたと云つていゝ。伯牙琴を鼓し鍾子期これを聽く、と云つた趣きがあつたので、眞の伯牙でも、賢の伯牙でも、藝術的悦樂を感じさゝれたのであつた。「微光」は私の作中では珍らしく色つぽいところがあつたゝめか、發表後好評嘖々で、今まで私の小說才能を蔑視してゐた二三氏も、私を見直すやうになつて、新たに私に向つて讃辭を注いだやうな有樣であつた。しかし、私が批評家の立場から見ると、この小說は通俗味の勝つた淺薄な作品であつたのだ。秋聲氏や秋江氏はさう思つてゐたらしかつた。私の「微光」系統の作品にも、もつとすつきりした氣持のいゝ小品が幾つかあつた筈だ。

「微光」は、しかし惡作でもなかつたであらうが、それから數年後に書いた「心中未遂」は、通俗小說の出來損ひのやうな、甚だしい愚作であつた。瀧田君は、昭和勞頭の傑作だと賞讃してゐたが、彼の眼識も當てにならないことが多かつた。隨分詰らない作家に惚込ん

で引き立てようとしたこともあつた。由來藝術品の優劣は角力の勝負のやうにハッキリしたものではなく、藝術家の人氣は、作品の眞の出來榮えに基くとは限らず、藝術家自身、運に任せて諦める外無いやうなものだ。

「微光」を緣として述懷すると、私は多數の作中に、一人の女性をも明晰に描寫してゐないのである。西洋の小說を讀むと、いろ〳〵な女性の姿を、心身とても、眼前に生きて動いてゐるやうに巧みに描いてゐる。ツルゲーネフ作中の女性は、眞實のロシアの女性ではなくつて、作家の揑造した女性であると、ドストエフスキーはケナしてゐるが、空想の產物にして、あれほど明かに表現されゝば結構で、創作家たる名譽にふさはしいのである。明治以來の日本文壇には、寫實にしろ空想にしろ、女性を活けるが如く描きだした作家は極めて稀れなやうに私は思つてゐる。多數の作家は、女性をたゞ男性の相手に使用して、さま〴〵な述懷を試みてゐるのだ。大町桂月氏が、「千圓も金（遊蕩費の意味）を費つたら多少世の中が分る」と云つたことがあつたが、ここに、明治文學者通有の卑俗な人生觀の一端が洩らされてゐるとも云へるし、あの頃の文壇人が今日に比べて如何に貧乏であつたかの例證ともすべきである。「少しは女遊びをしなければ浮世の味は分らない。面白い小說は書けない」とは、文壇の常識のやうになつてゐたらしい。しかし、財嚢が淋しいから豪奢な遊

びの味なんか經驗されよう筈はなかつた。千圓と云へば、その頃はたやすく得られる軍用金ではなかつた。明治時代は藝者の全盛時代であつたが、西洋で名女優を描いて、絢爛たる生活光景を浮動させてゐる小説に比すべき藝者小説は一篇もなかつた。神樂坂で遊んで、場所だけは柳橋に變更したやうな小説がよく現はれてゐた。紅葉山人の「三人妻」は評判はよかつたやうだが、文章に艶があつて日本傳統の名文のうまみを傳へてゐるだけで、豪奢な生活振りも、たゞ型だけを示してゐるに過ぎなかつた。森田草平氏が鷗外の「百物語」を評して、巨萬の富を蕩盡した某大盡の心境はこの作家に分るまいと云つたのは、適評であつた。

小説家は畫家とはちがひ、モデルの行動や心理を如實に寫すことは困難なのだが、たとへ、その描寫が正確であつても、モデルから好感を寄せられることは、滅多にあるまい。自然主義流行後には、誰でも小説に書かれることを嫌つてゐる。私は、「友情」と題して、自分の接觸した範圍の平尾不孤君の面影を描いたくらゐなもので、知友をモデル扱ひしたことはなかつた。當らず觸らずのことが斷片的に作中に出てゐる程度である。作家同士で相手のことを互に書くのは共喰ひ見たいなものでいゝ結果を齎さぬものらしい。藤村氏や花袋氏は、隨分友人を題材としてゐて、それも、極めて和やかな態度で、好意たつぷり

で遠慮しい〳〵描いてゐるに關はらず、モデルの方では快く思はなかつたやうだ。或忘年會の席上で、柳田國男氏が田山氏に向つて、いろ〳〵に小說に書かれる不平を述べてゐた。自分が花袋好みの人間に作上げられるのがいやだと云ふ意味らしかつた。田山氏は默つて恐縮してゐた。それにつけても、私は「有りのまゝ」がいゝとしても、モデルに氣を兼ねて書くくらゐならば、それよりも、空想の人物を取上げて、思ふ存分に、遠慮なく書く方が氣持がいゝやうに思つた。「スバル」に連載された鷗外の長篇「青年」のはじめの方に、私らしい人間がちよつと出てゐると或人に注意されたので一讀したが、成程私の事らしかつた。小山內薰が何かのはずみで座興として、例の面白い口調で、鷗外先生にお話申上げたのを、鷗外が作中に利用したのだと、私は直ぐに勘付いて、後日小山內君に會つた時にその事を話すと、彼はイエスともノーとも云はずに笑つてゐた。兎に角、他人から聞いた話を鷗外は鷗外らしくこなしてゐるのが、私には面白かつた。或作家を研究するに當つてかういふことがあると便利なのだ。同じ話を聞いても、取扱ふ作家次第で趣きを異にするので、私自身の事が、たまに誰かの作中に出てゐるのを見るたびに、逆に私の方からその作家の心境を觀察し得られるのである。

私の筆が稍々自由に動きだしたのは、「微光」なんかを書いてゐた時分からで、その頃ま

では筆が重くつていつも難渋してゐた。頭の中で何か考へてゐても、それを思ふやうには表現されないのでいつも苛立たしかつたが、頭の中の考へだつて大したものではなかつた。私の作中の人生觀だの思想だのが物々しく批評されることもあつたが、特殊の思想があつた譯ではない。私は、明治以後の文學者の人生觀と云つたやうなものでは「妄想」に現はされてゐる森鷗外の感想に最も共鳴を感じてゐる。それで、十餘年來折に觸れては、あの小篇を讀返してゐる。しかし、共鳴を感じてゐるとは云へ、實際の私自身があゝいふ考へを堅く保つてゐるのではない。「塵埃」その他の初期の短篇について、片上天弦君は、たびたび好意ある批評を下してくれたが、私の作中に枯れ切つた人生觀が宿つてゐると評されたこともあつた。三十歳になるやならずで枯れ切つた考へを有つてゐるのは變だが「諦めの人生觀を抱いて安んじてゐる」と多くの批評家から定評の如く云はれてゐたのも、私として首肯し難いのである。淋しく諦めたやうなことを、をりをり作中に仄めかしてゐるにしても、それははかなく消える空想の影であつて、私はまだすが〳〵しい諦めの境地を知らない。二十代に迷つてゐたと同樣に六十に手の屆いた今でも迷つてゐる。變化は上つ面だけで人間の精神の根柢は變化のないものだと、他人については知らず、自分についてよく知つてゐる。我人ともに環境に順應して、上べはさまざまに變つて生存を續けるにして

も、根柢は同じやうなものではないだらうか。そして、私の抽象的懐疑・妄想的疑惑のうちに、フロオベルや、ウオーター・ペーターや、或は森鷗外のやうに、學問藝術に慰藉を求めることは、私の一生にもないでもなかつたが、その慰藉にしても私にはさう強烈でも濃厚でもないやうだ。或は煙草と同程度かも知れない。

それで私は、遊蕩兒たる資格はなかつたやうなものだが、如何なる男性でも相手次第でどんな惑溺の境地へでも、引きずり込まれる危險性は有つてゐるのではないかと、いろんな人の身の上を見るにつけて推察されるので、我々多くの者は、人生の途上でさういふ女性に出くはさないために、平穩凡庸に過されるのである。「石部金吉」だつて、絶對に石のやうな鐵のやうな素質を持つてゐる筈はないのだ。

それで私は遲れ馳せに形式的手續きによつた結婚をしたのであるが、何の深い考へもなしに取結んだものでも、後から振返つて見ると、それは自分の一生に極めて重要な關係を及ぼしてゐるのである。人は生活の上で誰の感化をよく受けてゐるか、と訊かれる時、えらさうな人間の名を擧げたがるものだが、本當は五年十年と同棲してゐる妻（或はそれに匹敵する女性）から受けた感化が最も重要なのではなからうか。感化の有樣を微細に見分けることは困難だが、誰でも本當に自己批判をする時には、それは輕視されないことだ、

と思ふ。假りに、同棲者に對して憎惡を覺えてゐるとしても、憎惡してゐるがために一層影響を蒙るのである。同棲者が柔順であり或は痴鈍であつたにしても、そのために感化力が乏しいとは云へないかも知れない。そして、作家が描いた女性のうち、同棲者である妻君を描いたのが最も眞に迫つてゐる筈で、實際自然派系統の作家は、藤村花袋秋聲泡鳴など皆、作品中にそれ〴〵の同棲者を巧みに描出してゐる。しかし押詰めて考へると、妻の見たる夫、夫の見たる妻が果して、眞相を現出してゐるのだらうか。相手の人となりの本體を眞に摑んでゐるのであらうか。「知らぬは亭主ばかりなり」といふ諺さへあるのだ。

我々の處世上の知識も、人間の心理の動き方をも、いつとなしに兩親兄弟夫婦近親から學んでゐるにしても、自分の身に緣の深い者を客觀的に有るがまゝに描叙するのが、甚だ困難に思はれるのは私ばかりではないらしい。「泥人形」だの「入江のほとり」だの、身邊の事相を無造作に書き流したのは、私の作品中でも異例とも云つていゝもので、文壇の評判はよかつたのだが、私はその作風を續ける氣にはなれなかつた。明治末期から大正の初めにかけて、谷崎潤一郎長田幹彦などの、濃艶な色彩を具へた新作家が現はれ、白樺派の貴公子文學も多少の清新味を認められ、自然主義一派の影は次第に薄くなつたが、私は兎に角寄稿する場所に事缺くことはなかつたので、結婚後の單調な生活と同樣に單調な冴えない作品

を書き續けた。私の結婚と同じ年同じ月に、日吉町に「プランタン」が最初のカッフェとして開業されたので、私は散歩の次手に偶然そこへ寄つたのが緣となつて、屢々出掛けるやうになつた。美術家連中の思ひ付きで巴里のキャッフェに摸して創設されたといふ事に興味を有つた譯だが、今から回顧してさしたる懐かしみも起らないから不思議だ。そこへよく集つてゐたのは、多くは青年洋畫家で、文學者では小山内、押川、吉井、生田と云つた人々を記憶してゐる。名前もフランス語の「春」のキャッフェで、青春の畫家文人などがさまざまな珍らしい名前の西洋酒を飲み、藝術を語り、戀愛を談じ、五に巫山戲たり、喧嘩もしたりして、春宵秋夜を面白可笑しく過したことは藝術壇の歷史的事實と云ふべく、「プランタン」は、史蹟としてあの場所に石碑でも建てゝ置くべきである。フランスやイギリスなどでは、かういふ由緒ある所は案内記にも記されて、旅人をして追懐の詩的感情を恣まゝにさせるのであらう。しかし、私が實際に接觸した記憶によると、「プランタン」もむしろ殺風景なものだつたので、藝術的空氣なんか大して漂つてはゐなかつた。たゞこのカッフェについて私の心に浮んで感慨を催させるものは、あの時分あそこで會つた連中の多くがこの世を去つて、生殘つてゐる者の甚だ少くなつてゐることである。

五

本郷、小石川、牛込の區内をたび〳〵轉居してゐた私は、歐洲大戰爭中に芝方面に移轉した。どこも粗末な小さな借家であつた。當時の文學者で、自分の家を持つたり預金帳を持つてゐたりするのは異例であつて、殊に私は、衣食住のうち衣と住とには甚だ無頓着であつたが、しかし、小さな家に住んでゐると、あたりの物音に頭が惱まされるのには困つた。新聞社へ通つてゐた時分には左程には思はなかつたが、退職後原稿書き專門となつて、終日机の前に坐つてゐると、近所の話聲や子供の泣聲、時としては便所の音までも耳に入つて、神經の焦立つことがよくあつた。(當時ラヂオのなかつたゞけは、まだしも幸福であつたが)保健術と云つても散步ぐらゐなもので、毎日幾度も近所を步き廻つた。さして都會生活を享樂してゐる譯ではないのだから、空氣のいゝ海邊か、せめて郊外に居を構へたらよささうにも思はれたが、思ふばかりで實行はしかねた。何故ともなく私は都會が好きだつたのだ。

をり〳〵短時日の旅行はしてゐたが、旅行はさう好きでなかつた。學生時代の暑中休暇

に興津や葉山に行つたことはあつたが、それは遊覽のためではなく、それらの地に開かれて居た基督教夏季學校に出席するためであつた。二度とも内村鑑三氏の講演を目當てにしてゐたので、氏のカーライルに關する連續講演によつて感激さゝれたことに比べると、駿河灣の風光などは物の數ではなかつた。聽講生一同の三保ノ松原遊覽の時でも年少の私は、「豫言者」に接してゐるやうなつもりで、内村先生の後にくつゝいて、その一言一句一擧一動を聞き洩らさず見のがさぬやうに注意してゐた。先生が粗末な墓口から一錢銅貨を出して氷水を飲むのを、意味ある事實として目を留めた。新島襄未亡人に對して無遠慮な惡評を下すのをも謹んで耳に留めた。無論先生の方では私の存在を認めてはゐなかつたので私は直接に先生と一語も話を取りかはしたのではなかつた。

私は自然よりも人事に興味を有つてゐた。同宿の友人から日光見物の同行を勸められても、その旅費で芝居でも觀に行つた方がよさゝうに思はれてゐた。旅行していつも困つてゐたのは、夜眠れないことだつたので、よく眠られたなら旅行もつと樂しめたかも知れなかつた。晩年に西洋漫遊をした時には、今夜はどんなホテルに泊れるかと興味になつたが、若い時の日本内地の旅行では、宿屋に入るまで不安に驅られるのが例となつてゐた。神戸の讀者懇親會に出席した夜は、停車場の前の旅館の表の二階に泊らされたが、夜中汽車

の轟音に累はされて一刻も眠れなかつた。翌朝、女中にその話をすると、女中も同情して、「私なども、一日ぐつすり眠らせて貰ひたいと思ひます」と云つた。それから奈良へ廻つて、先づ一眠りするつもりで、嫩草山の麓の閑靜らしい宿屋へ入つて、部屋へ通されると直ぐに寢そべつて手足を伸したが、そこへ、前に案内した女中が再びやつて來て、「この部屋は約束濟みだ」と云つて、私を追立てた。滿員で空部屋はないと云ふのだが、まだ午前中で、見渡す所客の影は何處にも見えなかつた。仕方なくなく退却して、大佛通りの道者宿へ入つて、二階の雨戸を鎖して貰つて、一睡してやうやく生氣を吹返したのであつたが、私は投宿拒絶の憂き目には屢々會つてゐる。上司小劍氏同樣私も拂ふものはキチンと拂はなければ氣の濟まない人間なので、宿屋としてはこれほど安全なお客はない譯なのに、それを斷るのだから、宿屋の番頭や女中や、或は主婦の目の利かないことが推察される。彼等に限らず、名代の待合や料理屋の主婦なんかは、人を見る目が傑れてゐると云はれて、その傑物に紹介されたことも一二度あつたが、私には彼等の眼光は瑣末な皮相な點だけを見るべく訓練されてゐるやうに思はれた。

私は旅中では、寢床に就いてから按摩を取らせるのが何よりも樂しみであつた。一日名所古蹟の見物をして宿に歸つてからは、ゆつくり晩酌を樂しむのが普通の漫遊者の所行で

あるらしいが、酒の嫌ひな私にはその樂しみが得られないばかりでなく、女中にお給仕されるのでは落着いて食事もされない。日本宿では女中が身の廻りの世話をしてくれて家庭的でいゝと、田山花袋氏が云つてゐたが、形式的の世話なんか煩い思ひのされるだけだ。それで私は、日本内地の旅行で、宿屋に關しては、懷かしく氣持よく思ひ出される所は殆んど無かつた。

近年初夏の頃北海道を旅行した時、札幌は住み心地のよさゝうな土地だと思つたくらゐで、數十年間のをり〳〵の旅行に定住の地とすべく心惹かれた所は無かつた。何と云つても東京であるときめてゐたのに、偶然大磯なんかに移つて、十數年間そこに腰を据ゑることになつた。世界大戰中から戰後にかけての日本の好景氣は、遲れ馳せに日本の文壇人の生活をも向上させたのだが、私を東京から放逐もしたのであつた。

開戰の報道を私は和倉温泉の宿屋で讀んだ。常例より長く、二週間以上も北陸道を旅行して暑さに惱まされ、和倉では、鹽分の濃厚な温泉に刺戟されたゝめ安眠が得られず、いつものやうに不愉快な思ひをして歸途に就いたのであつた。無論この戰爭が我々の一生にまで大影響を及ぼさうとは氣付く筈がなかつたが、この開戰のために、あの時の旅行が特に記憶に殘つてゐる。北陸道については、昔の新橋驛の待合室に、早くから加賀の山中温泉

の蜈蚣橋の寫眞が懸つてゐるのを、私は停車場へ行くたびに仰ぎ見て、それを温泉場の宣傳繪であるとは氣付かず、かういふ美しい景色は一度見たいものだとかねて思つてゐたのであつた。行つて見ると、日本の谿谷の美をよく知らなかつた私の目には、可成り美しく映つて多年の望みが達せられた。しかし橋の袂の茶店で、置き古しのサイダを飲みたくもないのに飲んで、十分ばかり溪流を眺めたゞけであつた。この山中温泉の宿と和倉温泉の宿では、文學者として少しばかり優遇されたらしかつたが、それは私に取つて珍らしいことであつた。宿帳記名後、下等部屋から上等部屋へ移されるのと、色紙短冊の揮毫を需められるのが優遇の現はれであるが、それも有難迷惑のやうなものだ。

世界大戰の進行するにつれて物價の騰貴してゐたことは、原稿紙を買ふたびに切實に感ぜられたが、原稿料の値上は遲々としてゐた。原稿料と云ふものは、先方の給與してくれるものをおとなしく頂戴するのが、文壇の定則のやうになつてゐて、たまに作家の方から増額を迫つた話を聞くと我々は異樣に感じたのであつた。さういふ作家は惡人のやうに感ぜられることもあつた。作品の評判がよくなると、雜誌社の方で次第に報酬をよくして呉れるのを、有難く受取るべきもので、評判を鼻に掛けて此方から増錢を請求するのは、雲助無賴漢の所行のやうに思はれてゐた。私などにそんな眞似の出來得べくもなかつた。麻

布我善坊の隣宅の前には、貿易關係の會社に奉職してゐる青年が住んでゐたが、其處へは、百貨店の配達車が屢々訪れた。其處の、人のいゝ、しかし、あまり利口ではなさゝうな若い妻君は、見るから得意然と振舞つてゐて、「自分の家を建てたいんですけど、建てるくらゐなら、自動車の出入り出來るやうな家を建てますわ」と、私の家に來て話したりした。或日勤め先から元氣よく歸つて來た主人が、ポケットから中元のボーナスらしい紙包を出すと、細君は跪いて恭々しくそれを受取つてゐた。しかも、私は近所のさういふ光景を見ても、羨ましいとは思はなかつたが、全體文壇人が世間の好景氣の分配に與るべきものとは豫想してゐなかつた。それで、或時中央公論社へ原稿を持參した時、物價騰貴の埋合せとして、一枚三十錢增額すると云はれると、ひたすら感謝する氣持になつた。今わざとこんなことを云つて興がるのではない。實際さういふ封建的精神に捉へられてゐたのである。

だが、世間の好景氣の結果、新しい雜誌が續出して作品の需要が多くなり、新作家も續出し、それ等新進の才人は、舊習に捉へられず、氣輕に時世相應に原稿料の要求をもしだしたので、在來の作家も自らその恩惠に浴することが出來た。

文壇がさういふ物質的好運に向ひかけた時分に、私は長い間の執筆に倦んだ。相變らず雜誌社の依頼はあつたにしても、書き榮えのしない同じやうな事を繰返し卷返し書き續け

るのが詰らなく思はれだしたので、暫く故郷へ引込まうかと決心した。年齢も初老と云はれる四十歳に達してゐた。その頃大阪朝日の短篇小説懸賞募集の選者の一人となつたが、私の外に有島武郎厨川白村兩氏も選者であつた。それで、慰勞のためか何かで三人は紅葉館で晩餐を饗せられた。雜談の間に三人の年齢が一つづつ違つてゐることが分つたが、有島氏も厨川氏も確乎たる文學觀や人生觀を有つてゐるらしかつた。當時の文壇に於ける兩氏の活躍は華やかで、私のやうにくすぶつてはゐなかつた。それで自分の心構へは、兩氏とは餘程異つてゐるやうに、ひそかに感じながら、間もなく歸鄉の途に就いたのであつた。數年後に、二人は相繼いで不慮の死を遂げ、私は生き永らへてゐる。

半年あまり田舍に蟄居してゐたが、故鄉生活は自分の氣持と調和する筈はなかつたので、心に何の變化もなく、住み馴れた東京へ歸つて來た。ところが住むべき家が見つからなかつた。今考へると嘘のやうだが、どんなに努力して搜しても空家が見つからなかつた。大抵の家なら辛抱するつもりであつたが、當時は異常な好景氣の結果か、貸家は著しく缺乏してゐた。それで、梅雨季節の一ケ月を伊香保で過し、眞夏から十月のはじめまで輕井澤で暮して東京に歸つて來たが、依然として貸家拂底でどうにもならなかつた。窮餘の思ひ付きで、中央公論社長に案內を賴んで、社長の別莊のある大磯へ空家搜しに出掛けた。

輕井澤と云ひ大磯と云ひ、外人や富豪の贅澤な別莊地で、我々の住むに相應しい所ではないやうにかねて思つてゐたので、さういふ土地に居を定めるのは結構な譯であつたが、私は好んで移轉を企てたのではなかつた。數ヶ月間借家住ひをして東京に歸つたが、依然として空家は見つからなかつたので、思ひ切つて、手頃な賣家を買つて大磯に安住することにした。夏は涼しく、冬は溫く、閑靜ではあつたが、肺患者でないのにこんな所に居る必要はないといつも思ひながら、今日の時世に、井戸もなくつて買ひ水をするやうな非文化な所に住む愚かさを感じながら十餘年をうか〳〵と其處で過した。日の經つのは早いもので、私は大磯なんかにゐた間に老いた。田舍生活を好まない私も、關西の田舍で育ち關東の田舍で老い、自然自分の筆も、終始田舍びることを免れ得なかつた。

この土地では話相手は一人もなかつた。夜の町は暗くつて散步も出來なかつた。昔の大磯全盛時代には華族富豪大官人の別莊が連なつてゐたらしく、伊藤公の滄浪閣や旅館の壽龍館の賑はひなど昔の夢を事々しく吹聽する老人もあつたが、それは田舍者の思ひ過しで、大して豪奢な世界が存在してゐたのではなかつたやうだ。私は、銷閑の手段がないので、小說の外に評論でも隨筆でも、戲曲までもぽつり〳〵書き續けた。文壇の黃金時代であつて原稿料はますますよくなり、註文も絕え間はなかつた。しかし大磯移轉後は文壇人との

交際は次第に疎遠になり、どの方面にも新しい友人は得られず、本當の書齋生活を續けるやうになつた。作家として成るべく現實の社會に接觸してゐるのがいゝのか、離れてゐるのがいゝのか、私は自分の經驗によつて判斷しかねてゐるが、元來主觀的であつた自分の作品は、孤獨生活によつてます〳〵主觀的になつたのぢやないかと推察される。

最初大磯に借家住ひして間もなく、朝日新聞の改築披露の宴會と花袋秋聲五十年祝賀會とに出席すべく、日歸りで東京へ出掛けた時には、片道一時間五十分が非常に長いやうで、こんな所から每日東京へ通勤してゐる人のあるのが不思議なやうであつた。朝日の宴會の會場は帝國ホテルであつて、當時、飛ぶ鳥も落すといふ比喩の相應はしいほどに威勢隆々たる原敬首相が、祝辭を述べた。昔原氏が大阪每日の社長として朝日に對抗すべくさま〴〵な策略（藝人の投票など？）を廻らしたが、望みが達せられなかつたことなどをお愛嬌に話して、「國家のために御努力ありたし」と祝辭を結んだ。演說は上手ではなかつたが、泰然自若の態度を示してゐた。參會者はすべて、偉大なる首相に敬意を寄せてゐるらしく私の目に映じた。「精力絕倫ださうです」と、或社員が傍人にさゝやいてゐた。朝日の社長も、國家の爲めに努力することを誓はれた。

私は、菊五郎などの出演してゐた餘興をも見殘して、この盛大な宴會場を出て、早目に

歸途に就いた。都會は宵の口であつても、大磯は暗黑の夜であつた。新轉居地に住み馴れない妻は、門の外に立つてゐた。茶室なんかのある古めかしい、室數の多い家の中は陰氣で、亡靈でも出さうであつた。日本趣味の古い藁家だから、天井から草鞋蟲が頻りに落ちて來るし、秋も末であるのに蠅が食卓に群がるやうな有樣であつた。この借家の前は、統監道路と呼ばれ、伊藤統監が滄浪閣へ往復する近道として造られたさうだが、さうすると、世に時めく人々の馬車や俥の音を、この廢屋の前住者は四季をり〳〵に耳にしてゐたのであると、私は小說的感慨に耽つたりした。

朝日の宴會で他人の演說を傍聽した私は、文壇の兩先輩の祝賀會では、自分で演說をしなければならなかつた。花袋氏には長い間教へを受けてゐたし、引き立てられてもゐたのであり、秋聲氏にも長い間親しく交つてゐたのだから、かういふ場合に一片の祝辭を述べるのは、私として當然の義務であると感じたので、幹事の依頼があると直ぐに引受けた。普通一般の考へから云ふと、演說や講演くらゐ何でもない事なのだが、私としては、誇張して云ふと、獄門にさらされるやうなものなのだ。多數の聽衆を前して、演壇に面皮をさらして、彼等を喜ばせることを喋舌るのは、私には異常の苦痛となるのだ。聽衆を無視して、枯木の前に立つてゐる氣になればいゝ譯だが、それは嘘だ。私は讀者を豫想しないで

原稿を書いたことがない。

この祝賀會は、世間に對する文壇の示威運動であつたやうに追想される。當時は新雜誌續出原稿料急騰の際で、在來の作家は、思ひもそめぬ好運をひそかに喜んでゐたのであらうが、新進氣鋭の作家は、勢ひに乘じて、社會的に文學者尊重の氣風をも煽り立てんとして、花袋秋聲を擡上げんとしたらしかつた。明治以來何かにつけてお手本として來た西洋の風習に依つて見ると、理論上、文學藝術は優遇され尊重さるべきものなのだが、理論が實際となるのは一朝一夕の事ではない。二つの會合に出席した私は、來賓として一片の祝辭を述べたゞけの原敬氏の威力を、參會者の多數が感じてゐたのを目睹した。文學者の筆の力なんか何ぞ云ふに足らんやと感ぜられた。西園寺公の文士招待の後期には、永井荷風氏も仲間に加へられたが、氏は、何かの雜誌に「賣文卑賤の徒」が宰相に招かれるの光榮を戲文調で書いた。これについては、憤慨者が多く、岩野泡鳴の如きは私に向つて「永井は怪しからん、會つて注意してやらう」と、鼻息荒く憤つてゐた。永井氏自身は、わざとそんな事を書いて興がつたのに過ぎなかつたのであらうが、案外眞相を穿つてゐたのではあるまいか。他人心あり、我これを忖度すと云つたやうなものだ。西洋を例にして見たつて、有名なナポレオンとゲーテとの會見でも、ゲーテの方が相手の鼻息をうかゞつてゐた

やうに、私の頭には印象されてゐる。

講演會場は有樂座で、宴會場は築地の精養軒であつて、小川平吉氏や柳原義光伯などをはじめ參會者は多數で、食卓演說に於ける柳原伯の藝術家尊重說なんか拍手喝采されたが、「文學者のない社會は砂の如く乾燥無味である」とか「これが有名な政治家や實業家の五十年祝賀であつたら、世間の名士が蟻が甘きに集まる如く寄つて來るのだが、日本の俗界では文學に理解がないために」とかいふ意味を含んだ言葉が述べられたのを聽いてゐた私には、この會も強ひて作られた祝賀會らしく思はれた。自然に華やかに賑やかになつたのではなさゝうであつた。しかし、有島武郎氏が、「文學者の五十年は正味の五十年だ。生れ落ちると同時に文學者としての生涯がはじまつてゐる」といふ意味の含蓄のある感想を洩らしたのは面白く、兎に角、五十年も文學者として生き續けて來た人は、當時では珍らしかつたので、それは何かの形で祝するに値してはゐた。しかも、その生涯は、島崎藤村氏が述べた如く、「艱難の生涯」であつたのだ。

この祝賀會のあつて以後は、文壇でも五十代は働き盛りと云つてもいゝやうになつたのだから、この會は今から顧みると厄拂ひの催し見たやうであつた。文壇人の五十年の生涯も內面に入つて見たら艱難の生涯であるのであるが、一兩年の間に、富豪安田善次郎氏が

大磯の別荘で兇刃に倒され、原敬氏が東京驛で脆くも殺害されたことを思ふと、どちらを向いても艱難は生物に附纏つてゐるらしい。その夜、大地震はあるし、我が閑靜な書齋生活に於ても、生の不安は絶えず感ぜられてゐた。文學について云つても、文壇全體が榮えてゐるのだから結構であつたが、プロレタリア意識は文壇の方面にも次第に浸入して所謂左翼的傾向は勢ひをましつゝあり、私などは時代おくれ扱ひを受けるやうになりだした。敢然としてそれに對抗した作家はなかつたやうだ。我々は時代の波に漂うて生を送つてゐるので、確信を持して世に闘つて勝つやうなことは、さう有るものではない。私は、生の不安を主觀的に見詰めながら、その氣持を戯曲の形に於て幾篇かに現はしたのであつたが、「光秀と紹巴」に於ては、實行家の生の不安と藝術家の生の不安とを現はしたつもりであつた。私が製作に當つて、藝術的燃焼を心に覺えたことが一度でもあつたとすると、この戯曲に筆を執つてゐた時であつたと云つていゝ。突詰めて考へると、藝術家なんてこんなものだと勝手に極めたのであつたが、それは私の淺慮であるかも知れない。

大地震の翌年の春、私はバラック建の東京病院で痔の手術を受けた。をり〳〵夫妻一しよに上京しても、日本宿に泊るのがいやだつたので、大抵日歸りにしてゐたが地震後に丸ノ内ホテルが建つたのを見て、これは手頃な宿らしいと鑑定して、そこに泊ることにした。

帝國ホテルには氣おくれがして寄りつけなかつたのである。そして上京の度に、築地小劇場を觀ては西洋近代劇に興味を感じてゐた。丸ノ内ホテルに泊つて小劇場芝居に感動し、上すべりの左翼文學思潮くらゐに脅かされてゐるなんかは、殖民地的藝術心境である。すべて安つぽい感じがされる。しかし、それだけ、まだ心に生氣があり、舊套に安んじてゐない所があつたのだ。自分勝手に解釋しながら西洋の文學藝術に對する憧憬は續いてゐたが、その時々のジャーナリズムの動きによつて私の文學精神は卑俗にされてゐたやうでもある。

瀧田氏逝去後、高野敬錄氏が中央公論編輯主任となつた時、氏は、私に向つて、何かいい思ひ付きはないかと訊ねた。文藝評論を連載したらどうだらう？ と私が何氣なく答へるとそれを私にやつて呉れと氏は依頼した。一應辭退したあと、二三回だけ試みることにして承諾したが、可成り評判がよかつたゝめに、切望されて長く續けることになつた。小說でも評論でも、一回讀切りのものを寄稿するのなら、評判のよし惡し、讀者受けの如何をさして考へなくてもいゝが、連續掲載となると、受ける受けぬといふことに累はされるのである。制作の心構へが卑俗になるのだ。評論でさへさうだから、新聞や婦人雜誌に小說を連載する場合には、無駄な苦勞をしなければならぬのであらう。私も、新聞小說を五六度

執筆したことがあつたが、柄になく讀者受けの小細工をするやうな氣になつたので、今思ひ出しても不愉快である。一度（大正元年頃）大阪朝日に寄稿した時には、三四十回で中止の厄に會つたが、それは筋立ての一般向きでない陰鬱なものであつたから、新聞ではさぞ迷惑したことであらうと、後で推察された。しかし、作家が、先方からの依頼に應じて、無い智惠を絞つて精一杯にどうにか書き續けてゐるものを、突然中止させるのは、新聞が屢々攻撃してゐる官權横暴以上な態度であると、自分だけでひそかに考へてゐた。創作力の旺盛でなかつた私は、中途で止めさゝれてもさして落膽せず、却つて重荷をおろした氣持になつたくらゐであつたが、しかし、私が後年新聞小説執筆に氣乘りがしなくなつたのは、あの時の不愉快な感じが私の頭腦にこびりついてゐたのが多少の原因となつてゐさうだ。あの時、大阪朝日が、しまひまでいやな顏を見せず書かせてくれて、「大變結構でした」と、悦しがらせの一つも云つてくれたなら、御當人いゝ氣になつて、新聞的長篇小説を續續書きだしたかも知れなかつた。中央公論で評論を連載しだしてから、小説の方がお留守になつて、雜論家のやうになつたのも、編輯者がそれを歡迎してくれたゝめであつた。要するに私などもジャーナリズムの波に漂つて、あちらへ行きこちらへ行きしたやうなものだ。戲曲も、「光秀と紹巴」を書上げると、一區切りがついたやうな氣がして、戲曲は自分

の本領とすべきものでないから、これでおしまひにした方がよからうと決心して、雑誌所載の感想錄に、左様明記して置いたのだが、雑誌社から熱心に頼まれると、それに甘えて腑甲斐なくも決心を飜して、なほ幾篇か書き續けた。いづれも氣抜けのした愚劣な作品である。かういふことは、私ばかりではない。また文學の方面ばかりではない。誰の上にでも、どの方面でゝも見られる現象で、さういふ所に凡人的人間味があると云つていゝのか。

小説の外に評論と戯曲と、私も多方面に文筆を揮つた譯だが、詩人らしい天分は全く缺けてゐるのか、和歌俳句の類では人眞似も出來なかつた。日本の文學者ともあらう者が、和歌の一首も發句の一つも心に浮ばないのは、不似合であるが、こればかりは如何ともなし難い。悲喜哀歡の情を和歌の形式で現はしたいと思つたことは一度もなかつた。

六

園十郎は、五十過ぎの老境に達するまでは、莫大な借金を背負つてゐたゝめ、高い給金を取りながら貧乏してゐたさうだが、脩我の狂言を演ずる時には、「おれも富士山の見える

所に別荘を造つて住んで見たい」と、若い自分から空想してゐたさうだ。それで晩年に借金を整理し、生活が豊かになつて茅ヶ崎に別荘を設けるに及んで、過去の空想が實現されて大いに得意であつたらしい。私は、大磯や輕井澤は、貴族富豪外國人の住むべき土地で、我々の近づくべからざる所であると思つてゐたのに、その大磯に定住することになり、輕井澤でも五六度も夏を過したのだから、名目の上では望外の贅澤を經驗した譯だが、贅澤の内容は甚だ貧弱であつた。私は、どういふ意味に於ても「豪奢」とか「華美」とかいふ言葉にふさはしい浮世の味はひを味はつたことはなかつた。私の文章も思想も、華美豪奢から甚だ遠ざかつてゐるが、日常生活にもさういふものを沁々感じたことはなかつた。生れながらその趣味が缺乏してゐるのである。

海邊に育つた私は、四十過ぎて輕井澤で夏季生活を營んだことによつて、はじめて山地に親しみ、高原の空氣が汐風よりも氣持のいゝことを知つた。春と秋とのどちらがいゝかと、萬葉集以來、季節の比較が話題になつてゐるやうに、山と海とではどちらが好きかといふことも屢々話題にされるが、私は、山間や高原の眺めは好きであつても、富士とか日本アルプスとか云つたやうな高山へ努力して登る氣にはなれなかつた。航海の樂しみを空想することはあつても、船暈の恐怖などから海外へ渡らんとする元氣は容易に起し得なか

つた。贅澤慾の滿足遊蕩慾の滿足にも、精神の鍛錬にも全力を盡したことはなく、敢爲の氣象は乏しかつたが、生活を大事にして長生をしてゐると、おのづからいろ〳〵な經驗が得られるものだ。私も定命五十をはみ出すまで生きてゐたればこそ、世界一周旅行を實現することも出來た。今の時世では、富士の見える所に別莊を建てるくらゐ、幹部階級の俳優には何でもないことである如く、文學者の歐米漫遊くらゐ何でもないことであるが、島村抱月氏や島崎藤村氏の洋行時代には、洋行といふと、文壇での大變な事件のやうに取扱はれてゐた。島村氏が英國留學の途に就いたのは、私が學校を出た翌年であつたが、紅葉館で催された送別會には、帝大派の文學者も參會し、紅葉山人が送別の辭を述べたほどの盛會であつた。聰明な島村抱月は數年の留學によつて、歐洲から、新しい思想新しい藝術の精粹を吸取つて來るに違ひない。日本の文壇を啓發するすばらしい何物かを持つて歸朝するに違ひないと、早稻田の仲間内ばかりでなく、文壇全體から期待されてゐた。ところが、當時まだ唇を噛んで隱忍してゐた田山花袋氏は、私に向つて「島村君のやうな保守的な人が英吉利へ行つたら、ます〳〵小さく固まつてしまふだらうと、島崎君が云つてゐたよ」といふやうな意味の感想を洩らして、田山氏自身この感想に同感のやうであつた。抱月先生はえらいと一途に思つてゐた私は、只聞き流しただけであつたが、後で考へるとさ

ういふ批評も當つてゐたのである。歸朝後の抱月氏は、文學の上では却つて、東洋の孤島に蟄居して葭の髓から天をのぞいてゐた花袋氏や藤村氏に引きづられて行つたやうなものであつた。

或日、坪内先生が、最近の抱月氏の手紙のなかに、「同窓の英人から、君は〝Quite European〟だと云はれた」とあつたが、その筈だ。早稲田の教育法がそれだといふ意味の事を、快げに話されたことがあつた。抱月氏ほどの人は、英國の學徒の間に伍して、純然たる歐洲人的風格を持して讓らないのであらうと、私は想像してゐたが、後日、私自身ロンドンやエヂンボローを漫歩してゐた時、「おれもクワイト、ユーロピアンか」と思ひ出して可笑しくてならなかつた。「紅毛人お世辭うまい」

島崎氏の渡歐は島村氏におくるゝこと十年で、かれは日露戰爭前であり、これは世界戰爭前であり、その間に日本の文壇は急速の進歩を遂げたのであつたが、まだ經濟的には惠まれず、小說家として最高位を占めてゐた島崎氏でさへ、貧しい旅行をしたやうであつた。それに、抱月氏は、同盟國の英吉利にゐて、旅順陷落の時には、戰勝の新體詩を作つて在英日本人の祝賀會席上で朗讀したりして得意であつたが、藤村氏は他所の國の戰爭の渦中に捲込まれて苦勞したのであつた。しかし、氏の洋行について、文壇の噂は囂しく、

花袋氏の如きは最も感激し興奮して、別れを惜しんで共に箱根で一夜を過したり、和歌に於て、小說に於て、頻りに感想を吐露したりした。「フランスへ行く」といふだけのために藤村氏に驚嘆し、その決心を禮讃する者も少くなかつたやうだ。ところで、岩野泡鳴は、「たゞ西洋へ行くのは詰らないよ。自分の力量を西洋に認めさせて置いて、それから出掛けなくちやいかん」と、眞面目に云つてゐた。それで、泡鳴君は、自分の思想を英文で書いて、英國の有名な雜誌に寄稿せんと企て、その手續きについて野口米次郎氏に相談を持掛けたらしかつた。東洋の大思想家岩野泡鳴が歐洲の學界で注目されてゐる所へ、堂々と乘込むつもりであつたらしい（これは私の妄想ではない。當人が實際にさう思つてゐた）。

私の洋行は餘りにおそ過ぎた。五十の歲に神嘗祭の頃、夫妻同伴で日光に遊び、中禪寺湖畔であたりの紅葉を觀て春に優つた秋山の美しさに恍惚としたが、湖畔の旅館で、鏡に映る自分の顏に老の影が差して、髯にも白いものゝ交つて來たのに氣づくと、生存中に何事をか爲さんとするのなら、今のうちだといふ感じがした。そして、「何事をか」と思ひめぐらしてゐるうちに、「世界漫遊でも」と思ひ當つたのだ。大磯移轉前東京に空家の見つからなかつた時分にも海外旅行を思ひついたのであつたが、その時は旅費が乏しかつたので藤村氏などのやうにそれを押切つて決行する勇氣が私になかつた。國內旅行ですら、必要

な旅費は持つてゐなければ出掛けられない私は、乏しい旅費で海外へ旅立つやうな冒險はなし得なかつた。しかし、今度は、文壇好景氣のお蔭と、大磯鬱居中の勤勉努力によつて世界一周に相當する費用は蓄積されてゐた。盲人が檢校の位を取りに京へ上るやうに洋行で箔をつけるためとか、執筆に行詰つたから氣分轉換のためとかで行くのではなく、たゞ漫遊のための漫遊であるから、甚だ氣樂な譯であつた。平生社交を努めなかつたのに拘はらず多數の文壇人に見送られて華やかに旅立つことが出來た。私達の船室の隣りには、子供を連れた婦人が乘つて來たが、その婦人を見送つて何かと世話を燒いてゐた身內の一人は、私達に向つて、涙を浮べてその母子の保護を賴んだ。「奥の細道」のうちにある伊勢詣りの一人旅の遊女を芭蕉の衣の袖に縋らせてくれと賴んだ話を私は思ひ出した。ところで私達夫妻は、乘船の當日から船暈に惱まされて、食堂へも甲板へも滅多に出ないで部屋の中で呻吟してゐたのに、隣室の若い婦人は、三度の食事を缺かしたことなく、朝夕甲板へも遊戲室へも舞踏場へも出掛けて、同船の外人とも談笑するやうな有樣であつた。食卓を共にしてゐた村井老人は、太平洋を旣に八十度も渡航してゐるさうであつたが、「船に醉ふと醉はぬとは大きな相違ぢや」と云つてゐた。船の生活でも陸上の生活でも、同じ生活費を投じて、類似の生活を營みながら、體質の相違と心の持ち樣次第で幸不幸の分れ目は甚

だしいのである。船暈から全く脫却したら、航海は樂しいに違ひない。陸上生活の煩はしさから離れ、三度の食事の心配はなく、醫師は居るし、死んだら簡單に葬式をして貰へるし結構づくめのやうに私には想像された。

老いて感受性が鈍つてゐたとは云へ、はじめて見た異國の風光には心ときめくものがあつた。布哇に着いたときに、甲板から熱帶の樹木と、地上に濃ぐ明るい日光に接すると、夢幻境に來たやうな氣持がした。桑港ではじめて西洋のホテルに泊つた時、極寒のシカゴではじめて本格的の西洋都市に接觸した時、初春の朧月夜に、はじめてセーヌ河畔を漫步した時、初夏のスイスの湖畔、ローマの町々。百聞は一見に如かずと、いづれも物珍らしい感じにそゝられて觀たのであつたが、それを口で說き筆で現はすことは出來なかつた。誰の見聞錄紀行文を讀んでも、隔靴搔痒の感じのするものばかりで、實感を遺憾なく現はしたものは一つもない。多年小說や紀行文を讀み、或は旅行者の話を聞いて想像してゐたのと、自分が直接に見るのとは、まるで異つてゐるのだ。何事にも讀書や人の話から得た知識の賴りなさがこれによつて類推される。いかに想像力を逞まゝにしても、人間は自分が直接に見聞したものを材料としての空想以外には出られないのだ。巴里のオペラ通りなんか、かねて自分の空想に描かれてゐたのだが、實景に接すると、形も色も何もかも、

かねての空想裡のものとは似もつかなかつた。地獄も極樂も自分で行つて見なければ、實景が分るものぢやない。

一年にも滿たない外國旅行であつたが、不在中に日本文壇では、プロレタリア文學が著しく勢力を振つてゐた。そのためでもあるまいが、出發前に、幾つもの新聞雜誌から熱心に旅行記の寄稿を依頼されたのとは打つて變り、歸朝後には、何處からも旅行記寄稿の依頼はなかつた。全然無い譯でもなかつたが、どちらでもいゝやうな頼み振りであつた。海外の印象は筆に現はし難いと思つてゐるところへ、熱心に書かせようとする編輯者もなかつたので、遂に書かずじまひになつた。私には敢爲の氣象がないのである。ひと月ばかり故郷にゐて、京阪地方の秋景色を見て、東京兼大磯に歸つて來たが、その時の中央公論に德永直といふ未知の作家の可なり長い小說が掲げられてゐた。たま〳〵中央公論記者が來訪されたので、この作家と作品について訊ねると、記者は熱烈なる口調で、この德永直氏並びに小林多喜二氏の作品を推讃して、日本の文壇に新氣運の勃發してゐることを說き、この二氏の如きは新銳無比で、その新作に比べると、在來の作家のものなどは陳腐讀むに足らずと明言した。私はこの記者の言葉をそのまゝ信頼もしなかつたし、蔑視もしなかつたが、たゞ歸朝後最初に聞いた編輯者の言葉として頭腦に强く感銘されてゐて、今聞かさ

れてゐる如く思ひ出される。外國へ行つて來ると却つて時世遲れになると云ふ人もあるが時と場合でさういふこともありさうだ。私も最初の洋行後十年になるが、その間、純粹の小說は幾つも書かず、雜文雜論のみ執筆するやうになつたのは、生なか外國旅行なんかしたゝめかも知れない。しかし私などのやうに人生の徑路が單調で、過去の追憶にも妙味甚だ乏しい人間には、素通り同樣の世界見物でも、つれ〴〵の折の思出の材料とするに重寶なのである。

文壇も浮世の一面で、我々も浮世の波に漂つて今日の境地に達したのである。自然主義全盛時代には、鷗外や漱石でも多いか少いかその感化を受けてゐた。プロレタリア文學全盛期には、全然それにかぶれないまでも、いくらかその臭ひを取入れるのが、文壇の常識で、自分だけ常識外れの服裝をしてゐるのも氣がひける次第であつた。何年か前の滿洲事變後急速に世上の風潮が轉換するにつれて、文壇もその影響を受け、左翼文學も次第に衰へるやうになつたが、我々老年者が雜誌編輯者などの眼中に置かれるやうになつたのも、時世の變化のお蔭であつた。文學史上に例外はあるにしても大體文學者と云ふものは、時代を指導し或は時代を克服するのではなく、時世の波に漂つてゐるのだ。うまく棹を取つて、波に押流されないやうにしなければならぬのだ。

「落ち目になつて生きてゐるのはいやだ。それよりは死んだ方がいゝ」と、花袋氏が晩年に云つてゐたと、誰かゞ書いてゐたのを私は讀んで、あの人もそんな氣持になつてゐたのか、と心を打たれた。私は、榮華をほこる時もなかつたかはり、「落ち目」を悲しむ經驗は今まではしないで濟んだのであるが、肉體も衰へ精神も衰へるのは如何ともし難い。泡鳴氏は、「頭が働かなくなつたら舌を噛んで死ぬる」と、元氣のいゝ時に傲語してゐたが、これを花袋氏の述懐に比べると面白い。私は從來泡鳴の主義主張人生觀に共鳴も同感もしてゐなかつたのだが、今度のやうに、自分の一生を回顧してゐると、何かにつけて彼の云つたことが思ひ出される。さうすると彼は、見掛けによらない（或は見掛け通りの）非凡人であつたのかも知れない。國木田獨歩が龍土會に於て、醉餘の勢ひで泡鳴に向ひ、語を勵まして、「汝の說は世道人心に害がある」ときめつけたことがあつたが、穩健な思想家の獨歩には、私などゝ同樣泡鳴の非凡性が分らなかつたのであらう。先輩友人、或は後進生に對しても敬意を寄せるのはいゝことなので、敬意によつて相手の眞價が見られるのだが、私は歲を取るにつれて知人に對する尊敬の念が薄らぐやうである。それとゝもに自分は他から多少は尊敬されたしとの欲念は、歲の進むにつれて根づよくなるのではないかと思はれる。食慾色慾は衰へても、自分を認められんとする執念は、心身の老衰によつても消滅

しさうでない。その實例を私は、藝術家以外の普通人の上に、つねに見てゐるが、藝術家のやうに名聲によつて生きてゐる社會ではそれが一層甚だしいのではあるまいか。「落ち目になつて生きてゐるのはいやだ」との花袋の感慨は眞率切實の聲であると思ふ。

一個人でも、一家族でも、一國家でも、落ち目になるのはいやな事である。平家の末路など、詩や小説の題材としては面白いだらうが、平家一族に取つては些しも面白いことではなかつたであらう。外國を旅行してゐると、自分の國は強くならねばならぬと痛感される。

私は、遲れ馳せに世界一周を試みたゞけで足れりとして、二度と海外へ出る氣はなかつたのだが、偶然の思ひつきで再び何の目的もなく出掛けることになつた。大磯から東京の場末に移轉して、數年を經過してゐた間、多年の惰力で執筆を續け、毎日亂雜な場末町の散歩を續けてゐたが、心中は空々寂々で、知友とも身内の誰彼とも、疎遠になるばかりであつた。日月の經過も早く、一生の末路に追詰められてゐるやうであつた。こんなことなら、まだ手足の自由は利くのだから、異國の土地でも歩いて見た方が生甲斐がありさうに思はれた。シベリア鐵道に乘つて、バイカル湖を眺めウラルを越えボルガを横切り、モスコーやレニングラードに足を留めるなんか、青年時代に小説によつて描かれてゐた空想の

實現でたとへ筆で充分の印象記を書く能力のないのはもどかしく思はれても、自分だけでひそかに興味ある追憶の材料としてゐる。ヤスナヤ・ポリアナへ行きそこねたのは殘念だつたが、モスコーに於けるトルストイの住宅が舊の如く保存されてゐるのをゆつくり觀たのは、フランスでフロオベルの住宅を觀たのと同時に、彼等の實生活を想望する刺戟となつた。それからレニングラードで遊覽自動車で王政時代の監獄へ案内され、アナーキストのクロポトキンの押込められてゐた部屋へ入つて見た時も、感激より興味にそゝられた。案内者はこの牢獄から脫出した囚人はクロポトキン一人だと云つて、その脫出の徑路を說明したが、彼の住んでゐた部屋は可成り廣くて、陰慘な趣きはなく、これなら結構ぢやないかと思はれた。異國の見物は、霞を隔てゝものを見てゐるやうで、土地の人々の實生活の眞相を的確に知るのは困難である。現在のロシアが政治的社會的にどんなのか、將來はどうなるのか、素通りの漫遊者が、見極めのついてゐるらしい口吻で話すのは滑稽なのでどの國に對しても自分だけの興味に留めて置くべきものなのだ。

二度目の世界旅行から歸ると、今度は間もなく日支事變が起つた。ロシアも鎖國狀態となり、外人ことに日本人の入國は許さなくなつたらしく、英米佛その他の國々も惡意をもつて日本を見るやうになつたやうだから、當分日本人の海外旅行は困難であり不愉快であ

らう。私はいゝ時期に行つてよかつたと思つてゐる。それよりも私は、自分などはいゝ時期に文學生活を過したとこの頃考へてゐるが、さういふ考へは間違つてゐるであらうか。私がはじめて文筆を採つて以來、文壇の風潮は幾度も變化して、それに追隨して名聲を保つのは容易でなかつたが、しかし一般的に文運は進んで、文學愛好者は益々增加し、文學者の世間的地位も次第に向上の途を辿る方であつたからよかつた。ところが、これからは文學社會にいゝ風が吹く世の中ではなさゝうだ。時代に順應するにしても、從來の文壇史上に見られる程度の順應振りでは追つゝけさうでない。餘程の飛躍的精神力を有つた文筆の士でなければ、時代に適した態度を有つて文壇に立つて行けさうでない。從來の意味の文學の育つ時世でなくなつたのは、事變中ばかりではなく、事變終結後にも及びさうだ。文壇全體が落ち目になつた見窄らしさを呈しさうに、杞憂かも知れないが私には豫感される。——これを結論として、自叙傳的文壇回顧錄の筆を擱くのだが、私は處女作を「新小說」に發表してから三十五年。こまかに計算したことはないが、短い小說を三百以上は書いてゐさうだ。それ等のものが千種萬樣の人間や事件を書いてゐるのではなくて、大抵同じやうな事を書いてゐるのだ。自分ながら退屈である。たび〳〵云つてゐる如く私も變化の激しい時代の思潮に成るべく順應したつもりなのだが、それは評論や感想文の方であつて、

純粋の小說の方では、順應せんとしてもなし得なかつたのである。自分の創作は誰に習つたのでもなく、生れながらの精神活動の結果なのであらうが、訓練が足らなかつたゝめか私のは千變萬化しないで千篇一律で終始した。無論いゝ事ではないと思ひ思ひ今日に達したが、この歲になつて、悔いても仕方がない。今更逆立ちの藝當も出來ない。

發表された處女作以前には、小說らしいものは、萬朝報の懸賞募集へ投稿するために、一度書いたきりである。十圓の賞金を目當てにしたのだが無論落選であつた。近松秋江君にその話をすると、「選外佳作」のなかにさへ入らなかつたのを笑はれた。萬朝は毎週募集してゐたので、創作慾や賞金慾のために早稻田でも屢々投稿してゐた學生があつて、中には出すたびに當選してゐた者もあつた。私は參考のために讀んで、これなら當選する筈だと、自分のに引き較べて感心したことがあつた。國木田獨步も、賞金取りたさに、匿名か何かで二三度投書して目的を達してゐたと、誰かゝら聞いたことがあつた。ところで、今その時の私の應募小說を臙げに思ひ出すと、一篇の着眼が後年の作品と全く同じことなのだから呆れた次第だ。數十年の人生經驗も文學修業も無視されてゐる如く、私の創作の特色は、二十歲の頃の最初の投書小說（それも沒書にされるほどのもの）に出たまゝのもので、何十年釘づけにされたも同樣に固定してゐたやうなものだ。異るのは技巧だけのやう

なものであらうか。それが、五十歳を過ぎるまで小説家として大手を振つて通つて來られたから不思議なものだ。しかし、柳の下にいつも泥鰌がゐる譯ではない。私は、も一度人生を初めからやり直すと假定して空想すると、危かしい小説稼業なんか再びしようとは思はない。むしろ生物學の研究者になりたい。（昭和十三年二月―七月　中央公論）

獨り合點

桃の罐詰と花袋集

ニューヨークからシカゴ、ロスアンゼルスを經て、桑港に着いた時には、私は重荷をおろしたやうな氣輕さを覺えた。あとは日本の船に乘りさへすればいゝのだ。宿も日本人經營のホテルに泊つた。こちらから進んで求めなくつても、先方から好意をもつて私達を案内して、市内や近郊の見物價値のある場所を見せようとする日本人も幾人か現はれた。

さうして最後の西洋生活の四五日を、坂の多い雅致のある桑港で過してゐる間に、ある時、「僕はA—といふ者です。あなたと小學校で一緒でした」と、電話で私に面會を求めた

人があつた。前回の世界旅行の時にも、この港町の西洋宿に泊つてゐた間に、私の不在中Aと稱する同じ人から電話の掛かつたことのあつたのを、私は朧氣に思ひ出した。

それで、面會の約を結んで、豫定した時刻にそのAの來訪に接したのだが、Aの顏には全然見覺えがなかつた。未知の老人をそこに見るだけであつた。「僕の姓は、あの時分は、Iと云つてゐました。あなたのお家へ一度遊びに行つて、お母さんの手製のお菜子を饗ばれたことを今もよく覺えてゐます」と云つたので、私は昔を呼起したが、その追憶は不思議なほど鮮明で、あの頃のAの顏や言行が、現在周圍にある人々の顏や言葉よりもハッキリ浮んだ。私が、鄕里の隣村、片上といふ町の高等小學へ通學しだした最初の年に、Aすなはち I に同級生として接したので、懇意ではなかつたが、或日私達が學校から家へ歸る時分に、Iはふら〳〵と一しよに隨いて私の家まで來て、それなり一泊したのであつた。その頃の彼は紅顏の美少年であつた。間もなく、彼の姿が學校に見えなくなつたが、私はそれを氣に留めるでもなく、今日まで四十幾年間、彼のことを思ひ出したことは一度もなかつた。

今度聞くと、彼はあの時分、家族に連れられて神戸へ行き、その後、滿洲方面へ渡り、つひにこの亞米利加へ、自分の腕一つを手頼りに渡來して、數十年の艱難辛苦を經驗し、

今は、ある地方で桃の罐詰を製造してゐるのであつた。子供もあつて、老後を氣樂に送つてゐるらしく私には想像された。——これだけの事なら、私も大して感動しないのであつたが、Aは、四年後に大博覽會が開催される時に、日本へ歸りたいと熱望してゐた。それも在外日本人からたび〳〵聞いてゐることであるが、Aは「今度歸つたら、幼少時代の故郷片上に落着いて老後を過したい」と云ふのだ。それが、唯一の前途の希望らしかつた。

「片上には親類か懇意な人がありますか」

「いや、誰もありません」

物質文化の完備した亞米利加から、子供にも別れて、そんな田舍へ歸つて、知人もゐない所に一人ぼつちで暮さうといふ心持が、私には、最初聞いた時には不可解であり、むしろ唖然としたのだが、後で、ふとそこに人間の至醇の本性がきらめいてゐるやうに感ぜられた。Aの心には、その片上が西方淨土のやうに見えるのであらう。

西方淨土たる片上を、私は毎年、歸省のたびに通つてよく知つてゐる。五十年來見續けてゐる私の片上と、幼少の頃に見たゞけのAの片上と同じ土地でも、心に映じてゐる印象がどんなに異つてゐるであらう。生れぬ前に見た宇宙の形を追憶して靈魂不滅を感ずる詩

人もあるのだ。

私は船に乗りさへすれば、ひとりでに日本へ歸れる。しかし、誰が私を待つてゐるであらう？　誰が心を傾けて私の異國噺を聞かうとしてゐるであらう？　さういふと、私が故國を望んで、感傷的な氣持になつてゐたやうに思はれるかも知れないが、決してさうではない。

私は前回の旅行の時には、日本へ歸つたら、小山内薫君に西洋の芝居の話をし、田山花袋氏に佛蘭西の話をしたいと思つたものだ。ところが、小山内君は、山王の茶寮に於ける私のための送別會に出席してくれ、船中へ宛てて送別の電報を送つてくれたりしたのに關はらず、亞米利加へ着いて一月も立たぬうちに、早くも逝去した。田山氏は私の歸國した當時は重患に罹つてゐて、そのうち訪問しようと思つてゐるうちに、氏も逝去した。脆きは人の命である。

不在中、寄贈されてゐた書物のうちに、花袋全集があつたので、ところ〴〵開けて見たが、そのうち「インキ壺」や「東京の三十年」などを收めてゐる感想集が面白かつたので全部を通讀した。人生に對し古今の文學に對し、縱橫自在に自分の感じを述べてゐるのが淺くとも深くとも私の心を惹いた。氏は隨分そゝつかしい人で、思ひ違ひが多いやうだ。

私に關係したところだけでも、明かに間違つてゐることがあるが、氏の間違ひは、むしろ氏の人のよさに基くところがあるやうだ。

氏が「蒲團」發表前、博文館で日本地誌の編輯の手傳ひをしてゐた時分、館主が氏に向つて、「小説家なんて駄目だよ、君。紅葉の遺族なんか見たまへ。惨めなもんぢやないか。それよりも、博士方の地理の講義でも聞いて、眞面目に勉強する方がいゝよ」と云つたので、氏は、うはべはその訓戒に調子を合せながら、心の中では「今に見ろ」と反抗してゐた。文學雜誌や文學書類を出版して、相當の利潤を得てゐた出版業者にさへ、「小説家なんて駄目だよ」と侮蔑されてゐた博文館時代から二三十年を經過してゐながら、今なほ、文學者の存在は世間的には浮えないのである。しかし、「今に見ろ」と、世俗に向つて反抗的氣分を抱くのは、私には昔から阿呆らしく思はれてゐた。

私が桑港で乘船した時には、私の船室に、桃の罐詰を入れた堅牢な箱が置かれてあつた。Aは風雨を冒して早くからこの土産物持參で見送りに來てゐたのであつた。汽船の解纜時刻がおくれ、私の乘船もおくれ、私はつひにAに會はずじまひであつたが。……

桃の箱は私はまだ開けないでゐる。

「方丈記」と「徒然草」

歸省の途上、急行「ツバメ」の車中で「方丈記」と「徒然草」とを讀んだ。どちらも年少の頃から幾度も目に觸れてゐる書物で、珍らしくはないが、舊知に會つたやうな親しみが感ぜられる。方丈記は短くもあり、讀み易くもあり、日本人好みの無常觀が、和やかに出てゐるので、昔から多くの讀書子に愛誦されてゐたらしい。傑れた散文詩である。

關東大地震以後の日本にはさまざまな社會的不安が續いてゐるためか、方丈記を讀直して新たな共鳴を覺える文壇人もあるやうに思はれるが、花袋全集中の感想篇を讀むと、新興日本の朗かな時代にでも、青年花袋はこの方丈記にひどく感激してゐたことが分つて、この作家が日本風の感傷家であつたことが一層明かになるのである。最近佐藤春夫氏が、この古典に對して新意ある解釋を試みてゐた。文學の方面でも自國の傳統禮讃の風潮が盛んになつたらしい今日、鴨長明も國粹的巨人の一人として持囃されてもよさゝうだ。

しかし、私は、今度この小篇を讀通して、日本的名文であると感心しながらも、人生鑑賞が低調であるやうに感じた。私は岩波文庫で讀んだのだが、校訂者の山田孝雄氏が「作

者は佛教の思想に基きて、無常を觀じ世を遁れたるものなれど、天を怨むにもあらず、世を詛ふにもあらず、淡白に世を離れて閑居し、消極的ながら自己の境地に一種の安慰を見出せり。さればその無常觀も厭世主義も共に徹底せざる觀あり」と評してゐるのは、普通の觀察であるとともに、當を得てゐると思ふ。

「身を知り世を知れゝば、願はずわしらず」と鴨長明は云つてゐるが、身をよく知り、世をよく知ると、本當の安慰なんか得られない筈である。「人を恐るゝが故に荒磯に住んでゐるあさごには、絶對の平和はない筈である。私なども從來、身體にも生活にもさしたる故障がなく、多少心のゆるやかな時分にこそ、方丈記などを讀んでスキートな厭世觀に耽り得られるので、身心に苦惱を覺えた時、身邊に無常の現實を直視した時には、鴨長明の叙してゐるやうな淡々たる心境に安慰を見出し得られないのである。長明もさまざまな災厄に接觸した揚句の果ての結論として、一種の消極的安心を說いたのだが、これも一種の筆すさみ、一種のつれ〴〵なるまゝの筆すさみで、薫風のそよ〳〵と吹いてゐる今頃のやうな季節にはそれでよくつても、少し荒い風でも吹いたなら、へなへなした方丈の庵なんか造作なく吹飛ばされてしまひさうに思はれる。

だが、文學といふものは畢竟そんなものかも知れない。汽車の中の退屈さましなんかに

用ひられるのに適してゐるのであらう。或は明窓浄几で心を遊ばせるに役立つのであらう。私に取つては、方丈記風の日本古典の鑑賞は、つまりそんなものであつたのだ。徒然草にある「あかず惜しと思はゞ、千年を過すとも一夜の夢のこゝちこそせめ。住み果てぬ世に、見にくき姿を待ち得て何かはせん。いのち長ければ、恥おほし」といふ兼好法師の述懐には、私も若い時から、讀むたびに心惹かれるのであつたが、それも日本人的の心の遊びであつて、眞にさう感じる厭世的苦澁がそこにあるのではない。生き延びてみにくき寫眞を新聞などに掲げられながら、それを榮譽とするのも淺間しい次第だが、當人、徹底的に淺間しく感じてなんかゐないのだ。方丈記の厭世觀も、徒然草の無常觀も、四季それぞれの自然の描寫同樣に趣味の問題である。厭世趣味無常趣味で、園藝趣味骨董趣味と趣きを同うしてゐる。

方丈記や徒然草の持つてゐる趣味性は、日本文學の精粋であつて、我々は稍々もするとこの趣味性に溺れ易いのだが、今の若き人々にまでも、かゝる趣味の傳統が宿つてゐるのであらうか。若しさうであつたら、それが淺間しきものゝ一つであるやうに私には思はれる。

「何事も古き世のみぞしたはしき」と、日本の趣味家のうちでは、比較的考へ方の自由で

あつた兼好法師までも、型の如き尚古癖に捉へられてゐるから面白い。私なども、馬齢を加ふるにつれて古物好きになり、頭腦未發達時代の和歌なんかゞ、邪氣がなくつていゝと思ふやうになつたが、若いものも左樣に感ずるのであらうか。

「ツバメ」を利用すると、朝東京を立つて、その夜故郷へ歸れるのである。巨船クヰンメリーやノルマンディは、四日くらゐで大西洋を横斷してゐる。最近或飛行機は、日本からロンドンまで、四五日で飛んで行つたさうだ。

いづれも驚歎に價してゐるが、私には、東京と故郷の旅程が、一日に短縮されたことによつて、交通の迅速さを最も痛切に、身にしみて感じさせられるのだ。

方丈記同樣、年少時分から親しみのある山陽の日本外史、すなはち、漢文で書かれた國粹書を、故郷の書庫から取出して讀んだが、最終篇の德川氏論贊のなかに「源平以還、治少く亂多し。群雄碁峙、分裂梗塞、其幾百歲を閱するを知らず。而して今、吾帶を緩うし棨を垂れ、糧を齎さずして行く。則ち誰の力ぞや」と、旅行の安易になつたことを喜び德川家の御恩澤を禮讃してゐる。「手ぶらで東京を立ち、百七十里を隔てた故郷へ一日のうちに歸る。則ち誰の力ぞや」

私は、日本外史論贊のうちでは、德川氏の分が最も好きなのである。現代讃美、德川讃

美、封建制度禮讃を、後人の目で見て、阿世的詭言とするのは當を得てゐない。あの調子が傳統的國粋ぶりなので、ひとり山陽の筆にのみ存在してゐるのでない。

巴里にてのツルゲーネフと島崎藤村

私は永井荷風氏の「ふらんす物語」と、島崎藤村氏の「エトランゼエ」とは、幾度も通讀してゐる。どちらも二三十年前の書物だが、日本の文學者の歐洲印象記で、これ以上に味はひのあるものは私にはまだ見當らないのである。異鄉生活の淋しさに震へてゐる藤村氏と、青春の夢を恣まゝにして異鄉の美しさに陶醉してゐる荷風氏と、兩者趣きを異にしてゐるが、どちらの心境も私には面白い。

ところで、荷風氏は「自分には巴里で死んだハイネやツルゲーネフやショパンなどの身の上が不幸であつたとはどうしても思へない」と云ひ、彼等がこの藝術の都に生を終るまで滯在してゐられたことを、早くも巴里に別れを告げねばならぬ氏自身の境遇に引き比べて羨んでゐる。これも詩人の空想として面白いのだが、實際に卽して考へると、ハイネその他の異國人のフランスに於ける生活がそんなに樂しかつたであらうか。私にはさうは思

はれない。ツルゲーネフがフランスの知友に與へた書翰を、かつて讀んだことがあつたが、他國人としての氣兼ねがそこに現はれてゐた。死後に編纂されたその書翰集の英譯本のうちの解說に、彼の知友であつた、或フランス文學者が、死後發表の書翰を讀んで、ツルゲーネフに對して氣まづい思ひをした次第が書いてあつた。生前のツルゲーネフは、他國人として、あれやこれやの知人に對しうまく調子を合せてゐたのであらう。安倍仲麻呂だつて唐の詩人墨客と親しんでゐるうちにも氣骨が折れたことであらう。

私は、この頃、ツルゲーネフの散文詩を新たに讀直して、感に打たれてゐるが、それにつけて、彼の巴里に於ける晩年の生活の、いかに淋しく、いかに痛ましかつたかを想像してゐる。私などは若い時分に、この散文詩を上の空で讀んでゐたが、今讀むとこの作者の死を前にした暗澹たる心境に歎息されるのである。人生絶望の賦と云つてもいゝこんな作品も、異鄕孤獨の生活から產み出されたのではないかと、私には想像される。ツルゲーネフは、あまつたれた素質をもつた作家らしいが、晩年の心境を詠じた幾十種の散文詩は峻嚴である。日本の或古文人の作品に見られるやうな風流で緩和されたところなんか全く無いと云つていゝ。アルプスの絶頂の山と山との對話の如きは、峻嚴冷徹であつて、國木田獨步は北海道旅行を材料とした小品のなかに、その散文詩の一二句を巧みに借用してゐる

が、獨歩の文章のなかでは、それ等の詞句の働きが弱小である。むしろ感傷的な味はひを持つてゐるに過ぎない。

藤村氏の「エトランゼエ」は、氏の海外旅行の動機によるのか、はじめから淋しさうであるが、その淋しさが月日のたつにつれて次第に深まつて、最後に「幻影」の生みだされたことに、私は興味を覺えるのである。氏もツルゲーネフの如くあまつたれた素質を有つた詩人であるが、華美な都會巴里に於て、極端な暗澹たる氣持に捉へられたことがあるのだ。芭蕉信仰の藤村氏は、「さびしさに居るものはさびしさを主とす」などゝ云つてゐるが、巴里に於ける氏の淋しさは、芭蕉のやうな生やさしい風雅なものではなかつたらしい。

「慰め難い無聊と、信じ難いほどの無刺戟とから、私は全く外界に緣故もなければ關係もない自分を見つけることがあつた。……さういふ私の側へは、あのエトランゼエがやつて來てゐた、否でも應でも私はその話し相手に成らねばならないやうな氣がした」と云つてその有樣を叙してゐるが、私にはそれが笑ひ事とは思はれない。そのエトランゼエは、現實の形を具へた人間ではない。影法師のやうなものだ。「外からこつそりやつて來るものゝやうでもあり、かうした長い旅の途中に隱れ潜んでゐたものゝやうでもあり、私がエトラン

ゼエを迎へ入れる心持は一寸説明することが出來なかつた。ただ感ずることが出來た。あたかも暗夜の實在を感じ得られても、それを説明することの出來ないのに似てゐた」と作者は云つてゐる。街上を散歩して何かを見て感じたりすると、早く、下宿へ歸つて、そこに自分を待つてゐる筈の例のエトランゼエすなはち影法師にその感じを話したい氣持になるのだ。ツルゲーネフの散文詩になりさうな心境であり場景である。

藤村氏は詩人である。「エトランゼエ」のうちには、フランス旅行者たるいろ〳〵な日本人が注意深い筆で描かれてゐるが、人間描寫はさう巧みであるとは思はれない。專に觸れて異鄕生活の淋しさに襲はれ續ける有樣を私はこの一篇の藝術的生命として認めてゐる。

しかし、中年期に異鄕で「幻影」と淋しく暮してゐた藤村氏は、老來却つて、その暗澹たる境地を脫して、平明なる藝術に刻苦してそこに安んじてゐるやうになつた。日本の詩人である藤村氏が、つまりは、ツルゲーネフの散文詩のやうなものを綴らないのは、當然であると云ふべきか。

邦譯歌劇

先月下旬、三浦環女史主演の邦譯歌劇「お蝶夫人」を日比谷公會堂で觀て、氣の毒な感じがした。今から二十餘年前に、帝劇で環女史が、清水金太郎といふ青年聲樂家などを相手に邦語歌劇「熊野」を演じたのを觀たことがあつたが、あの時に比べると、今度は餘程上達してゐるのぢやないかと、素人目に或は素人耳に感ぜられたが、しかし、邦譯オペラなんかに苦勞するのは苦勞の甲斐があるのか知らと、私には甚だ疑はれた。「熊野」の時のやうに、吹きだしたくなる滑稽は覺えなかつたが、何等の藝術感も得られなかつた。

歌劇に關する理論は別として、本場のオペラは、劇場そのものも華麗で、觀客の服裝も華美を極め、舞臺も歌手も樂人も、すべて綺麗で、技藝の内容の分らない我々にも、贅澤な享樂機關と云つた感じは起さゝれるのだ。獨逸や墺太利は經濟的に疲弊してゐるさうだがそれでも、ベルリンの國立オペラ館で、はじめて「お蝶夫人」を觀た時、ウキーンで「オネーギン」などを觀た時、場内の空氣は豪奢といふ言葉で形容してもいゝやうに感ぜられた。薄汚いところは何處にもなかつた。ところが、日比谷公會堂では、何處を見渡しても豪奢のかけらも落ちてゐない。豪奢とは極度に緣の遠いものばかりだ。

マダムバタフライは、日本の女性を題材とした名作であるにしても、それは、外人の目に映じた日本女性の幻影であつて、實際の日本人が演じたつて原作が引立つものではな

い。殊に詞句を邦譯にして、音樂とよく調和する望みがあり得るであらうか。日本の歌舞伎や能樂を西洋語に譯して、三味線や鼓や笛の伴奏で演じようと企つる者はありさうでない。明治以來西洋のものと云ふと、無造作に何でも眞似をしたがるのが常例なのだが、オペラの日本化とあつては、模倣慾の抱負甚だ大なりと云ふべきか。

オペラは悲喜哀歡の情を強烈に現はすもので、むしろ義太夫の大袈裟な語り口を思ひ出させるものである。西洋の勝れた物を日本のうちに見出したい慾望から、オペラと能樂の類似性を主張する識者もあるやうだが、實際に見てゐると、こんなに相違したものはなさうだ。舞臺の豪奢と簡素と、激情の露出と隱蔽と、動と靜との相違は、一見して誰にでも分るのだ。一つは忍從感に徹底させようとし、一つは人間の苦鬪を讃美させようとする藝術である。しかし、さういふ窮極の精神が見物の心に浸染する譯でもなし、その道の通人だつて、技巧の末を云々するだけであるが、窮極の精神でも瑣末な技巧でも、能樂やオペラのやうに、長い間の訓練によつて完成してゐる過去の特種の藝術を、他國に移植することは不可能でありさうだ。

三浦環女史は、數十年も歐米に滯在して、日本の歌手として多少は名聲を得たほどの人だから、西洋のオペラについては熟知してゐる筈である。歐洲の藝術の移植に於て最も困

難であると、門外漢には感ぜられる歌劇の邦譯實演を、一女性の身で敢てしようとする意氣には感心していゝ譯であるが、天性冒險性を缺いでゐる私などは、不可能な事を敢てする人をばたゞ氣の毒に思ふのである。泰山を挾んで北海を越ゆと云つたやうな英雄行爲は藝術の範圍では推賞すべきことでないと思ふ。

故坪内博士が、數十年前新樂劇論、及びその劇論の見本としての「新曲浦島」を發表され、三味線樂を活用した歌劇まがひのものを示されたが、かういふものも一つの思ひ付きであり試みであるに過ぎなかつた。物質文明は容易に模倣され移植され、本場に劣らぬ程に進歩發達を遂げる望みもあり、思想類似のものも早速輸入され相當に消化し得られるのだが、他國の藝術の移植はさうやすゝと成功するものではないらしい。そこに藝術の純粹性があり、微妙な味はひがあるのである。昔自由劇場で、イブセンを演じた時だつて、イブセンの思想や外形はいくらか移したにしても、イブセンの藝術はちつとも寫し得られなかつたのではないかと疑はれるが、ピアノやヴァイオリンと、謠曲や長唄が調和した音樂になるのであらうか。西洋物を日本風にしたり、日本物を西洋風にしたりして新代の藝術を創出した氣になるよりは、どちらの藝術を修めるにもそれ〴〵の純粹性を保つやうに心掛けるのがいゝのではないか。

西洋のオペラは國家の保護があるに關はらず經營が困難であるさうだが、さういふ金のかゝる藝術の日本に不適當であることは分りきつてゐる。能樂は例の如く簡素であり、最も資金のかゝる歌舞伎だつて、豪奢の程度はオペラに比べると高が知れてゐる。この頃は家庭の子女も、琴の稽古だけで足れりとせず、ピアノなんかを玩ぶやうになりつゝあるやうだが、日本の經濟狀態から云つて贅澤な沙汰である。

古來、國の經濟力相應に、簡素を藝術の極致のやうに思つてゐた日本も、西洋の贅澤な藝術に心を惹かれるやうになつたから厄介だ。從つて本當の豪奢贅澤でなしに、贅澤まがひの藝術が出現するやうになるのだ。

文學だつて、昔ながらの簡素儉約の文人趣味文學は流行しなくなり、脂つ濃い西洋物類似のものも產出されるやうになるのだらうが、本來豪奢であり華美である藝術を、形だけ移して薄汚く力弱く現はしてゐる邦譯「お蝶夫人」は、明治以來、殊に近來の無雜な日本の藝術界演藝界の縮圖であり標本的演技であると思ふと、諷刺的價値がないこともない。かつての自然主義文學の多くは、三浦環女史所演の「お蝶夫人」見たやうなものであつたのだ。

机上觀劇

机の上に地圖を擴げて、會遊の土地を思ひ浮べ或は未知の土地を想像するのは樂しみである。郵船會社や旅行會社の案內書によつて空想旅行を試みるのも樂しみである。すぐれた旅行記を讀むのは一層の樂しみではあるが、すぐれた旅行記に出くはすことは極めて稀れである。

私は屢々「歌舞伎年代記」のたぐひを抜いて、机上觀劇を試みることがある。一見乾燥無味のやうであるが、讀んでゐるうちに、私の心に昔の舞臺の幻影が浮んで、江戸人の生活ぶりまでも聯想される。田村成義の「續々歌舞伎年代記」の如きは、江戸の末期から明治中期までの、詳細なる劇場記錄であつて、私は、屢々座右に具へて愛玩してゐる。

ことに、伊原青々園氏の「日本演劇史」「近世演劇史」「明治演劇史」は、私は、興味をもつて幾度も熱讀してゐる。他に類のない整頓した演劇史で、氏に取つてはこれ等の歷史の編纂が一生の事業であつたと云つていゝ。私は早稻田卒業直後、一年足らずの間、學校の出版部に奉職して、文學科講義錄を編輯してゐたが、伊原氏の演劇史は、坪內博士の推

薦でこの講義錄に掲げられることになつてゐたので、私は原稿催促のため、一度か二度、青山に於ける氏の宅を訪問したことがあつた。それから二三年後に、讀賣新聞記者として劇評をも擔當したので、劇評家席でたび〳〵氏に接するやうになつた。團菊死後、片岡我當（後の仁左衞門）が上京して、東京座で坪内博士の「桐一葉」をはじめて演じた時には、氏に連れられて我當を木挽町の旅館に訪ねたことなどあつた。當時、劇評家として招待席に來てゐた主な人々は、三木竹二、杉贋阿彌、岡鬼太郎、松居松葉、それに伊原青々園などで、年少の私は、一隅で默つて長い時間を過してゐたが、此等劇通の言語動作は、今なほ、舞臺の光景よりも却つてよく記憶に殘つてゐる。伊原氏は、最近、「團菊以後」「續團菊以後」の二篇を著したが、氣輕な思出話のやうなこの二篇を讀むと、昔私が漠然と見聞してゐた芝居の社會のごた〳〵した有樣が明晰になつた。

伊原氏の批評は常識的で微溫的であるが、それだけに偏頗がなくていゝとも云へる。演劇關係のいろ〳〵な人間の面目が、簡單な記述のうちにもよく現はれてゐる。三木竹二氏が喉頭癌を手術して死んだ所の記事は、私には凄慘な感じがした。あのガラ〳〵と朗かに笑つてゐた竹二氏、克明に舞臺の有樣を手帖に書き留めながら、時として「うまい」と云つて思はず膝を叩いて感激してゐた竹二氏、美しい戀女房眞如女史と合乘り車で歸つて行

つたりした竹二氏、それがあんなみじめな死に方をしたのである。モンテーヌが云つてゐる。「死の瞬間まで見た上でなければ、人の幸不幸は分らない」

私の無遠慮な劇評を、三木氏が賞讃したことがあつたが、三木氏としては云ひたくても云へないことを私がつけ〳〵と云つてゐるのを面白く思つてゐたらしい。しかし、無遠慮な暴評も一度や二度は面白いが、それが連續しては嫌悪すべきものとなるのだ。三十年も四十年も劇評を續けるには、伊原青々園氏のやうな態度を採るべきであらう。政治評論家として永續するためには、馬場恒吾氏のやうな態度が必要であるのと同樣である。

明治以來の芝居與行者として、守田勘彌、千葉勝五郎、田村成義などの人となり、その處世態度は、伊原氏の著書だけによつても、可成り鮮明に現はれてゐて、私の人間研究の興味から云ふと、伊藤大隈山縣などの政治家よりも却つて面白いのだ。

明治時代に、「露作が團十郎、紅葉が菊五郎、綠雨が團藏」と比較されてゐたことは、伊原氏の書いてゐる通りであるが、この比較は、俳優の方が餘ほど歩が悪いのだ。紅葉や露作がまだ二十代の若さで、技の圓熟した名優に匹敵し得られるものか。紅葉と菊五郎とはまだしも作風藝風に似通つたところがあつたが、露作と團十郎に何の類似を見出し得られようぞ。團菊二人は稀世の名人であつたと私は思つてゐる。それで私が若し、伊原氏の

「明治演劇史」その他、さま〴〵な演劇記事を讀んだだけで、歴史的人物として、明治の二名優を回顧したならば、いやに高尚がつて、乾燥無味な「活歴」に沒頭した團十郎よりも所謂「三尺帶役者」たるに甘んじ、市井無賴の徒に扮して、生粋の江戸藝術を傳へた菊五郎の方を讃美するかも知れない。實際さういふ意味で菊五郎を好んだ鑑賞家も少くなかつた。しかし、私は幸ひにして、晩年の團菊の所演を辛うじて觀ることが出來た。二人とも既に老衰して、往時の潑剌たる妙技を示し得なかつたにしても、兎に角稀世の名優の殘光でも目睹し得られた。「團菊が始終顔を合せた最後の四年間は、舊劇に取つて名殘り惜しい春であつた」と、伊原氏も珍らしく感傷的に云つてゐるが、私もさう思つてゐる。歌舞伎の名殘り惜しい春は、二名優の死とともに永久に去つたのではないかと思つてゐる。そして團十郎の所演は、彼の理窟以上の、暗示に富み含蓄のある妙技であつたと、今も眼前に浮ぶのである。戯曲家として何の才能もない櫻痴居士は云ふまでもなく、名作家默阿彌でも、菊五郎を活躍させるものは製作し得ても、團十郎を驅使するに足る傑れた脚本は作り得なかつた。團十郎は自分に適しない新作によつて自己を發揮した。

「芳哉義士譽」は、仇討をすました後の義士を描いた櫻痴の新作で、悪作として有名であつた。竹二氏でさへ「こんなものを書かせた團十郎は馬鹿だ。仇討までが芝居になるので

はないか」と罵倒してゐたが、私は、仇討後の大石の心理に目をつけた團十郎はやはりえらいと思つた。たゞ作者に手腕がなかつたのだ。

描寫について

「現代小說でも、女性などを書いて、本當に姿態までを、描寫出來る純文學方面の作家といふものは殆んどない。みんな心理描寫と會話で、ごまかしてあるのだ。本當に情景が活寫出來ないから、いよ〳〵純文學と云ふものがつまらなくなるのだ」

先月號の「話の屑籠」のうちで、菊池寬氏がかう云つてゐる。「みんなごまかしてある」といふのだから、現代の日本の純文學者は侮蔑されてゐる譯だが、描寫のない純文學なんか駄目であるといふ說には、私も同感である。情景の活寫されない藝術は、概して藝術價値は乏しいと云つていゝ。

女性に限らない、軍人でも政治家でも農夫でも文學青年でも、それ等を小說中の人物として取扱ふ以上は、その風丰行動を、讀者をして目のあたり見る如くに描き出すのが、作家の作家たる所以で、その技倆がなければ、藝術家面をして威張つてゐられない譯だ。心

理描寫なんていふと、意味深長でありさうだが、實はどうにかしてこじつけられるので、或光景、或人間を活寫すのは天才の技を要するのである。

私は、ブールジエの「弟子」を讀んだが、かういふ心理小說は、凡人でも努力すれば書き得られると思はれる。しかし、トルストイなどの小說手腕は、凡人が徹夜して努力しても、空氣の冷澄な輕井澤なんかで精神を凝らして萬年筆を動かしたつて模すべからざるものである。「アンナ・カレニナ」の主人公を最初現はすところだけの妙味だけでも、私はこの小說を讀んで以來數十年間、をり〳〵思ひ出しては感心してゐる。二葉亭の「浮雲」の心理描寫は、日本文學史に一期を劃したと云つてもよからうが、この一卷の創作を、僅か十枚ばかりの飜譯「あひびき」に比べると、藝術としての妙味がどれほどに相違してゐることか。本物を見ないものには分るまいが、ミケランゼロでもロダンでも、レンブラントでも、何の說明を要せずして、人間の活現に、觀覽者の心は打たれるのである。

日本でも、源氏物語や西鶴物には、傑れたる情景の活寫が見られる。馬琴なんかだと、美人を寫すに當つても、「沈魚落雁羞月閉花」と云つたやうな美辭麗句を用ひたのに過ぎない。明治以來の小說では、「女性などを書いて本當に姿態までを描寫し」、「本當に情景を活寫」したものがあつたであらうか。小說のなかゝら鮮かに浮出て、讀者の心に印象を留め

てゐるものが一つでも二つでもあつたか知らんと疑はれる。他人の作品については遠慮して、自己の作品について云ふと、私は數十年間多數の小説を書いたが、つひに一人の人間をも活寫し得なかつた。描寫才能の乏しさは甚だしいのである。菊池氏の所謂「老練なる大衆作家」については、私は多くを讀んでゐないので斷言されないが、かつて、必要上大衆作家の代表作を一つゞつ讀んだ時の印象を思ひ出すと、彼等老練者も、人間の型を書いてゐるだけて、常套を脫した「本當の、人間や世間の情景活寫」は敢てし得なかつたと、私は信じてゐる。

ホーマーの「イリヤッド」は、スパルタ王妃たる美人ヘレンをトロイ王パリスが奪掠したことから戰爭が起つたといふ神話に基いてつくられてゐるのだが、絶世の美人の姿態を事々しく描寫はしてゐない。たゞ、或時、老人どもが、ヘレンを一瞥して、「あの女の爲めならば國を擧げての戰爭をする甲斐あり」と感歎したことが歌はれてゐる。血の氣の失せて、異性愛慕の念の衰へてゐる老人連が、しかも自分達の愛兒愛孫を長い間戰場で苦しませてゐるに關はらず、戰爭の原因たるヘレンを憎まうとしないで、「あの女のため」ならば、國が焦土となつても厭はない、と云つたことによつて、百千の描寫にも勝つてヘレンの美が表現されてゐると、審美學者がホーマーを推讃してゐる。描寫以上の描寫だが、こ

んな態度を凡作家が眞似をしたらたまらない。

田山花袋氏は、氏の全盛時代には平面描寫を主張したことがあつた。そんな描寫は淺薄だ、描寫は立體的でなければならんと、屢々反駁されてゐたやうであつたが、平面描寫説はなか〳〵面白いと私は思つてゐる。今日の菊池氏の所説とも似寄つてゐさうだ。花袋氏は小説は上手でなかつた。描寫は下手であつた。しかし、創作に於ても誠意に富み正直であつた氏は、自分が描寫に巧みならざることをよく知つてゐて「平面描寫」や「有りのままの描寫」に努力しようと志したのであらう。菊池氏の云つてゐるやうな「情景の活寫」を志し「女性などを書いても本當に姿態までを描寫」しなければならぬと感じてゐたのであらう。立體描寫と云ふと心理描寫に墮し、心理描寫は「こじつけ」になり「誤魔化し」になり勝ちなのである。田山氏も平面描寫を主張しそれを志してゐたのだが、實際の氏の作品は、主觀的心理描寫の連續なのである。

有るがまゝの人間をも事物をも、讀者の眼前に浮出させることは、平面描寫の極致であつて、それは凡作家に出來ることではないのだ。

日露戰爭後文壇の風潮は急速に變化した。今度の戰爭後にも、際立つた變化があるらしく私には豫想される。日露戰爭直後に文壇に出た私は三十餘年の文壇生活を經過した譯で

あるが、今度は如何なる變化が起るかを、傍觀するに留まるのである。（昭和十二年五月―十月　文藝春秋）

河上博士のこと

河上肇君は私の知人である。五來素川君も私の知人である。無論親交がある譯ではないので、數十年前、私が讀賣新聞に奉職してゐた時分に、兩氏とも同じ社に關係を有つてゐられたので、自ら知合ひになつたと云ふに留つてゐる。私の在社當時、五來氏は東西の大學教授の比較論のやうな讀物を連載して好評を博してゐた。「まだ見ぬ親」とかいふ佛蘭西の通俗小說の飜案を連載して、これも可成りに讀者受けがしてゐたやうであつた。氏は見掛けによらない文才の所有者であると、當時の私は感心してゐた。私自身も、「大學學生々活」といつたやうな題目の下に帝大の教師の人物評などを書き竝べたこともあつたが、これは、むしろ惡評を得たゞけであつた。ホールケーンの通俗小說の飜譯の連載も失敗であつた。私は昔から今まで、新聞の呼物となるものを書く素質を缺いでゐるのである。人間

の持つて生れた才分や素質や性癖は、大抵は一生變らないものらしい。五來氏は、私と同樣に故植村正久先生の教會に席を置いてゐたのだが、私とちがつて先生の信用を得てゐたやうであつた。そして、氏が基督教宣傳のために街頭に乘出して呼號してゐると云ふことを、教會の人から聞かされた私は「よくそんなことが出來るものだ」と、むしろ反感を抱いてゐた。氏は、十年以上も佛蘭西に滯在してゐたやうであるのに、案外にバンカラで、案外に日本趣味で、午餐にザル蕎麥などをすゝりながら「こんな簡單なもので食事の出來るのが日本のいゝ所だ」と日本を讃美してゐた。ところが、當時は蕎麥を最も嫌ひな食物の一つとしてゐた私は、心の中で五來氏の日本趣味に少しも同感し得られなかつた。植村先生も江戸ッ子であつたゝめか、或日教會堂からの歸りに、私に向つて「僕は少くも一週間に一度は蕎麥を食べないぢやゐられない」と云つて、蕎麥屋へ私を誘はうとされたが、私はお斷りをしたことがあつた。私は、新聞社では、財嚢の許す限り、午餐に、近所の洋食屋から、大きなビフテキとパンを取寄せて食ふことを、新聞社勤めのうちの最も大なる慰めとしてゐた。私は蕎麥を食つて神を讃美するやうな基督教を好まなかつた。

河上氏は、在社當時、京橋區の屋臺店で賣つてゐた鹽餡の大福餅を、屢々辨當に當てゝゐられた。氏は、當時の讀賣の主筆足立北鷗氏の同鄕の緣故で入社されたのであらうが、

普通の記者とは異つて、連載論文を執筆するだけであつたと記憶してゐる。「社會主義評論」(?)は非常に評判であつて、五來氏の東西大學論とゝもに、あの時代の讀賣新聞の讀物として双璧と云はるべきものであつた。思ふに、河上氏も五來氏と同樣に、天成のジャーナリストとしての素質を豐かに有つてゐたのであらう。

河上氏は丈高く、あの頃から痩せてゐた。寡默で、溫和であつた。五來氏は肥滿して、快活な笑聲をよく發してゐた。私は、在社當時河上氏としみ〴〵話したことは一度もなかつた。有名な社會主義評論も殆んど讀まなかつた。その無我愛觀も殆んど讀まなかつた。「茶根譚」といふ書物に心醉し、それについて何かと感想を書いてゐられるのをも、たゞ傍觀してゐた。私などが、信仰を失ひ、たゞ意味もなく青年期を過してゐた間に、河上氏は、自己生存の態度についていろ〳〵に心を致してゐたのであらう。あれからこれと心が移つてゐたらしいのも、若い感受性の然らしめたところであつたと想像される。

だが、在社當時の氏は、私に取つては路傍の人たるに過ぎなかつた。今思ひ出すと、あれから既に二十二三年の歲月が經過してゐるが、氏が、京都大學に赴任されて間のない時分に、私は、歸鄕の次手に、京都に立寄つたことがあつた。紅葉の色つきかける頃であつた。懇意でもない人を訪問することを好まない私が、どうしたはずみか、ふと、河上氏を

眞如堂近くの假寓へ訪れた。快く迎へられて、夫人を煩はして、午餐の饗應を受けたが、御馳走は私の好きなビフテキなどの洋食であつた。○社にゐた時は××さんの眞似をして、鹽餡の大福を食べて胃を悪くしました」と、氏は云つてゐた。食後氏に導かれて眞如堂あたりを散歩したばかりでなく、その翌日（天長節）氏及び、氏の先輩戸田海市氏夫妻と、伏見から宇治の方へ遠足を試みることになつた。戸田氏の話を河上氏はいつも愼ましやかに聞いてゐた。宇治の或旅館で晩餐を取つたのだが、その時の印象を今思ひ出すと溫かい秋晴の日の京都近郊の風色にも、當時憂鬱に沈んでゐた私の心はさほどに感激されなかつたことゝ、戸田氏が何かの持病のために米飯を口にしないで料理ばかりを貪つてゐたことゝ、戸田氏の夫人が氏についていろ〳〵に世話を焼くのを、當時獨身であつた私は、不思議に思つたこと、その頃大いに賣出してゐた永井荷風氏の「新歸朝者の日記」を、戸田氏が批評して、「西洋から歸つた當座は、誰でもあゝ云つた氣持になるものだ」と云つたことくらゐであつた。

戸田氏は當時經濟學の大家であつたらしかつた。河上氏も經濟學の專攻者らしかつた。自然その學問に關する話も出たやうであつたが、當時の私は、經濟學を興味ある學問とも、尊敬すべき學問とも思つてゐなかつた。だから、この兩氏の如き偉才の談話を耳にし

ながら、何の感銘をも得なかつた譯である。人間は自分々々の狹い世界に生きてゐるので、ドストエフスキーの傑作でも、日本の政治家に取つては、何某の浪花節ほどの價値もない。野球の大選手でも、野球の嫌ひな人間の前では、毫末の尊敬も得られない。

それで、河上氏は、要するに私に取つては精神的には無緣の人であつた。どういふことを考へてゐる人であるかも知らなかつた。それから何年かたつて氏は歐洲へ留學された。西洋見聞記のやうなものが、大阪朝日か何かに出たらしかつたが、それも讀まなかつた。ところが島崎藤村氏の紀行文「エトランゼエ」などを讀むと、そのなかに河上氏の事が可成り詳しく出てゐたので、私ははじめて河上氏の人となりの內面の一端を伺ひ得て興味を感じたのである。外國にゐると、人は案外打解けて話合ふものであるが、島崎氏は、あの丹念な態度で、河上氏を觀察し描寫してゐる。氏は、日本の將來について樂觀してゐた。見てゐるがいゝ、日本もなか〳〵やり出しますぜと、元氣よく云つてゐる。他に雷同しない自信のある元氣のいゝ話のうちに、氏が日本主義者であり、盛んな愛國者であるらしい趣きがほの見えてゐる。五來素川氏は、歐洲に長く滯在してゐた人でありながら、或はよく歐洲を見て來たゝめか、强烈な日本主義者となり、蕎麥ばかりでなく風俗でも道德でも、日本はいゝことだらけであるらしく云つてゐるが、河上氏も、五來氏と話の合ふ程度の日

本主義であるやうに思はれるが、それは私の間違ひであらうか。

兎に角、河上氏は歸朝後めき〳〵とえらくなつたやうである。經濟學については、野球についてと同樣に盲目である私は、講壇に於て或は著述に於て、どういふ傑れた學說を述べてゐられるのやら知らなかつたが、「改造」の社長氏や「中央公論」の編輯者などの話のうち、をり〳〵河上氏をもつてジャーナリズムの上のチャンピオンのやうに禮讃してゐるのを聞いて、「日本もなか〳〵やり出す」だけではない、「河上君自身なか〳〵やり出したのだな」と、讀賣時代にすでに讀者の心を捉へる力を有つてゐた氏が、新たな時代の風雲に乘じて、讀者の心を捉へるのは順當であらうと思つてゐた。我々が年少の頃、松村介石とか內村鑑三とか云うた人々が、若い讀者や若い聽衆の心を捉へてゐた光景を私は聯想した。そして私は、ある時、「改造」の社長氏に賴んで、氏の所藏の、河上氏の著書及び河上氏の個人雜誌を借覽することにした。「これは私も大切にしてゐるのですから」と云はれたので、私は貴重書類を手にしたつもりで、早く讀んで早く返さうとした。私は、舊知河上氏の作品をはじめて讀んだと云つてもよかつた。「貧乏物語」でも、「唯物史觀」（？）でも、雜誌の論文でも、文章が明晰で分り易い。ホーセットの經濟學を初めの方少しばかり、天野爲之先生に教はつた以外、何も知らなかつた私も、アダムスミスだの、マルサス

だの、或はマルクスだのの經濟説の一端を教へられた。氏には崇拜者が多いやうであつたが、そのためか「御都合のいゝ時に訪問させてくれ」といふ來書に對して「訪問してくれないのが最も好都合だ」といふやうな意味の記事が雜誌にあつたのを見て、私は人間得意の絶頂をそこに見た。秀才が此の周圍に集つて、その感化を受けてゐるとの風聞をも耳にした。論語か孟子に云つてゐるやうに、天下の英才を集めて教育するのは最大の樂しみであるが、氏はその享樂に耽つてゐたらしい。

私は、その後も屢々京都に遊んだ。或年の秋、ケーブルカーの出來立ての比叡山に登り、山を下つてから、都ホテルの方へ向つて、よぼ〳〵の人力車で大學の境内らしい地域を通つてゐると、ふと河上氏の姿が目についた。殆んど二十年を隔てゝ見た氏の姿である。昔に比べてその風丰が殆んど同じかつた。私は或感慨をもつて氏を目送したが、氏に呼掛けるのを憚つた。先方でも私に氣づいたらしかつたが、そのまゝ行き過ぎた。時代の英雄らしくなつてゐる氏を、昔の如く氣輕に訪問する氣持に、私はなれる筈がなかつた。

氏の選擧運動のこと、大學から追放されたことなど、私も新聞紙上で世間並に知つてゐたが、雲煙過眼視以上の何ものをも感じなかつた。讀賣時代の同僚が「河上といふ人は功名心の強い男だね」と冷かすやうに云つたのに對して「さうだらう」と輕く相槌を打つく

らるであつた。

ところが、去年の梅雨の頃、私は偶然氏に面接する機會を得たのであつた。氏の門下生らしい青年に氏の近況を訊ねたのが緣となつて、氏は私に手紙を寄せて久振りの會談を望まれたのであつた。私は、二時間ばかり、ホテルの庭に面した廊下で氏に會つた。相對してゐると、氏は「いかにも憂れてゐる」と云つた感じがした。心勞に打挫かれてゐたのであらうか。思想界の鬪士と云つた面魂は何處にも見られなかつた。年齡を訊くと、私と同年であつた。

「あなたには子供さんがおありになるんでせう」と、私は氏の華やかだつた生活も、今は不如意になつてゐるのではないかと空想しながら訊ねた。

「しかし、子供の方は片がついてゐます。私の生活はあなたと同じやうなものでせう」

夫婦きりの簡單な家庭生活を營んでゐると云ふ意味なのであらう。氏の言葉の靜かなのは、二十餘年前と同樣であつたが口を利くたびに下唇をビク〳〵と動かしてゐる筋肉のけいれんは、氏の心の不安の結果ではあるまいかと、私は邪推をめぐらした。新聞社時代の知人の噂は、無論お互の口から出たが、實はさういふ話題は興味のあることではないので、河上氏としては目下の自己の心境を語りたかつたのではあるまいか。

氏は同じ學者仲間には近來會はないと云つてゐた。私がお愛想のつもりで、雜誌の目錄だけで知つてゐる經濟學界の論客の名を擧げて訊ねると、氏は殆んどそれ等のすべてを一蹴りに蹴つた。大學はドブ泥のやうである。良心を有つ學者はゐないと、氏は斷言した。

「さうですか」と、私は答へるより外仕方がなかつた。

「會つてゐるのは靑年だけですが、靑年は我々くらゐな年輩のものに對して理解してくれないですからな。私達のやうな生活をして來た者に對しても尊敬してくれないですよ。火の氣のない寒い部屋で夜中會議なんかをすると身體にこたへますからね」

この窶れた顏の何處かに、二十年の昔には宿つてゐなかつた、陰慘の氣の漂つてゐるのが、私には痛ましかつた。やはり、書齋に留つて本でも讀んでゐる方がいゝのではあるまいかと、私はさういふ氣持を口から辷らせたが、氏は、「まあ、やりかけたことはやりませう」と、呟いた。その言葉には力がなかつた。

「外國へまた行つて見ようと思ひませんか」と訊くと、

「いや、外國生活は私は好みません。言葉がよく出來ないせゐでもありませうが、外國の生活は面白くないですよ。やはり日本がいゝです」

「京都はよくはありませんか」

「いや、私どもには東京の方が自由でよろしい。何年か前には、京都には永住するつもりで家を建てる計畫をしたことがありました。……今は京都へも故郷へもうつかり行けませんよ。放火人足でも入込んだやうに警戒されますからな」

「お國にはどなたがいらつしやるのですか」

「年寄りの母が一人居ります。老人は故郷を離れるのをいやがりますからな」

私が在社當時、主筆足立氏が「ある人が河上君のお父さんに、鳶が鷹を生んだと云つて子息を褒めると、お父さんはさう云はれるのを喜んでゐた」と話したことがあつたが、私はそれを思ひ出した。父君が若し今日まで健在であつたら、我が子が鷹であることを喜んだであらうか。

河上氏は、前途に希望を有してゐるやうな口吻を洩らしてゐたが、私は氏の風丰を注視してゐると、そこに希望の光が差してゐるとは思はれなかつた。それは、何事にも希望を認めたがらない私の性癖に基くのであらうか。

今春、河上氏の隱れたる行動が新聞に公表された時に、雜誌界の某氏が、

「去年河上さんがあなたを訪問したのはどういふ譯だとお思ひになりますか」と訊ねたが、それは資金提供を望んでゐたのではあるまいか、と想像した上の質問らしかつた。し

かし、私には、氏にそんな下心が少しでもあつたとはどうも思はれない。新聞記事によると、氏は九月頃に正式に黨員になつたといふことだから、梅雨の頃にはいろ〳〵に迷つてゐたのであらうと察せられる。何十年會つたこともなく懇意でもない私を、わざ〳〵訪問する氣になつたのは、氏の心境が淋しかつたゝめではあるまいか。話相手としては最も張合ひのない私のやうな人間の所へでも話しに來る氣になつたのは、氏が主義の上では多くの青年崇拜者を有つてゐても、肝膽相照らす同年輩の親友を一人も有つてゐなかつたゝめではあるまいか。要するに、氏は英雄でもなく、徹底的な鬪士でもなく、ツルゲーネフ小說中の一人物であるらしく思はれたが、今度の「獄中獨語」によつて、ツルゲーネフ張りの小說は、見事に結末を告げたのである。

「二階の河上博士」といふ寫生文には、巧まずして河上氏の人となりが浮上るやうに描寫されてゐて、あらゆる讀者の興味を惹いたらしかつたが、「獄中獨語」はあれに續けて讀むべき、作爲なき一篇の小說である。

今春、日日新聞社の招待で歌舞伎座を見に行つた時に、幕間に、廊下で、讀賣時代の同僚某君に、これも何十年目で行き會ふと、例の如く昔の知人の噂が出たが、その時某君は「河上のやうな臆病者が……」と、「滑稽」視して笑つてゐた。この某君が、「獄中獨語」を

讀んだら、それ見たことかと云つてゐるであらう。しかし、さう云つてしまへば、實も蓋もないので、人間の事すべて道化芝居であるとも云はれないことはない。「獄中獨語」を艸する際の河上氏の心理狀態は、私にもよく想像されるが、氏はその時、氏の教へに心醉し氏を崇拜してゐた青年の身の上について、多くの思ひを致さなかつたのであらうか。

「外國にゐた時もさうでしたが、私は少しでも金を持つてゐると、詰らん物を買つたりして無駄費ひをして仕方がありません」と、氏は云つてゐたが、氏は本來唯物說信者ではなく、物質慾には淡白で、窮極の心境を和歌や俳句で現はすやうな、傳統的日本趣味を多分に有つてゐる人なのだから、資本論だの、何とか經濟論だのといふやうな、面倒くさい面白くもない學問をやらないでも、氏の才能を伸す所が、他にいくらもあつたのでないかと思ふ。（昭和八年八月　中央公論）

久米正雄論

一

「デコブラなんかを、なぜ日本の大雜誌や文壇の人々が問題にしてるんだらう？　あの作家はフランスでは低級な小說家で、眞面目な文學批評に上るやうな作品を出したことはないのだ。賣れることは非常によく賣れるさうだが」

「君はあの男の小說を何か讀んだことがあるか」

「寢臺車の女といふ小說を讀んだ。男女の情事を書いても、モウパッサンなどとはまるで違つて、下等で、藝術品ぢやない。際どいことを書くから賣れるんだがね」

帝國ホテルのロビーで、外人同士でこんな話をしてゐるのを、私は聞いた。英國のショウにしても、佛國のデコブラにしても、どうせ我々にはよく分らないのだから、味噌も糞も一しよにして一時の賑やかしに異國人を迎へるのも結構だらう。西洋では下々の下のレヴュー團でも、若し日本の大劇場に現はれたら喝采されるであらうが、それは、我々が名も知らないやうな役者が、日本歌舞伎の代表者のやうな顏して、西洋の國々を興行して廻るのと同樣で、西も東もお互樣に、居ながら皮相な異國情趣でも味はへるのは、文明の有難さである。

非常に本が賣れて非常に金が儲かると云はれてゐるデコブラ氏は、快活な氣樂さうな、日本の文壇人を羨ましがらせるやうな氣焰を、日本滯在中雜誌や新聞の上で吐いてゐたが、そのうちに「そのうち、少數の讀者にだけ讀まれるやうな純文學的小說を書くつもりだ」と、將來の眞面目な意圖を洩らしてゐたのを、私は朧げに記憶してゐる。西洋の通俗小說家もこんなことを云つてゐるのかと、可笑しかつたから記憶してゐるのである。「日本の通俗作家もよくそんなことを云つてゐますよ」と、誰かゞデコブラ君に知らせてやればよかつた。同君は東西人情の同じいことを喜んだかも知れない。

金も欲しい、名譽も欲しい、その名譽も、世間的の名譽だけでなしに、藝術理解者の仲

間うちでの眞の名譽も欲しいのが、普通の文學者の普通の心理である。

菊池寛氏が、故佐々木味津三君について、二度も三度も云つたことも、私の心に刻まれてゐる。「純文學に拘泥して、貧乏して家族を餓ゑさせるよりも、佐々木君のやうに、大衆小説でも何でもかまはずに、よく文筆の稼ぎをして、兄弟や親類の世話をする方が、人間として尊いと思ふ」

普通の世人の云ひさうな言葉だが、菊池氏の口から出ると、意味もあり力もあるやうに感ぜられる。私自身は、文學魂が稀薄で、生活意識が濃厚であるためか、菊池氏の説に同感するやうな素質を多分に持つてゐるが、「沈丁花」を貫く精神は、菊池説に正反對であるから面白い。それから、この「沈丁花」には、デコブラ氏の抱いてゐるやうな藝術家心理をも反映してゐるから妙である。

私は、久米正雄氏の「沈丁花」と「晴曇」とを通讀した。「晴曇」は、某通俗雑誌に連載されて、非常に讀者受けのしたものだと聞いたので、參考のために撰んだのだ。通俗小説の傾向も大抵は極つたもので、二人の若い男と二人の若い女が出發點とは違つた方向に向つて、戀愛關係を結ぶ徑路に、物語の興味を置いてゐる。「破船」に似てゐるところもあり、「金色夜叉」に似てゐるところもある。しかし、失戀者が、間貫一のやうな復讐態度と

は異り、戀敵の情婦を姙娠のまゝ引取り、戀敵の子を自分の子として養育しようとする聖者の如き態度を持するのは、トルストイでも好んで取扱ひさうな趣向で、讀者に感激を與へる所以であらう。山本氏の「女の一生」を讀んでもさう感じたが、「晴晝」を見ても、「金色夜叉」「魔風戀風」「己が罪」など、昔の通俗小說に比べると、若い女性が男性に對して、言葉の上でも、態度の上でも、優勝者らしく振舞つてゐる。そこに時世の變遷が察せられるが、作者が若い婦人讀者を喜ばせるために、こと更さういふ筆致を弄するのではないかと思はれないこともない。讀者も、作者相應の機智を吹込まれた小說中の女性（幸子の如き女）に成り澄まして、空想裡の享樂に耽るのであらう。あまりいゝ趣味とは思はれない。かういふ種類の小說が、大量印刷を誇る多くの「娛樂雜誌」なるものに次から次へと揭載され、多數に讀まれてゐる光景を想像すると、一種の侮蔑が感ぜられる。（「沈丁花」には、私の起した侮蔑感を、もつと擴大し强烈にしたやうな氣持が、作中の日本畫家を通して現はされてゐる）。映畫やレヴューをはじめ舶來の娛樂機關娛樂設備はます／＼增加し、ます／＼充實しつゝあつても、それ等のために小說が絕滅するとは斷言されないやうである。それどころか、娛樂雜誌にでも婦人雜誌にでも、諸新聞の朝刊にも夕刊にも小說は重要視されてゐるらしい。デコブラが歡迎されたのも、彼が西洋で最もよく讀れる

小説家であるといふだけのために、日本にもさういふ作家が現はれゝばいゝ、さういふ作品が書ければいゝといふ、雑誌業者や文壇人の潜在意識の現はれが、彼の歓迎となつたのであらう。世間の事、多く酬いられる所に人才が集まるのが常例である。久米氏の如く才氣があつて融通の利く人は、はじめ志したところはどうあらうとも、無理強ひに狭隘な純文學の境地に自分を閉ぢ籠めてゐられないのは自然の理である。純文學者として自他共に許してゐる作家にしても、純文學に没頭して他を顧みようとしない人ばかりではあるまい。もつと收入の多い通俗小説を書きたくも書きこなせる才能を有つてゐないし、娯樂雑誌からも迎へてくれないため、餘儀なく純文學に噛りついてゐる作家も少くないだらう。それとともに、通俗小説で低級の讀者を釣つて金儲けをした勢ひに乘じて、今度は純文學の方でも人目を驚かすやうな傑作を物して、名譽の冠を被つてやらうと考へる作家は、實業家が物質慾を滿足させると、新たに爵位を欲しがつたりするのと同樣に、蟲がよすぎるのである。

二

「沈丁花」は、「晴曇」の比ではない。後者は、實に私には鼻持ちのならぬ思ひがされて、現代の多數の讀者に喜ばれる小説の標本はこんなものかと歎息されたが、前者は、もつと灰汁ぬけがして、藝術の冴えがある。私の讀んだ範圍では、この小説が久米氏のものとして、最も作者の面目を現はしてゐる力作ぢやないかと思はれた。「破船」はこの作者の前期の代表作で、今「沈丁花」と比較したら、一人の作者の藝術的技巧の發展、思想の推移、生活振りの變遷などが明かにされて、人間研究の資料ともなりさうに思はれたが、新たに讀返す根氣が出て來ない。朧げな記憶を辿ると、私は、「破船」には多くの魅力が感ぜられない。久米氏が文壇に出はじめた時には、その「失戀小説」或は失戀事件そのものが、人氣の原因をなしてゐたが、ゴシップ興味で作品が評判されるのを、當時の私は不愉快に思つてゐた。あの頃は、文壇も、その以前ほどにも、世智辛くなく、のんびりしてゐたゝめか、久米氏などは甘やかされて育つた。久米氏自身も文壇人に有り勝ちな猾介な惡癖がなくつて、社交性に富んでゐるため、書く物が一般に分りがよく、はげしい時代の流れにも取り殘されないで進んだ。幸運な作家の一人である。氏には、あの頃の文學青年氣質といつたやうなものが、菊池氏以上に殘つてゐるが、それは通俗小説家として、氏の弱味であるとゝもに、文壇人に懷つこく思はれるところでもある。

「沈丁花」は、日本畫家の一群を題材としてゐる。畫家彫刻家の類ひは、明治以來さまざまな小說の材料になつてゐるが、藝術家として共通のところがあるので書き易いためであらうし、自分の氣持を作中人物に託して描くにも便利なためであらう。美術家を名利を超越した風流人にしたり、風變りな天才にしたり、藝術のための苦鬪をさせたり、作家の好みで、取扱ひ方もさまざまであるが、或時代の日本畫壇の眞相の描寫や、或美術家の生活の具體的表現に接したことは、甚だ稀れであつたと、私は思つてゐる。美術家すなはち風流人と云つたやうな見方は、隨分常套的であり、淺薄であると、私は思つてゐる。日本畫と歌舞伎芝居は、觀光外人を驚かすに足る日本傳統の藝術には違ひないが、それ等の多くは、瑣末な技巧だけ殘つてゐる生命の稀薄な藝術に墮してゐるのではないだらうか。官設展覽會が出來て、年々美術の新作が一般民衆の目に觸れるやうになつてから、美術が通俗化の道を取つたことは、娯樂雜誌が大量生産を行ふやうになつてから、通俗小說が跋扈するやうになつたと同樣である。日本畫の大家は通俗小說の大家と同樣に取扱ふべきものである。

「沈丁花」には、概括的に美術家仲間の競爭心理が叙せられてゐるが、それとゝもに作者の藝術觀がよく現はれてゐる。野村白風、中川星人、田邊愛胡など、數人の日本畫家は作者の胸中に存在する種類の異つた藝術家の模型であらう。「孤獨な自己道を踏出さうとする

一個の反逆兒であり」「眞の藝術道を行くもの、蹈むべき光榮の棘」を蹈む白風に、作者は最も敬畏を寄せ、これを悲劇人として描き、これを悲劇人として終らせ、讀者を感激させようとしてゐるが、それと同時に、「おれのやうに賣繪を描き、百貨店の圖案を引受け、挿繪コマ繪を描いても、その努力の次第に依つては、却つて豐富な畫才を發揮し得ると信じてゐる。藝術家とは必ずしも、赤貧洗ふが如き中にひとり高く己れを持して、偉さうに凄んでゐばかりが能ではない」と信じてゐる星人にも好意を寄せてゐる。作者は、白風に非凡な繪を書かせると同時に、星人にも傑作を書かせてゐる。つまり、通俗小說を書きながらも、努力次第で藝術味豐かな小說も書けないこともないと云つてゐるのだ。しかし、星人風の態度を是認しながらも、白風の悲劇的徑路に一篇の重點を置き、生活を無視し世渡りの常識を蹈み潰しても、自己の藝術を守ることを藝術家の極致のやうに描いてゐる。多分久米氏も心の底ではさう信じてゐるのであらう。菊池氏の佐々木味津三觀と反對の氣持が、「沈丁花」を貫いてゐると、私が云つた所以である。まだ昔の文學青年氣質を失つてゐない久米氏ばかりでなく、有り觸れた通俗小說家でも普通の讀者でも、野村白風のやうな態度の人間の存在を空想することを喜ぶものである。その極端な天才振り、「晴曇」の極端な人道主義者振りは、昔の傳奇小說の極端な英雄豪傑や極端な仁人義士の所行と同樣

に、小説作法の常套であるが、外形の自然不自然に關はらず、それを生かすか生かさぬかは、作者の人間を見る目の秀れてゐるかゐないかに基くのである。

「沈丁花」のなかには、美術消息記者兼批評家の石上といふ男の面目が、他の主要な美術家どもよりも一層巧みに描寫され、一層多くの現實性を帶びて現はれてゐる。かういふ種類の批評家は、美術家にも小説家にも嫌たがられ、ひそかに侮蔑され勝ちなのが常例で、永井荷風氏の小説の中でもいつも安つぽく取扱はれてゐる。野村白風が、この批評家石上について、「何か事を構へて、その間に働きかけて、そしてそれを物にして喜ばうとしてゐる人の心をまざまざと見た」と歎じてゐるのは、作者自身の實感の現はれと云つてもいゝだらう。しかし、批評家石上に云はせたら、「小説家も、よかれ悪しかれ、何か事を構へてその間に働きかけて、そして、それを物にしようと企んでゐる」と笑ふかも知れない。天才野村白風は悲劇人として描かれてゐる筈なのだが、作者は決してこれを悲劇人として押通してはゐないのだ。いろいろに事を構へて、話の筋の變化を企てゝ、小説にしようとしてゐる。筋が變化し轉々してゐるうちに、悲劇の底へ潛り込むのではなく、その間に働きかける作者の思ひ付きが、屢々作品の根本思想を淺くしてゐる。「金色夜叉」の貫一には、作者の企てた强烈な復讐心や人生憎悪の念が、ちつとも現はれてゐないと云つていゝほ

どに現はれてゐないで、むしろ凡庸な人情家で、しかも色男であるやうに印象され、それだから、多數の讀者に喜ばれたのであつた。紅葉その人が、厭世憎人の心境に實感を持つてゐないらしいから、その作者の頭で作られた貫一も、厭世憎惡の型を演じてゐるやうなものだ。「沈丁花」の薄倖の天才である峯の野村も、實は薄倖をその額に烙印された、いたましく慘い姿を以つて私の目には浮んで來ない。彼は展覽會でこそ落選したが、多くの同輩にも、敵方の先輩にも、殆んどすべての人に技倆を認められてゐる。田邊愛胡などに、不變の友情を寄せられてゐる。ことに、美人玉葉から熱烈なる愛慕の思ひを捧げられてゐる。……貧乏繪かきに藝妓が惚れて生活費を貢ぐなんていふ事は、明治の小說にはよくあつたことで、隨分古めかしい趣向であるが、その惚れ抜いてゐる藝妓を、何とか理窟をつけて追拂ふのは、讀者を焦らすための通俗小說呼吸を心得てゐると云つていゝ。藝妓玉葉にも、女流畫家幽香にも愛情や敬意を寄せられ、失戀したとは云へ、相手の有爲子といふ女からも絶えず好意は有たれてゐる。だから、この悲劇人も側面から見ると、類ひ稀れなる色男である譯だが、作者は、悲劇人を描かんと志しながら、かうして主人物を甘やかしてゐるため、作者自身の根本の意圖を、自から打壞してゐるやうなものだ。一むきに悲劇人の後を追はうとしないのは、新聞小說といふ條件に捉へられ、讀者の思惑を顧慮して、

止むを得なかつたのであらうか。

私は、シェストフの「悲劇の哲學」を讀み、ドストエフスキーやニイチエの表現した悲劇人について瞑想したあとで、「沈丁花」を讀んだために、この小說の悲劇人の水つぽさを考へた。作者は、或は云ふかも知れない。「この小說は天才の悲劇を主として描いたのではなく、單に、日本繪畫界の或光景の寫實である」と。しかし、私はこれを世相のほんたうの寫實とは思へない。今の日本畫壇にそんな天才が出沒してゐるやうに、誰かゞ云つたら、それは夢でも見たのだらうと私には思はれる。

婦人の事からの師弟の反目、弟子の技倆に對する師匠の嫉妬など、世に有りさうなことが、作者持前の透明な筆ですら〳〵とよく書かれてゐるが、多くの面白い挿話的叙事は別として、私は、中心の問題を考へて疑問を抱いてゐる。それは、この小說をたゞの通俗小說と見ないためでもある。

三

毎月の娯樂雜誌に盛んに連載されてゐる小說をも、毎日の多くの新聞に連載されてゐる

小說をも、曾て讀んだことのない私は、所謂「通俗小說」なるものについての知識が極めて乏しいのであるが、最近に、山本有三氏の「波」と「女の一生」とを讀み、今度「沈丁花」と「晴曇」とを讀んだ。その他の作家の新聞小說をも追々讀んで見たいと思つてゐるが、山本氏や久米氏の作品は、兎に角、新聞小說中の傑れた部類に屬するらしい。明治文學史に跡を留めてゐる有名な長篇は、多く新聞に揭載されたので、新聞は創作の發表機關として光榮ある歷史を有つてゐる。讀賣新聞だけについて云つても、「多情多恨」、「金色夜叉」、「魔風戀風」、「天打つ浪」、「足跡」、「生」、「家」など、その時〳〵の大家の傑作を發表してゐる。その頃だつて、新聞は、所載小說の讀者受け如何を氣にしてゐたのだが、頒賣部數の尠かつた時代であつたためか、態度ものんびりしてゐた。德田秋聲氏の「足跡」のやうな、ちつとも當て氣のない小說についても終りまで編輯者から何の苦情も出されなかつたのである。田山花袋氏最初の長篇たる「生」と、島崎藤村氏の「家」は、私が仲介者であつたからよく知つてゐるが、主筆その他の社の關係から、作品に對して一言半句の註文もなかつた。それでは文學者としての黃金時代であつたかと云ふと、さうではなかつた。作家の筆を束縛しなかつた代り、原稿料が甚だ輕少であつた。「生」や「家」の原稿料は「女の一生」や「沈丁花」に比して、十分一以下の割合であつたと、私には推察される。

自由に筆を執らせて貰へれば原稿料なんかいくらでもいゝと言ひ切れる知名の作家が、今日一人でも居るだらうか。「學べば祿その中に在り」と孔夫子を氣取つてゐられる時世ではない。藝を磨いてさへゐれば報酬もそれに伴つて來るだらうと澄ましてはゐられない。

文學雜誌に、片々たる「私小說」を寄稿するのに比べると、何十萬の讀者相手の新聞小說製作のための魂膽は、容易ならぬものであらう。田山花袋氏は、晩年に、婦人雜誌や娛樂雜誌の小說を讀んで、「これ等の作家は何故こんな無駄な努力をするのだらう」と嘆歎してゐた。自己の藝術慾からの努力でなしに、教養の乏しい讀者の御機嫌を取るための努力を、田山氏は無駄な努力と云つたのであらう。だが、田山氏の藝術標準と、他の通俗作家の藝術標準との間には、可成り隔たりがありさうだ。田山氏の目に無駄な努力として映ずるものが、案外、今日の通俗小說家に取つては無駄な努力でないかも知れない。自然主義系統の小說よりは視野を廣くしてゐるのかも知れない。筋立てに變化を試みてゐるのも、單なる興味本位に基くだけではなく、複雜な世相を反映させるため、また人間の心理の動搖を一層微細に觀察せんがためかも知れない。それなら非難すべきものではないが、多くの通俗小說はさういふ效果を收めてゐるのであらうか。「女の一生」には、現代女性に關して新しい問題が提供されてゐるし、「沈丁花」には純眞の藝術家の惱みについて、作者が誠意を

以つて目をつけてゐる。その中心の着想を發展させ、追究し、具象化するために努力を續けて、一篇の長篇を製作したのなら、そこに、純文學も通俗小說も區別は無い譯である。ところが、「沈丁花」にては、中心人物野村白風の藝術態度、誇りも惱みも、技倆も、また藝術家對社會の關係も、初中後すべて同樣なので、小說の根底は同じことの繰返しなのだ。同じ惱みでもいゝ、それが底へ底へと深まり行くのでもない。同じ程度のものゝ繰返しである。つまり、純文學態度でこの着想を取扱つたなら、數十枚の短篇で立派に書けるものではないかと、私には想像された。田山花袋氏が、藝術の意味での「無駄な努力」と云つた評語が、必ずしも空言ではないやうに私には思はれる。日本畫界の廣い背景の前にこの一人の異樣な天才が活躍してゐるといふ印象も乏しく、バルザック物にある天才的人物が、自分の心や人の心を嚙つて行く物凄い徑路の開展があるのではなく、要するに、長い新聞小說を編成するために、いろんな面白さうな變化ある事件をくつ付けたのではないかと思はれる。作者の技倆、作者の苦心は、そのいろんな面白さうな變化ある事件を、木に竹を接いだやうでなしに、まことしやかに讀者に思はせる所にあるのだ。

「金色夜叉」は、作者の最初の意圖では、一篇で完結させる筈であつたのだが、讀者受けがよかつたために、次から次へと書き續けられたのだと聞いてゐる。形は長篇であつても、

短篇の引きのばしに過ぎない作品に、私はたび〳〵接してゐる。「女の一生」は、無論長篇でなければ收まりのつかぬもので、山本氏は、コツ〳〵と一篇の結構を仕組むことにかけては、骨身を惜まぬ努力家であるが、それだけに筆が重苦しかつたり、芝居がかつてゐる。それに比すると、「沈丁花」は、筆が輕く、辭句がすが〳〵してゐる。かういふ筆致は、通俗小說家として活躍するには適してゐるのであらう。

常例により、文藝時評には、改造や中央公論などの小說が批評されてゐるが、不斷の文壇人仲間の噂には、さういふ純文學型の作品よりは、菊池・山本・久米・直木などの諸氏の新聞小說が一層多くの關心をもつて話題にされてゐるやうである。いろ〳〵な論爭は狹い範圍での論爭に留つて、文壇の實勢力は推移してゐる。權威ある創作の舞臺として、新聞が役に立ちかけてゐるやうだ。新聞小說がどこまで文學價値を有つやうに進步するだらうか、注目すべきである。

「この頃は、文藝春秋系統の作家が巾を利かせてゐるといふ噂が屢々耳に入るが、新聞社の方でもあゝいふ人達に重きを置いてゐるのか」と、私は、或新聞記者に訊ねると、

「それは、あの人達の小說は、兎に角うまいからですよ」と、その人は答へた。

羽左、梅幸、菊五郎などの音羽屋系統が歌舞伎劇の社會で巾を利かせてゐるのと同樣な

のであらう。

して見ると、文學を一生の事業としようと志す青年は、「女の一生」「沈丁花」それから「三家庭」などを見極めて、それよりも進んだ道を拓いて行く心掛けが必要なのであらう。「沈丁花」を讀んでも、そこに描かれたる悲劇人にかぶれて、さういふ徑路を取らんと企つること勿れ。（昭和九年四月　中央公論）

西園寺公の心境

一

「西園寺公は四日午前九時四十分東京驛着、直ちに參內、御下問に奉答する前、別項の如く宮中にて諸重臣と會見、更に牧野內府と會見、協議を遂げた結果、海軍大將岡田啓介氏を時局收拾の最適者として奏薦するに決したので、園公は午前十一時十五分天皇陛下に拜謁仰付けられ、岡田大將を最も適任と思料する旨を奏上し、陛下には直ちに西園寺公の奏薦を御嘉納あらせられて、老公の勞を犒はせ給ひ、西園寺公は感激して御前を退去した：」

四日の「東京朝日」の夕刊を手にした私は、この特別見出しの、全讀者の興味を集收さ

すべき大記事を一瞥した瞬間、この老公の清澄無礙の心境を覗いたやうな感じがした。私は現代の政治について知識も興味も極めて乏しく、平生「朝日」と「日日」との記事をザッと見てゐるに過ぎないのだが、その私が、「西園寺といふ人は凡でない」と、ふと感じたのだ。後繼内閣の首領の豫想は、私に毎日何がしの政治知識を與へてゐる二大新聞には無論勿體ぶつて出てゐたやうだが、岡田大將は殆んど問題にされてゐなかつたやうだ。競馬場の入口で、まことしやかな口調で勝ち馬の豫想を說いてゐる競馬新聞の豫想が外れたやうなものだ。後でこそ「かうあるべきこと」が首肯され、番狂はせでないことが分つても新聞記者の頭腦がそこまで微妙に働かなかつたのであらう。

私は、岡田大將についても知るところが極めて乏しい。二三の新聞の政治記事を根據として我が現代政治觀を吐露するやうな柔氣もない。それよりも、西園寺公望といふ人はどういふ如何なる人であるかと不審を起した。私は、政治家には殆んど一人の知友もない。新聞雜誌の記事を通し、或は馬場恒吾君など論評家の所說によつて、現代知名の政治家の風丰を想像するだけであるが、どれも霞を隔てて物を見るやうでハッキリしない。現存の政治家ばかりではなく、明治以來の世間周知の大政治家についても印象不鮮明で、從つて、そのうちの誰の功績に對し、人となりに對し敬意を寄せていゝのか、私には見當がつ

かない。勝海舟、大久保利通、伊藤博文、大隈重信、陸奥宗光なんかは、偉大なる政治家であつたのであらうと、漠然考へられてゐたが、しかし私にはそれ等の英雄の本體は明かにされてゐないのだから、彼等のえらさを說明することは出來ない。私は、年少の頃、國民新聞に德富蘇峰氏が「氷川清話」と題し、海舟翁の座談を面白い文章で寫して連載してゐたのを愛讀したことがあつたのを思出し、數年前、岩波文庫の中に、新たに巖本善治編の「海舟座談」が刊行されたのを見て、一本を購つて讀下した。ところが、私には興味索然であつた。あの頃の時代についての斷片的史實は得られても、話者の識見批判力などに感心するところはなかつた。將來の豫言らしいことを好んで云つてゐたが、今日から見ると大抵は外れてゐる。先見の明なんか當てにならないものだ。陸奥宗光の「蹇蹇錄」も讀んだ。日清戰爭前後の外交政略の概要を叙したもので、史實として價値はあるが、人としての宗光については、私は得るところはなかつた。識見高邁とか、氣宇何とかいふ、抽象的漢語を用ひた人物評は當てにならないので、人間性の活躍をまざ〳〵と見られるやうな自傳にでも論評にでも私は接したいのである。剃刀のやうな陸奥であつても、「ケン〳〵錄」には、さういふ頭腦の冴えが現はれてゐなかつた。そこへ行くと、グルー卿の外交回顧錄なんか幅もあり厚味もあり、人間の頭腦の働きが眼前に現はれてゐるやうに感ぜられ

る。新井白石の「折たく柴の記」も面白い。白石は非凡な政治家ではなかつたか知れない。人として虚飾や衒氣を脫却してゐなかつたか知れない。しかし、その自傳には人間的生氣が横溢してゐる。明治以來の政治家のは、自分の書いたものでも、人に書かせたものでも、多くは千物のやうだ。天下國家を料理する政治家の衣服を着用した態度で、物々しく識見を振廻したがる。伊藤博文の詩は相當上手なやうだが、支那傳來の政治家氣取り豪傑氣取りの口吻をつねに弄してゐる。政治家だから政治家らしい詩を作るのは自然であると辯護する勿れ。政爭に負けて止むを得ず官を辭しても、印綬を解き淡然として山川に親しむやうなことを型の如く詠じたがるのだ。漢詩にでも和歌にでも裏心の本音を吐かないのだ。

二

そこで、西園寺公である。

私は、今度、西園寺研究文書として、竹越與三郎氏の「陶庵公」白柳秀湖君の「西園寺公望傳」木村毅君の「西園寺公望」田中貢太郎君の「西園寺公望傳」及び小泉策太郎氏の西園寺隨錄の出てゐる「中央公論」三冊を机上に置いた。かういふ傳記が近年刊行されてゐ

るのによつて見ると、近年の西園寺公は可成り世人の注意を惹いてゐることが察せられる。全體、政治家文學者軍人などの傳記は、書きやうによつては面白いものなので、私は、ルドウィッヒの、「ナポレオン」「カイゼル」「ビスマーク」「ゲーテ」などを、卷を擱く能はざる思ひをして讀んだ。明治以來の諸方面の有名人の傳記をもかういふ風に面白く書けないものだらうか。評論家も、毎月の文藝時評だの政治批評だの、小刻みに才筆を勞しないで、一人の偉人傳でも惡臣傳でも、或は平凡政治家傳でも、擒縱自在の筆法で著したら、空疎低劣な大衆小說なんかよりは歡迎されはしないかと思はれた。しかし、明治以來の有名人も、內容がプアーで、ルドウィッヒの才筆を以つてしても、とても讀者の興味をつなぎ得られないかも知れぬと疑はれないでもない。

兎に角、机上の西園寺傳は、どれも傳記として非常に優秀なものとは云はれない。ルドウィッヒの奈翁傳では、ことに、私の興味を覺えたのは、女性關係と兄弟關係である。かつてチャプリン來朝の時、彼はナポレオンを映畫にしたいといふ希望を話し、それには兄弟關係を取扱ひたいと云つてゐるのを、何かの新聞記事で讀んで、彼の着眼に私は同感した。(日本の通俗奈翁傳では、菊池寛氏のと鶴見祐輔氏のとを讀んだが、前者は戰爭外交その他を同じ調子で書き流してゐるだけで平板であつた。後者は、むしろ女性關係と兄弟關

係とに重きを置いてゐるらしく、興味をもつて讀まれた）

「西園寺さんが人物の選拔なんかに冴えた腕を見せられるのは、奥さんがないせゐぢやないでせうか」

私は、先日、或知人の洩らしたこの評語を聞いて、自分の云はんとする所を云はれたやうに同感した。人間はつねに環境の支配を受けてゐるのだ。友人や先輩、部下の者によつて心を左右されるのも當然であるが、さうすると、日常同棲を續けてゐる婦人の感化は強烈であるべき筈だ。愛憎如何に關はらず、たえず影響されてゐるのだ。それは、平凡人のことで、英雄偉人は異つてゐると思つたら、大間違ひである。さう思ふやうな人間には傑れた傳記は書けないに極つてゐる。女性は男子に取つては極めて優秀なる生物で、讃美すべきものではあるが、それと一もに、實際界の事件については、男性の純正の判斷力を鈍らすのを常例としてゐる。日本の女性は外國のそれのやうに、大つぴらに男子を驅使してゐないが、陰性なものは、なほ更恐るべきである。「おれは嚊あなんかにくらまされないと傲語する男子があつても、私はその男子が火星から來た人間ででもなければ、その語を信じかねるのである。

眞僞何れか知らないが、西園寺家の家憲では、當主は正妻を娶らないことゝなつてゐた

さうだ。これも男子の處世法として悪いことではない。嫉妬深い辨財天が祟るので、祟りを避けるために正妻を娶らないと云ふ傳說は、味はひのある傳說である。しかし、公が正妻を娶らなかつたにしても、それはフランスの政治家や文學者の獨身生活と同樣に、徹底的な女性無視でなかつたことは云ふまでもない。巴里のカフェー星旗樓で光妙寺三郎にはじめて會つた時、「如何なるこれ風流？」との三郎の問ひに應じ、公は、「執拗これ風流」と答へたが、公はこの風流を生涯享樂した人であるらしい。洒々落々が公の本領のやうに云はれてゐるが、この風流には、自ら執拗なところが附隨し、從つて苦惱の影が添ふに違ひないので、公だつて全然例外であつたとは思はれない。中江兆民が生前の遺稿として執筆した「一年有半」に於て、「西園寺侯、氣宇高亮、識見宏遠にして、加ふに聰明叡儁なし、但其甚だ聰明にして、一切事に於て直ちに輒ち其着落の處を透觀するがために、一も侯の好奇心を動ずるに足るなし、卽ち天下如何なる事も侯に於ては始めより奇なるなし、卽ち此侯や好奇心有る無し、是れ其冷々然として些の內熱なくして、其丰采に接し其言語を聽く者をして、亦皆其內熱を冷却し去らしむる所以也」と云つてゐる。

「海舟座談」のなかにも、「西園寺は如何」との客の問ひに應じて、「伊藤さんの子分でネ。アーさうさ、利巧の方サ」と答へてゐる。

鳥羽伏見の役の時、或發言により、「小僧よく見た」と、岩倉に褒められて以來、公は、「聰明」の權化のやうな定評を得てゐる。竹越氏の「陶庵公」を通讀しても、政界に於ける公の行動には、兆民の所謂、「一切事に於て直ちに其着落の處を透觀」してゐるやうなところが多少見られないではない。私は、明治以來の文學者の中では、森鷗外を最も聰明な人としてゐるが、明治以來の政治家の中では、陶庵公が最も聰明な人なのであらうか。鷗外の聰明はその作品に於て明かにこれを認めることが出來るが、政治家の頭腦の聰明は、その行動によつて推測するのだから、私にはハッキリしない。鷗外の聰明は、さま〴〵な浮世の娯樂も、つまりは心を苦しめる結果を齎すことを透觀して、それ等を斥けて一途に學問藝術に興味を向けた。陶庵公の聰明は、鷗外の聰明とは聰明の姿が異つてゐた。「一も侯の好奇心を動ずるに足るものなし」と兆民の云つたのは、概括的評語で、西園寺公も、旺盛な好奇心があればこそ、あの頃外遊を志した。感受性の強い青年期には、見る物聞く物の珍らしかつたことは云ふまでもないので、それは、「歐羅巴紀遊抜書」と題して最近好事家に頒たれたといふ、當時の日記の斷片によつても察せられる。巴里で、朝夕の定食の獻立を細叙し、「下等の定食は上等に比べると乞食のやうだけれども、それでも日本に比べると、大納言參議位のくらしだ」と感想を洩らしてゐる。はじめは、歐洲の風俗を

夷狄の如しと憤慨し、洋行無益論を知人に書き送つた公も次第に彼地の文化を鑑賞し感化を受けたに違ひない。「一言にして云へば、公はパリジャンすらも驚くほどのパリジャンとなつて、人生といふ杯から、泡も澱味も共に一氣に飲み干した」と、竹越氏は氏らしい言葉で評してゐるが、これは、公でなくつても、大抵の青年が巴里あたりにゐて小遣錢に事を缺かねば、泡も澱味も一氣に飲みたくなるであらう。光妙寺との窓ガラス打破事件は有名であるが、今でも、フランスで柔道の手で無禮な洋人を投倒しなどする武勇傳の一節は、我々も屢々聞かされてゐる。

だが、陶庵公は、武士道に累せられるところはあまりなかつたであらうと思はれる。武士道は武門武士の間に發生し、德川家康が自家持續のために朱子學などを應用して、その道の培養をつとめたのであつたが、治者の施政方針の民衆に及ぼす影響は強烈なるもので、封建制度に適した武士道は、人心に沁込んだ。近松でも馬琴でも、或は芭蕉でも、根柢に武士道を据ゑてゐた。文學藝術の士が時代の先驅者であり反抗者であるとは、容易に受取れないので、多くは追隨者であるのだ。聰明の人森鷗外に於てさへ、その文學にも思想にも武士道の影が濃厚に差してゐるのに、私はいつも興味を有つてゐる。內村鑑三のやうな人でも、その基督教は封建的武士道を根に有つた基督教であつた。中江兆民は奇矯の士

であつたが、「一年有半」を讀むと、柔順なる武士道の保持者であつたことが察せられる。「皇室を圍繞する貴族を、一概に稱して公家といひ、或は公卿といふ字を用ひて武家に對稱するやうになつた」のだが、陶庵公はそのお公卿樣の一人である。藤原家の傳統を受けてゐる生粹のお公卿樣である。源平以來の武門武士によつて壓迫を續けられて來た階級の末裔である。時代の追隨者である德川期の戲作者や演劇人によつて、いつも嘲笑的に表現されてゐた階級の子孫である。心中ひそかに武家政治に對抗して來た公卿には、武士道はない筈である。討幕に努力しても、薩摩長州の田舍武士の意氣込とは、意氣込が異つてゐた筈だ。勤王の心も靖獻遺言に刺戟される武人の心とは異つてゐた筈だ。王政復古は、公卿階級に取つても復古の夢を誘はれたのである。

陶庵公は武士道に累はされないで、歐洲の政治風俗教育文藝などに接觸したのだ。のびのびとその境地を享樂してゐられた譯だ。武士道には鬪志を含んでゐる。「我兵を用ひんか。ハンニバル、ナポレオンには踰ゆべからず、政事を執らんか、ビスマルク、カヴールには勝るべからず、且つたとひ我之れをなさざるも、世間之れを爲す者餘り有り、我何ぞ人と功名權勢を爭ふことを須ゐんや」と云つて、中江兆民は、公の心を忖度してゐるが、鬪志の缺けてゐた公は、自分の吸收した新知識をひつさげて、明治新政府を指導しようといふ

やうな大それた考へに燃えてゐなかつたに違ひない。伊藤や井上は、英國の下宿屋で、長州砲撃の報を聞いて、急遽歸國の途に就いたが、公は、西南の變を聞いても雲烟過眼視してゐたかも知れない。在佛の或薩人が歸心を生じたのを引留めたくらゐである。新島襄は西洋の宗教にかぶれてこれによつて日本を救濟しようとの大望を抱いて歸朝した。馬場辰猪にしても森有禮にしても、大眞面目で日本の舊思想舊風俗打破の意氣をもつて歸朝した。

かういふ「志士」揃ひのうちで、陶庵公は最も消極的の心境に安住してゐたのぢやないかと思はれる。消極的の人間が、多難な國家に於て指導者の地位に立つのは、甚だ不似合なやうに思はれるが、周圍の事情が自然に公を祭上げてさういふ人物にしてしまつた。「東洋自由新聞」の發刊にしても、「世界の日本」の發刊にしても、自から進んでやつたのではないらしい。官界政界の行動についても多くはさうであつたらしい。明治以來、消極的の人間で、おのづからえらくなつたのは、西園寺公を第一とする。この世智辛い世の中で、多くの艱苦を嘗めずして出世をするのは、異例であり、從つて、公の生涯は青年の模範とすべきものではない。

公の傳記を讀むと、こんな幸運な人があるかと思はれる。しかし、讀者をしてさう思はせるのは、或は傳記作者の觀察や描寫がいたらないためかも知れない。

三

幾つかの西園寺傳のうちでは、無論竹越氏のが、最もコクがある。桂西園寺對立時代の叙述が面白い。竹越氏は西園寺門下で、政爭の渦中にあり、自分も一役勤めてゐた人ほどあつて、だゞの聞き書き、調べ書きとは異り、當時の事件の機微にも通じ、筆にも熱がある。それだけに傍觀的公平は失してゐる。幕府側から書いた維新史と、薩長側から書いた維新史とは、自から趣きを異にするにちがひない。しかし、私はこの、桂をもつて惡辣風俗の政治家とし、西園寺をもつて高邁叡智の政治家としてゐる傳記を讀みながら、却つて桂といふ人に對して異常の興味を感じた。積極と消極の爭鬪に、人間性の躍動を見た。明治初年、西園寺は佛蘭西に遊び、桂は獨逸に遊んだ。前者は位倒れの貧乏公卿であり、後者は下級武士であつた。桂は出世したいために惡戰苦鬪した。山縣の所謂「雪隱で首を縊つたやうな」最後を遂げるまで、徹底して自分の權勢慾を押進めた。「人生といふ杯から泡も滓味も一氣に飲み干し」たといふ竹越氏らしい評語も、或意味では、桂公のやうな人に適切なのではあるまいか。人生の事、女性に對しても、權勢に對しても、惑溺してこ

そ強烈にその味はひが味はひ盡くせるので、淡々として事物を送迎してゐては、人生諸般の本當のうま味が分るものぢやあるまい。聰明な人には先が見える。一切事に於て直ちに其着落の處を透觀す」と、兆民が云つてゐるが、これも程度問題である。兎に角、先の先が見えたら、努力の張合ひがないに極つてゐる。

聰明人の聰明たる所を、傳記によつて搜して見ると、明治二十年代に、保守派の井上毅の後を受けて文部大臣となつた時に、各府縣の師範學校長を集め、一場の訓示演說をして「わが國は世界の活勢と共に推移せねばならぬから、教育もまた又これを方針とせねばならぬ」と喝破して、保守黨の巢窟であつた當時の教育社會を驚愕させたこと。ボーツマス條約の後、輿論これに飽き足らず、喧囂を極めた時、それを止むを得ざるものであるとし、國民はむしろ、戰後の經營、國力の恢興に留心せざるべからずと演說したことなど、聰明の現はれには違ひないが、このくらゐの聰明は多くの人が備へてゐたのではあるまいか。このくらゐの說を吐くにも勇氣を要したとすると、明治の日本は如何に言論の自由が壓迫されてゐたかと驚かれるのである。

森鷗外の或短篇小說に、こんなことの書かれてゐたのを、私は朧げに記憶してゐる。作者の影法師らしい青年が、獨逸に留學した時、儀禮として、時の駐獨日本公使（青木周藏

らしい人）を訪ねて敬意を表すると、獨逸崇拜者たる公使は、指で鼻くそをほじくる癖のある蠻人が文明國へ來て云々と、勝ちなく應答した。武士道の保持者たる青年は、それがぐつと癪に障つたらしい。この青年は、讀書家であつたが、さまざまな小說や戲曲を、何年も讀み耽つてゐた間に、遂に、「西洋にも指で鼻くそをほじくつて、丸藥をつくる人間のゐる」ことを、ふたところで發見して、復讐をした如くに痛快を感じて微笑したのであつた。學者が強權者、ことに無智の強權者に對する反抗はこんなものである。文人のうちに、若し強權者に追隨せず時代に雷同しないものが、假りにあつたとしたら、書齋に獨住して、かういふ態度で強權者を嘲つてやるくらゐが落ちだ。

西園寺公は、文筆者などとは異り、自分で好む好まぬに關はらず、早くから強權者の仲間に引上げられたので、強權者と正面衝突をしなければならぬ場合が多かつた。強權者は薩長閥であり、軍部であり、官僚であるばかりでなく、時としては民衆であることもあつたが、公は衝突の場合には何時も身をかはして、する〳〵と巧みに脫け出したやうである。壽を保つた所以である。男子の心魂に對し、他の強權者よりもむしろ多くの支配力を有つてゐるらしい女性に對しても、園公は多分、桂公よりも、色戀の杯を滓までも飮まなかつたであらうと察せられる。風流宰相とか粹〇〇とか云つて、藝妓遊びなんかを、風流

視するのは、隨分いやみな感じが與へられる。積極的聰明なナポレオンも女性には捉はれて、心を曇らせたのであつたが、西園寺公は過去に於て「執拗な風流」を經驗したにしても、心魂を掻廻されるさきに、するすると拔け出してゐたのであらう。鷗外は萬卷の書を讀んでも、どの哲人にも文學者にも追隨する氣持になれなかつたと云つてゐる。公も維新前の少年時代に、すでに二十一史を讀破した（小泉三申氏の臆測による）ほどなら、相當の讀書家であり、十九世紀のフランス文學をも愛誦してゐるにちがひないが、誰を崇拜し、誰に追隨しようと思はなかつたであらうと察せられる。

さまざまな知識を具へながら、何物にも捉へられざる聰明な人間は、自分で事に當つて大なる功績を擧げることは疑はしいが、傍觀者としては、要點を逸しないのである。私は西園寺公が、政治家として、桂公よりも積極的な功績を擧げたとは信じがたく思ふが、唯一の元老としての現在の地位では、聰明なる消極人としての素質を最も發揮し得るのである。

年少にして、巴里のカフェーで窓ガラスを叩き壞したやうな積極的行爲は、その後の公の生涯に見られない。頽齡の今日、首相推薦に當つて、積極的に自己の理想の强調、自己の夢想の實現を試みる筈はない。

しかし、偉大なる消極家としての公の態度を、戯曲中の人物として想像すると、あの態度に、無言の現代批評があり、現代に對する皮肉があるのかも知れない。

四

戯曲と云へば、木村毅君が「西園寺公望」と題する戯曲を創作してゐる。中村吉藏君の「中江兆民」劇をもかつて讀んだことがあつたが、木村君のは上演を目的として書かれたものではないらしく、甚だしく說明的である。同君の「星旗樓祕聞」と題した探偵小說見たいなものをも、「サンデー毎日」で讀んだこともある。現存の大人物を小說や戯曲に取扱ふのは甚だ困難であるらしい。我々が接觸してゐる普通人とは異つた一種奇怪な人間のやうに印象され勝ちだ。木村君は、殊更らしい芝居の臺詞に墮しないやうに、寫實口調で書き流してゐるのだが、それに關はらず全體の印象が切口上で、天眞流露のところがない。華族社會の人々や、國士志士或は大臣階級の人々は、ふだんあゝいふ口調で話をしてゐるのであらうか。私は全然それ等の人々に交はつたことがないから分らないが、不思議に感ぜられる。殆んど二十年前に、伊香保の木暮の別館で二週間ほど避暑してゐた時、私達の

居間の直ぐ下に、木暮所有の貸別荘があつたが、その粗末な小さな平家建ての別荘に、西園寺公が避暑してゐられた。ある日私が湯元道を散歩してゐた時、公が榛名登山のお帰りらしく、山駕籠に乗つて通られた。私は、その時はじめて、公の風丰を一瞥したが、立派な人だと思つたゞけで、さして普通人と異つてゐるとは思はなかつた。

誰かゞ、「文藝春秋」に、柳澤保恵（伯？）が、歐洲通ひの汽船の中で、口癖のやうに「無禮者ッ」「下にをらう！」と云つてゐたと書いたのに對し、柳澤伯は、そんな時代錯誤の言葉を吐いた覚えはないと訂正してゐた。その訂正文中に、講談なんかに、乃木大將が從卒の遺族の家を訪問する時、「許せよ」と聲を掛けることになつてゐるのを、笑つてゐた。大衆小説なんかには、この「許せよ」調子が多く、讀者も亦それを喜んでゐるらしい。小泉三申氏が、西園寺公が維新前（二十歳未滿）にすでに二十一史を讀破し、餘力を支那の近世史にまで及ぼしたと認めてゐるのも、私は、自分の少年時代を回想して信じ得られないのだ。專門の漢學者にしても二十一史を讀破したものが幾人あらうか。昔の人間なら、宮本武藏でも岩見重太郎でも、百人力あり千人力ありとして、人間の英雄崇拜癖、強力渇望慾を、空想裡に滿足さすために意味があると云つてもいゝが、現在の角力取りとか拳闘家とか軍人とかに、文字通りに、百人力千人力の勇士が存在してゐると、眞顏に吹

聽するのは、法螺吹屋彌次郎兵衛の言草である。柳澤伯の「下にをらう／＼」の制止聲は、御當人辯護の通り、捏造事であつたにしても、封建時代の强權者の壓力は、我々の上にも、遺傳的にまだ殘つてゐて、そこらに百人力や千人力の剛の者が現存してゐて「下にをらう下にをらう」と云つてゐるやうに迷想して、薄氣味惡く感ぜさせられたりしてゐる。「文藝春秋」の筆者も、航海中、甲板で柳澤伯の影を見ると、遺傳的恐怖心が突發して、「下にをらう」を、まぼろしの聲として耳に入れたのではあるまいか。

聰明なる消極人西園寺公望公は、いかなる意味に於ても自己を英雄扱ひされることは好まれないに違ひない。私がひそかに親しみを覺ゆる所以である。（昭和九年八月　中央公論）

文學者としての逍遙先生

春陽堂刊行の「逍遙選集」十五卷を、近所の古本屋で買つて、數日間を費して、一通り通讀した。大抵は過去數十年間に、をりに觸れて熟讀し或は速讀したものゝ復習なので、要所々々を撰んで讀んだと云つていゝ。實は我が「明治文壇人物評論」の最後として、坪内逍遙論を書かうかと、ぶしつけに考へたのであつたが、何となく心が進まないので、それは見合せることにした。しかし、折角通讀したのだから、讀後の印象を心覺えに書留めて置いた方がよさゝうに思はれるので、秩序なく、斷片的に記すことにした。

○

浩瀚な選集を時代順に見てゐると、それ自身、明治文學史及び明治大正演劇史を讀んでゐるやうだ。先生は時代に先立つて何かを思ひ付かれ、一生の徑路が自ら先驅者のやうな形をなしてゐる。少くも時代に遲れないやうに努力されたことが、他のどの大家の文學生涯よりもまざ〳〵と現はれてゐる。自分の趣味に耽つてゐたやうでありながら、實際は、大正、昭和となつても、時代を無視することなく、新しい時代の流れにつよい關心を有つてゐられた。幸田露伴氏とは態度が異つてゐた。態度の相違は、生れながらの素質の然らしむるところである。

先生が少年時代に、名古屋の貸本屋「大惣」の多量な藏書により德川末期の戲作者本を讀破され、上京後、當時の日本で手にし得られた僅少の英國の小說や文學論によつて刺戟されて、新代の文學の取るべき道を朧げながら感得されたのは、頭腦の銳敏さを示してゐるのであるが、しかし「大惣」の藏書をあまり多く讀まれたことは、先生の一生を累はしてゐるのだ。「新日本の文明は士人無學の賜物なり」と、福澤諭吉が喝破してゐるが、德川末期の溝泥文學に、感受性の銳敏な年少時代に浸つてゐた者は、その泥の臭みが一生脫けきらない譯である。批判力反省力に富んだ先生は、その臭みから脫せんとされたが、それは不可能なことであつた。そして、故鄉愛着幼時追懷の人間の通性として、先生は、とも

すると、溝泥文學溝泥藝術に郷愁を覺え、たび〳〵それを美化せんと企てられた。脫せんとし、或は脫したつもりでゐながら、過去を愛慕するところに、人間心理の交錯を私は見たのだが、そこに、坪内逍遙獨得らしい詩趣を、私は全集を讀みながら感じた。

だから、先生は「先驅者」のやうでありながら、内面からの先驅者になり切れなかつた。鋭敏な頭腦を具へながら、先生は、眞の先驅者たるべき環境に惠まれてゐなかつた。「大惣」の末期文學と英國の十八世紀文學。これを、早くからロシアの近代文學に接觸し得られた二葉亭や、新興獨逸の醱勃たる藝術と思想の雰圍氣に幾年か身を置いて來た鷗外に比べると、逍遙先生は先驅者たるべき心魂の糧が貧しかつた。

「沒理想論」に關する逍遙鷗外の論戰は、明治文學評論史上最初の論戰として意味のあるものであるが、鷗外の方では、歐洲古今の文學史美學史を背景としたのに、逍遙先生の方では何もなかつたのだ。大砲や機關銃に對して、手製の竹槍で闘はんとしたやうなものであつた。しかし、鷗外が獨創に富み逍遙が凡庸であつたのではない。それどころか、逍遙先生が、幾冊かのシェークスピアを讀んで、この脚本作家の作品には、勸善懲惡の主旨が宿つてゐないのみならず、何等の理窟も現はれてゐないで、自然の姿そのまゝであることを感じ「沒理想」の作品であると斷じたのは、あの頃の日本の文學者としては、獨創の批

判力を有つてゐたと云つていゝのだ。「主觀」及び「客觀」と云ふ平凡な初歩の文學評論の用語さへ知られてゐなかつた當時の文壇で、獨自一己の讀み方をして、沙翁の脚本には、理想がない、「沒理想」であると直感したのは、頭腦凡庸でないと云つていゝ。

「祇園精舍の鐘の聲、浮屠氏は聞きて寂滅爲樂の響なりといへども、待宵には情人が何と聞くらん。沙羅雙樹の花の色、厭世家の目には諸行無常の形とも見ゆらんが、愁ひを知らぬ乙女は、如何さまに眺むらん。要するに、造化の本意は人未だ之れを得知らず、唯己に愁ひの心ありて私の哀れを知り、己に其の心樂しくして春の花鳥を樂しと見るのみ。造化の本體は無心たるべし、さてシェークスピアの傑作は、頗る此の造化に似たり」

沙翁「沒理想」の獨自の見も、かういふ美文調で說かれるのが、先生の一生を通じての文章癖で、明治二十年代には讀者に或快感を與へたが、後には空虛なわざとらしい感じを與へるやうになつた。

鷗外曰く、「破がねならぬ祇園精舍の鐘を聞くものは、待人戀ひしとおもひ、寂滅爲樂とも感ずべけれど、其聲の美に感ずるは一なり、沙羅雙樹の花の色を見る者は諸行無常とも觀じ、また只管にめでたしとも眺むめれど、其色の美なりとは、耳ありて能く聞くために感ずるにあらず、目ありて能く視るために感ずるにあらず、先天の理想はこの時時刻刻よ

り躍りいでて、此聲美なり、この色美なりと叫ぶなり、これ感納性の上の理想にあらずや」

「先天の理想」などを、事々しく持出して論じまくる所に、颯爽たる鷗外の意氣が見られるばかりでなく、「どうだ、かういふ深遂な哲理は汝等はまだ知るまい」と嘯いてゐる新歸朝者の面魂が目に見えるやうである。私は、この論戰を讀み、逍遙先生のために氣の毒に感じた。先生が西洋の新知識を獲得すべく一生努力されたのは、二葉亭の感化と云ふよりも、鷗外との論戰によつて發憤されたゝめではあるまいか。

「小說神髓」や「沒理想」論の發表から、二三十年を經た後に執筆され、或は講演されたイブセンやショウの研究評論を見ると、先生の學問的精進努力の跡が明かに想像される。自然主義系統の文學者が盛んにイブセンなどを唱へてゐた時分に大して讀みもせず、研究もしないで、イブセン張りの「すべてか、皆無か」や、現實曝露の是非を目やかましく說いてゐた時分に、先生はイブセンの眞な物は通讀玩味されてゐたらしい。そして、行屆いた解說や批評をされて居る。自分の研究した事を分り易く人に教へるのが、先生に具つた特長で、教育家として群を拔いたことは、イブセンやショウの紹介振りによつても推察される。

私が學生時代に、教場で講義のはじまる前に、「今度フローベルといふフランスの小説家のマダムボヴァリとサランボウとをざつと讀んで圖書館に屆けて置いた。讀みたい人はお讀みなさい。かういふ小説はやたらに會話を使つてはゐない」と、或日云はれたことがあつた。當時の日本の小説は、會話澤山で小説の筋を運んでゐたので、先生はそれを心に置いてさう云はれたのであらう。日露開戰よりも二三年も前のことで、まだ自然主義の聲の聞えない時分であつたのに、先生は既にフローベルを讀んでゐられたのだ。私は早速圖書館へ行つて、その新しい英譯本を借りて見るだけは見た。その頃上野の圖書館に、「感情教育」の上製の英譯本が新たに買入れられてあつたので、私はこれは借出して讀みかけたがちつとも面白くないので中止した。

逍遙先生にしても、フローベルなどを英國の小說以上に心讀されたとは思はれないが、「汲理想」論を推し進めたなら、フローベルなどゝ文學觀の相通ずるところがあつた筈だ。田山花袋の信念と共鳴すべき筈であつたと私は感じてゐる。汲理想論の發端たる「マクベス評釋の緒言」のうちに、沙翁は、「天稟の詩眼によく人間を觀破し、不偏公平の筆をもて自然の有りのまゝを描きしならんか」と云ひ、そこに沙翁の大を認めてゐられる。自然の有りのまゝを描かんとは、田山花袋などの熱說したところで、自然主義の本領とされてゐ

たのでないか。早稲田文學は「記實」を志し、「談理」に恥らざるべしと、執筆態度を明かにされてゐるが、この態度を小說の上にうつすと、現實の客觀的描寫を是とすることになるのである。島村抱月氏が自然主義の仲間に入つて、この流派の眞意義の闡明に努力されたのは、逍遙先生が早く直覺されたゞけで放任された「沒理想」精神を、無意識に受嗣いで、發展させ追究させたやうなものである。

何としても、「記實」はいゝことである。小理論に恥るよりもいゝ。しかし、凡庸な記實に終始しては文學的價値は乏しい。「早稲田の記實には飽足らなかつた」と、田山氏も云つてゐる。皮相な寫實、凡庸な客觀文學は、青年氣鋭の文學者に好まれよう筈はなかつた。

○

高山樗牛は、硯友社の惡寫實を痛罵し、時代精神の把握、文明批評の必要を作家に警告したが、それにつれて、盛んに西洋の近代文學者の名前を持出し、就中ニーチェを守り本尊のやうにひけらかして力說した。これに反抗して滔々と辯ぜられたのが、坪内先生の「馬骨人言」であつた。ツアラトストラを「如是觀」と譯されたのは先生であるが、それに對

する「馬骨人言」は、「馬ノ骨人ノゴトク言フ」との意味ださうであるから面白い。先生の論文でこれ程激語悪語を含んだものは、全集中にも他に見當らない。讀賣新聞に連載されたもので、隨分長いものである。「沒理想」論のうちに、稍々戯談らしい筆つきで「我れも又更に深く先生が哲學を聽きて、想のみち〳〵たる所以を覺悟せば、而して之れを信ずるを得るに至らば、此の禿たる記實の筆を擲ち、先生が驥尾に附して、破邪顯正の文を草せんか」と、論者鷗外に向つて云つてゐる。

しからば、時來つて、ニーチエに對し、ニーチエの追隨者に對して、破邪顯正の文を草されたのであらうか。これも明治文學史上の一現象として注目に價してゐるが、それは、外來の思想でも文學でも、つねに淺薄に取入れられた明治時代の光景の說明に役立つ意味で注目に價するのである。

先生は、「書生氣質」をもつて「舊惡全書」であると卑下され、その絶版を望まれたこともあつたやうだが、「書生氣質」は、先生の創作中、最も興味のあるもの、一つであると、私は信じてゐる。文章は江戸文學の調子をそつくり傳へてゐて、何等の新味も見られないが、しかし、明治十年代の學生氣質、東京風俗、文明開化を謳歌してゐたあの時代の面影が自ら作中に映つてゐる。その點では、默阿彌のザンギリ芝居や、末廣鐵腸の政治小說、

その他あの頃の著作のどれも、「書生氣質」には及ばないのだ。趣向を凝らされた小説や戯曲よりも、無心にして書き流された「書生氣質」に、却つて純粹な作者の持味を私は感ずるのである。私は、十五卷の「逍遙選集」のうち割愛すべきものは、むしろ「馬骨人言」であると思ふ。當時先生は、中學教育に從事され實踐倫理に思ひを凝らしてゐられたのであるが、そのためか一途にニーチェ哲學を危險視し、狂犬の襲來に心の顚倒した人のやうな有樣であつた。立場を異にすれば、ニーチェは大いに論破され虐殺さるべき性質の怪物であるかも知れないが、それは田舍の老儒者か、中學や女學校の修身の先生の手で息の根を止められるほどに脆弱な者ではあるまい。「ガリヴアの島巡り」には、物を言ふ不思議な馬の住む國があつて、それ等の馬が人間を冷嘲諷刺するのであるが、その小說になぞらへて命名されたらしい「馬骨人言」には、スイフトの筆鋒の破片も見られない。むしろ攻擊されるニーチェの方にスイフトの面影があるので、常識的駁論の矢なんかは、雨あられと亂發されても、鋼鐵の如き甲羅を具へた怪物から刎ね返されるばかりである。

全體ニーチェを主唱した栲牛にしても、美辭麗句を並べ、ニーチェに托して青年らしい感慨を勝手に洩らしてゐたに過ぎなかつたので、お國ものゝ日蓮を憧憬し宣傳するに及んでもつと根底的に自己の才分を發揮したのである。それで、「馬骨人言」も、當時の淺薄皮

相なニーチエ讃美論に對しては意味のある攻撃論文であつたかも知れない。

鷗外はさすがに異つてゐた。誰にも追隨しないが、或傑れた人々に會ふと、路傍に立つて帽を脫いで敬意を表したと云つてゐる彼は、「超人哲學」にも、全面的には感服しなくつても、帽を脫ぐ程度には重きを置いたらしい。彼の戲曲「假面」には、家畜道德を侮蔑したニーチエ哲學の一端が現はれてゐる。それだからと云つて、鷗外が舊套の道德觀を脫却し、舊習打破の文學を熱愛してゐたとも云はれない。私は昨年故郷滯在中に、鷗外全集を復習し、興味を新たにしたのであつたが、今まで氣づかなかつた斷片的評論（多分しがらみ艸紙に出てゐたのであらう）のうちに、トルストイの「闇の力」や、ストリンドベルヒの戲曲に關して感想を洩らしてゐるのを見付けて、明治二十年代の初期に早くもかういうものを讀んでゐたのに驚き、これだから、當時の幼稚な日本の文壇に對して傲然たる態度を取つてゐた譯だと感じた。ところが、鷗外はそれ等の戲曲を不愉快な作品と見做し、文學の邪道であると簡單明瞭に片付けてゐるのだから面白い。夏目漱石はモウッパッサンの小說の不道德を罵つてゐる。坪内逍遙の「馬骨人言」のみを咽ふべけんや。押詰めると、誰も皆同腹中か。

鷗外逍遙紅葉露伴が、自然主義勃興前までの新日本の文壇の代表的巨匠として、重んぜ

られてゐたのであるが、どれも皆根底には武士道儒者道の名殘りを濃厚に留めてゐた。內村鑑三の基督教だつて武士道的基督教であつた。彼等の生れた時代が時代であつたゝめではあるが、それぱかりではあるまい。それがH本人の特質ではあるまいか。自然主義後の花袋藤村だつてその主唱するところに徹し得なかつた。

「坪內博士には叛逆性がなかつた。叛逆性のない所に眞の藝術はない」などゝ、勿體振つて說く者があるが、時世に對する反逆とは如何なる意味であらうか。博士は、舊文學に反抗して「小說神髓」を草した。當代の演劇に反抗して、文藝協會の演劇事業に努力されたではないか。「叛逆」とは、さういふ單純な藝術方面の意味ではなく、時代の道德宗教、或は政治問題社會問題などに關して云ふので、坪內博士はそこに何等の反逆精神を持つてゐなかつたと、非難者は云ふのであらうか。しかし、さういふ意味の反逆精神を發揮した文學者は明治時代にあつたであらうか。明治以前にあつたであらうか。鷗外漱石紅葉露伴に無かつた如く、西鶴にも芭蕉にも近松にも無かつたのである。彼等元祿時代の三傑も、德川封建政治に從順に服從し、壓制の下に何の疑ひも抱かず、ニーチエの所謂奴隸道德に安んじ、家畜の群の一員たるに甘んじてゐたのではないか。文學に反逆性の乏しいのは、古來のH本文學の特色なのである。坪內博士にのみケチをつけるのは當を得ないのだ。

さうは云ふものゝ、私も日本文學の諸先輩が、自己の生存に對して、晏如として悟道の域に達したらしいのを不思議に思つてゐる。本當にさうであつたのかと疑はれないこともない。みんなが「則天去私」なのだが、これを、晩年のトルストイの苦悶、イブセンの凄慘たる孤獨感、チエホフの氷の如き心境に比べると如何に相違してゐたことか。

○

「坪内選集」のうち、最も内容が豐富で、讀んで啓發されるものは、演劇に關する記錄、評論、感想である。批判そのものが必ずしも事物の心核に觸れてゐるとは云へないにしても、研究徑路は用意周到である。歌舞伎に關する文獻としては最も重きを置くべきだと思はれる。私は先生の創作戯曲よりもむしろそれ等の評論を、興味をもつて讀み、知識をも得たのであつたが、讀後の感じを云ふと、先生の豫期に反したであらうが、歌舞伎について、一層つよく嫌惡を覺ゆるやうになつたのである。

先生は、英國の沙翁研究者の評論を讀むにつれ、その論法を日本の作品に活用すべく思ひ着かれ、近松の「油地獄」「天の網島」などの性格評を試みられた。これは日本では空前

の戯曲批評方法で、模倣者も可成りあつたやうである。面白い方法ではあるが、はじめから作家と作品とを完全無缺のものとし、作中の人生の諸相人物の行動言語を絶對的に眞實であると認定した上でなければ、この批評方法は採り得られないのである。日本では、近松物以外には適用し得られまい。

全體近松の世話物でも除いたら、日本の演劇は、歌舞伎芝居でも人形芝居でも、よくもかう荒唐無稽の物ばかり揃つてゐたものだと、呆れ返らざるを得ないのだが、新時代の美學では、この現象をどう理窟付けて鑑賞すべきであらうか。

先生は、古くは近松より、近くは古河にいたる、あらゆる傳奇的史劇を、「夢幻劇」と名づけられた。背理矛盾の光景の續出、時の一致をも筋の一致をも顧みざること、夢の如くであるが、「最初の幕、すなはち『一の日』の現象が、まづ豫め觀者をして異常の別天地を覺悟せしむ。それ唯覺悟して場に臨む。故に其甚しき荒唐無稽も、また其甚しき支離滅裂も、大いに背感を呼ぶに及ばず、否、其甚しき妄誕誇張を、看る者醜しとなさざるのみか、興闌なる刹那に至れば、そゞろに同感して喜び悲しむ」と云つてゐられるが、これはダウデンの「沙翁論」のうちの「テンペスト」の批評から暗示を得て立論されたのに違ひない。「一たび序幕の不自然を容るゝ時は理脈おのづから其處に成りて、看る者不自然を感ず

ることなからん」とダウデンは批判してゐたのである。成程、一種の夢幻劇であつた「テンペストー」は、ダウデンの評語の如くに鑑賞されさうであるが、淨瑠璃劇歌舞伎劇の多くは殘忍醜惡卑俗を極めてゐて、「理脈おのづから其處に成る」とは云へないと私は思つてゐる。「歌舞伎の追憶」は、選集中の厖巻とも云ふべく、先生が幼少の頃から長年月に亙つて歌舞伎に親まれた徑路を、記實と批判をかねた筆で、愛着の情緒をも含ませて叙述されたもので、甚だ面白いのであるが、これを讀みながら、私は、歌舞伎といふ種類の演劇は惡藝術の標本であることをまざ〳〵ハッキリと感じた。殘酷、卑猥、怪奇、無智の限りを盡した次第、ことに、嘉永安政以後、維新前後の舞臺にそれが甚だしくなつた所以が、「追憶」の結論として、先生得意の箇條書きにして擧げられてゐる。

墮落藝術の跋扈した根本原因を、歴史家の立場から判斷すると、それは無論、徳川の厖制政治に由るので、徳川幕府の施政策は、武士階級以下には、殆んど何等の政治的權利をも社會的自由をも與へなかつた。男性の主煩惱（ルーリングパッション）ともいふべき功名心の如きも、其壯烈な、やゝ不穩な傾向のものとなると、町人や百姓には禁ぜられてゐた。平和な企業に由る功名心の作用さへも、少しく大規模に計畫せられようとすると、忽ち禁壓され、或は嚴罰された。家庭に於ける驕奢豪遊さへも、やゝ目覺しく世上の耳目を聳動することゝなると、禁

制の厄を受けた」と、先生も斷定してゐられる。それで、「維新前二百數十年間に於て、都會民衆が自由に行動し得た境域はと云ふと、現實界としては、例の肉の樂園としての吉原や島原や新町等、夢幻界としては、空想の樂園たる歌舞伎劇場、此二別天地の外はなかつた」

この空想の樂園で、日常充たされざる慾望を恣まゝに發揮して鬱り憤を發散させたのだが、その空想の樂園たる夢幻劇なるものが、ダウデンの說いた種類のものではなく、亂暴狼藉、醉ひどれの花見客の亂痴氣騷ぎの現出であつた。しかも同一樣の荒唐無稽な趣向や脚色が、芝居に於ても稗史草双紙に於ても、無慮數十年に亙つて繰り返され、蒸し返され燒き直され、屋上に又屋を架した有樣であつた。空想にしても、斬新な、もつと藝術的な空想を發揮して、陋劣な民衆の趣味を指導するやうな一人の天才も戲曲界に現はれなかつたのだ。南北でも、默阿彌でも、皆時代に阿諛して惡趣味をます〳〵煽り立てた低調な作者であつた。維新後の國十郎の活歷趣味、依田學海、福地櫻痴の理窟つぽい脚本も、それが藝術を缺き無味乾燥であつたにしても、數百年來の溝泥演劇から脫出せんとする努力として哂ふ譯に行かないのだ。傳統を尊重するのはいゝ。しかし、溝泥のやうな傳統に未練を殘してゐては、新藝術創出の邪魔になるばかりである。

坪內先生は、默阿彌を研究批判し、學海、櫻痴などの作品を批判し、それ等の缺點に鑑

みて、新代にふさはしい戯曲を創出せんとされた。「桐一葉」「牧の方」「孤城落月」「名殘の星月夜」などの史劇を主たるものとし、さま〴〵な舞踊劇をも發表された。先生の史劇の幾つかは、私は熱讀してゐるのみならず、實演をも觀てゐるが、それ等は決して新時代の史劇ではないのである。歌舞伎に關する修養のあまりに深かつたのが、甚だしく累をなしたと云つていゝ。過渡期の産物であつて、それだからこそ、舊派の既成俳優によつて上演し得られたのだ。森鷗外は、演劇の實際方面については知識乏しく、戯曲家としての天分も曠かではなく、傑れた作品を殘してはゐないが、根本的の新しさは、彼の少數の作品に微見されてゐる。明治大正の戯曲史に、鷗外の餘技的戯曲だけの新しさを持つたものも他にないのである。

○

日露開戰當時東京座で、仁左衛門や芝翫（今の歌右衛門）によつて初めて演ぜられた「桐一葉」は、私などは甚だ興味深く觀たが、同じ「桐一葉」の時を隔てゝ演ぜられるのを、再び三たび觀ると、次第に興味が薄らぐのを如何ともし難かつた。「名殘の星月夜」にして

も、「役の行者」ですらも、そこに現はされてゐる意味ありげな人生味が、私の心にはぴつたり來ないのである。沙翁の大作「ハムレット」の苦悶でさへ、私は自分の心持とは懸け離れた窒々しいものに思へるくらゐだから仕方がないが、文藝の鑑賞も人さまぐ〳〵で、傑れた作品についても緣なき衆生は多いのだ。源實朝や、役の行者とその門弟については、且元や牧の方を取扱ふ時とは異り作者は心血を濺ぎ、むしろ汲理想態度を棄てゝ、主觀を發揮されたのであるが、しかるに關はらず、表現が直截を缺き粉飾化されてゐるのを、私は感じる。形の整つたお芝居といつた感じがした。こゝまでも歌舞伎の怨靈が附纏つて累をなしてゐるのではないだらうか。先生自身の好みによつて耽讀された沙翁が累をなしてゐるのではないだらうか。あれほど深く研究されたイブセンやショウも、先生の頭腦に頑張つてゐた「歌舞伎」と「沙翁」とを追出す力を有たなかつた。大藝術家でも、その作風は若い時分に出來上るもので、中年以後の大飛躍は容易になし得られないのであらう。

「桐一葉」の出版された時、先生の論敵であつた高山樗牛は大體に於て讃美の辭を呈した。「新曲浦島」の出た時、ニーチエ主義唱道者登張竹風氏が私に向つて、「浦島は名文だねえ。疵瑕を見つけようとしても、一つも見つからぬ。しかしハウプトマンの沈鐘では、主人公の幻に妻君が浮ぶのに、浦島では、歳を取つた親の幻影を見るのだ。坪内さんはやは

り道學先生なんだね」と云つて、その點を飽足らないやうに云つてゐた。東洋と西洋と思想を異にする所以で、一を是とし他を非とする譯に行かないだらうが、道學臭はむしろ「役の行者」なんかに感ぜられるのではあるまいか。

「新曲浦島」を讀んだ次手に、鷗外の「玉篋兩浦島」を久振りに讀んで見た。明治三十六年一月市村座で伊井蓉峰一座が演じたのを私も觀てゐるが、舞臺から受けた感銘は甚だ淺かつた。よくこんな六ケしい物が商業劇場に上演されたものだ。「浦島」を題材として戲曲が、逍遙鷗外兩先生により、殆んど同じ頃に製作されたのは興味あることで、今二つを比較して見ると、着眼の相違作風の相違が歷然としてゐるので面白い。一つは新樂劇の見本として發表された作者の主張のある作品であり、一つは、伊井蓉峰負であつた三木竹二氏に賴まれて匆々に執筆されたに過ぎなかつたであらうと、私には推察される。しかし、後者は、上演して效果ある者ではなく、書齋で靜かに味はふべきものであり、前者は劇場に於て觀、且つ聽くべきものである。

「新曲浦島」では、青年が空想に捉はれて厭世に陷り、父母の戒めに背き蓬萊に遊んで、歡樂に耽つてゐたが、月日を經るうちに「身を知る雨の故山邊、頻りに戀し近親人」と、ホームシックを起し、歸鄕して父母を誘つて來ようと決した。そして歸鄕すると、夢から

醒めたやうに、「我れ或時は影を追ひ、又或時は形のみ、老いぼれにけり片輪車の、足弱車時勢にも七代おくれし痴愚の我れ」と、空想界に歳月を費せしことを悔い、しかし、「あら、頼もしの青年やな、蓬萊の相うつつ世に、見ん折も遠からじ、うれしさよ」と新代の青年に期待した。そして、「今こそ信れ現世を、忌まで蓬萊に渇仰るゝ。忌まで蓬萊に渇仰るゝ。私し心無き民ぞ、蓬萊移さん現世に。移さん蓬萊いつか此の世に」と曲は結ばれてゐる。作者は理想の實現を望み且つ信じてゐる。

「雨浦島」は、詞句は古典的であるが、作意は明晳である。浦島太郎は龍宮の乙姫に向ひ「このとし月の平和に倦み、今は事業のしたはしくなりぬるものか」と云つてゐる。「おことは自然、われは人、おことは物の、おのづから成るをよろこび、われはまた、ことさらに事を爲さんとすれば、ふたりの心は合ひがたし」と云つてゐる。故郷に歸つてから、子孫に會ひ、「おもふは先祖。行ふは子孫にこそあれ」と言ひ、また、「事業をかかき、わがするに、傳へ行ふことを得る、これも一つの不老不死」と云つてゐる。

二つの作品を通じて、作家の人生觀を窺ひ得られるのであるが、私は、明治の二巨匠の手輕な樂天主義に飽足りないのである。初世浦島は、末孫の浦島に、軍用金たる金銀を與へてその遠征を見送つて、何等の懐疑不安もない。「新曲浦島」では、厭世の雲晴れて、天

國がこの世に來ることを無造作に唄つてゐる。いろ〳〵な日本音樂を取入れてあるこの「樂劇」では、理想の實現とは、和洋音樂の折衷が完成して、理想的の新音樂が日本に現はれることをも意味してゐるらしく、浦島が「あら賴もしの青年よ」と唄ふところに、合の手として「半西洋式、半日本式の器樂、三絃と西洋樂器との連奏」が指定されてあり、結末、日出たく唄ひ收めるところにも、「西洋式の陽旋律に物して西洋樂器を三絃に合すること」が指定されてゐる。文章についての先生の所說「和漢洋打つて一丸となす」と同樣であつて、さういふところからやすやすと新音樂が生れ出ようとは、私には容易に信ぜられない。

○

私も無遠慮に筆を運んで來た。

先生の歿せられた直後に、追憶談がいろ〳〵な人によつて發表されたが、そのうち、私が心を動かされたのは、雜誌「セルバン」に出てゐた廣津和郎氏のそれであつた。廣津氏在學の時分、先生は課外講義として、ショウ（？）の戲曲を講じてゐられたが、聽講者は

數名であつて、それも次第に減少してつひに廣津氏一人となつた。氏も先生が氣の毒だから出席したのだと云つてゐる。當時の學生の好學心の乏しかつたのに私は呆れるのだが、當時は自然主義全盛期であつたから、坪内逍遙といふ大なる名前も青年學生の目には光が薄らいでゐたのであらう。ところが先生は、廣津氏に說いて幾人かの學生を勸誘させ、彼等を自宅に招いて、機嫌を取り〳〵ショウの講義を續けるやうにされた。「聽きたくなければ聽くな」と抛り出さないで、怠け者でも引摺つて教へ導かなければ氣がすまないところに、教育家たる先生の面目が見られるのである。英才を教育することは、先生に取つては何よりもの樂しみであつたらしい。默々として自己の趣味に耽り自己の研究に沒頭するだけでは物足りなかつたのである。

私は、師弟關係から云ふと、島村抱月先生の最初の門弟と云ふべく、坪内先生に對しては孫弟子と云つてもいゝので、思想上文學上、先生から受けた感化はむしろ稀薄であると思つてゐるが、在學中私が最も心を惹かれてゐたのは、先生の沙翁の講義であつた。それで、私は自分の學課となつてゐる講義を聽くだけでは滿足しないで、上級の教室へも侵入して聽ける限り沙翁講義を聽いた。

學校内では坪内逍遙先生のシェークスピア。學校外では、内村鑑三先生の西洋文學講

演。私が學生時代に最も熱心に、全心を注いで聽惚れたものは、以上の二つであつた。そして沒理想で茫漠たる沙翁の面白さに陶醉しながらも、カーライル、ダンテ、ホイットマンなどの直截なる主觀的表現が一層強く若き心に印銘されたことを、今も私は追想するのである。

「藝術殿」追悼號のなかに、多年先生に親炙してゐた山田清作氏は、先生が病床で氏に洩らされた沈痛な一句として、「人は私を幸福な人間だと云ふが、私は三十歳から苦しんで來た。人のやうに口へ出しては言はぬだけだ」といふ言葉を特に記錄し、「この時ばかりは、先生の双眼から熱い涙が湧きました」と書添へてある。その默々たる人生苦は何であるか、私にはよく分らない。（昭和十年七月　中央公論）

文章論

時に感じては花にも涙を濺ぐのを常例とした支那の大詩人杜甫は、「蜀相」すなはち諸葛孔明の祠堂に詣でて、「丞相の祠堂何れの處にか尋ねん。錦官城外柏森森。……帥を出して未だ捷たず身先づ死す。長く英雄をして涙襟に滿たしむ」云々と詠じ、漢詩特有の對句、「階に映する碧草」「葉を隔つる黃鸝」などを、眞中に挿入して、格調を整へ、過去の英雄を追懐して涙を流した。有名な七言律詩である。

「權助が主人の使に行き一兩の金を落して途方に暮れ、旦那へ申譯なしとて思案を定め、並木の枝にふんどしを掛けて首を縊るの例は、世に珍らしからず、今この義僕が自から死を決する時の心を酌んで、其情實を察すれば亦憐むべきに非ずや。使に出でゝ未だ返らず、長く英雄をして涙を襟に滿たしむべし。主人の委託を受けて自ら任じたる一兩の金を

失ひ、君臣の分を盡すに一死を以てするは、古今の忠臣義士に對して毫も恥づることなし。其誠忠は月日と共に耀き、其功名は天地と共に永かるべき筈なるに、世人皆薄情にして、この權助を輕蔑し、碑の銘を作つて其功業を稱する者もなく、宮殿を建てゝ祭る者もなきは何ぞや」云々は、福澤諭吉が明治の初年に出版した「學問のすゝめ」のうちの一節である。「權助首縊り說」として當時世を騷がせたものであるさうだが、杜甫の名詩の詞句がここに活用されたところに、ユーモアがあり、皮肉があり、諷刺があるのではないか。支那思想支那趣味を極度に排斥してゐた當時の福澤の面目がかういふ隱約の間にも却つてよく察せられるのである。「人皆云はん、權助の死は僅かに一兩のためにして其事の次第甚だ些細なりと。然りと雖ども事の輕重は金高の大小人數の多少を以て論ず可らず。世の文明に益あると否とに由つて其輕重を定む可きものなり」と、云つてゐるが、明治の初年に、「文明」といふ文字の有つてゐた魅力は、我々の想像し得られないほどに強かつたらしく、すべてを「文明主義」から割出して說を述べた福澤の著書が、非常の勢ひで世に迎へられたのであつたが、私は今日はじめてそれ等の書物を讀んで、さして陳腐鈍昧幼稚淺薄の感じのしないのを、案外に思つてゐる。明治初期に實世間に活動した人、識者と呼ばれた人々の言行錄、感想錄などを讀むと、大抵はどれにも時代相應の古さを覺えるのを例と

してゐるが、福澤翁の行動言説感想には、阿呆らしく思はれるところが割合に尠い。舊習を脫却して直ちに事物の眞相を見てゐる點では、世にも稀れなる人であつたと、私は今になつて感じてゐる。

英雄豪傑群出して維新の大業が成就され、日本は新興國として華やかに世界の舞臺に乘出したのだが、福澤諭吉ほど、新時代の歡喜を感得した者はなかつた、と云へないことはない。「西洋事情」をはじめ、次から次へと出した書物が、悉く世人に愛讀されたばかりでなく、書中に取入れた新知識は、直ちに實際に行はれたので、彼は、新時代現出の最高指導者たる地位に自から置かれたわけだ。賢明なる彼は、あの時代の日本人でありながら、福地のやうに官界の誘惑に乘らず、從つて長官の前に身を屈することなく、自由の境地に在つて、政府をも民衆をも一管の筆で動かしてゐた。强權者が他を鞭つて何事かの行動を强ひるのとは異り、福澤の新書出づる毎に、みんなが面白がつてそれを受入れて、天來の福音に接したやうに喜び、その所說にして實行し得られる者は實行せんとした。しかも著者はさして骨の折れる仕事をしたのではなかつた。「改曆辨」の如く、「少々風邪に犯され床の上にて筆を執り、朝より午後に至るまで、凡そ六時間にて脫稿した」何の苦勞もなく出來上つたその小冊子も、際限なき賣れ方にて、高の知れたる定價なれども、塵積つて山

となり、二三ヶ月後には利益の全額千圓も千五百圓にも達したさうである。「學者の身にかかる利益を收領しても宜しかるべきやと、恰も半信半疑に自から感じたるは、舊藩士族根性の然らしむる所」だと、著者自身で云つてゐる。今と異り廣告をしないでそんなに賣れたのだ。この點から云つても、彼は、日本の著作業者、文章家のうち空前絶後と云つてもいゝほどの幸福人であつた。福澤如何に智惠者であつても、當時の日本人が新を好む素質を持つてゐなかつたらどうしやうもなかつたのだが、笛吹けばみんなが踊つたのである。古來、日本人は舊を棄て新に移るに敏捷な國民なのだ。

○

福澤は實學主義で、文學藝術には心を多く用ひなかつたやうであるが、最初から飜譯や著作をもつて身を立て、一生を通じて重要な事業として筆を採つてゐたのだから、文章についてはつねに思ひを致してゐたに違ひない。新時代向きの譯書や言論が頻繁に出版されてゐた維新直後に、福澤のものが際立つて世に流布して評判の高かつたのは、その文章の力にも依るのではなからうか。谷崎氏の「文章讀本」が注意を惹き、それが緣となつて、

この頃の文壇で文章論が時々現はれてゐるにつき、私は、明治以來の有名な「操觚者」の文章をあれこれと讀んで、人さま〴〵な文章について考へ、時世の變遷につれての文章の推移についても考へた。福澤翁についても、まづ文章家として彼に心を注いだ。文章研究に當つても、先づ思ひ浮ぶのは、西洋の文章のよく理解されないことである。日本の文章と西洋の文章のよく理解されないことである。日本の文章と西洋の文章との大體の相違は一目瞭然たるもので、飜譯文で讀んでも推察されるが、一人々々の操觚者の文章の微妙なる相違は、我々程度の外國語知識ではとても解りかねるのだ。一人々々文體が異り、文字の用法が異り、筆癖があり、さういふ所に文章の面白味があり、筆者の人となりも現はれてゐるのだが、それは、殆んど母國語同樣に外國語に熟通してゐる讀者でなければ味はひ得られないのである。外國の實學は文字の外面的解釋だけによつて學び得られても、文學藝術の鑑賞は容易でない譯で、聰明な頭腦を具へてゐた福澤にしても、當時の幼稚な語學力では、大意の解釋以上に、異國の文章を讀みこなし得なかつたに違ひない。

福澤の執筆の際の態度は、論語に謂ふ所の「辭達而已矣」であつたと思はれる。言語文章は自分の云ひたいことが他人に分ればそれで充分だと、孔夫子が道破されたので、支那でも日本でも、後世の文章家の多くが、作文の態度としてその格言を守つてゐるやうな顏

をしてゐた。徳富蘇峰氏の「蘇峰文選」の巻頭の題言にもこの言葉が用ひられてゐたと私は記憶してゐる。だが、辭達するのみで滿足してゐられないのは人間の常で、さま〴〵にお化粧をしたがるものだ。明治初年の洋學者の文章にもそれ相應のお化粧があつたが、福澤には殆んどお化粧慾が無かつた。爵位や勳章に興味がなかつたと同樣に、文章を飾らうとはしなかつた。自分でも「余が文筆概して平易にして讀み易きは、世間の評論既にこれを許し、筆者も亦自から信じて疑はざる所なり」と云ひ、その由來を述べてゐる。師緒方洪庵の放膽なる飜譯振りや、蓮如上人の御文章の感化を受けたことをも云つてゐる。「少年の時より漢文に慣れたる自分の習慣を改めて俗に從はんとするは、隨分骨の折れたることなり」と云つてゐる。大衆を念頭に置いて書かれたので、凡庸何の奇もなき書き振りであるが、「文明論之概略」「學問のすゝめ」「瘠我慢の說」などを讀むと、歷史の洞察、活人生の批判に天品のきらめきが見られ、平坦素朴な文字の間に飄逸な雅致が感ぜられるのは不思議である。卑近な文明の輸入といふ任務を當時の天職としてゐたため、どれも〳〵不完全であり間に合せ見たいであるが、專念に、歷史でも哲學でも研究してゐたなら、その方面で大をなしてゐた人であらうと察せられる。一面獨創力のなさゝうな、またその必要もなさゝうな、初期の彼の著書に、獨創の光を私は認める。「海舟座談」や「一年有半」の如

き、その話者筆者は脫俗飄逸で非凡の人物であつたのであらうが、それ等の著書に私は何等獨創の見解を認め得なかつた。

福澤の著書にしても、「福翁百話」のやうな晩年のものは、「福翁道話」とも云ふべく、文章こそ平淡にして、思ふところが心殘りなく述べてあるやうなものゝ、心の働きが鈍つて福翁式マンネリズムに墮した凡庸な修身話に過ぎない。獨創家も順境に浸つてゐると、次第にかういふ風に好々爺然となり切るものであらうか。平淡も枯淡も、心に張りを失つた作家のでは、もはや文章の妙味はないのである。

德富蘇峰氏は、「予には、福澤翁の文章よりも、福地君の文章が心を惹いた。これは何故であつたか知らぬが、半ばは予の所謂る文學趣味なるものが、福地君のそれと共鳴する所があつた爲めかも知れない」と云ひ、又「今日から見れば、福地君の文章は、福澤翁の敵ではない。餘事は勿論であるが、文章の一事に於ても、福澤の方が福地よりも、數等上であらうと思ふ。けれども、少年若くは青年の予には、何れかと云へば、福地君の文章が最も深く訴へた」（中央公論四月號所載）と云つてゐる。私などは、年少の頃は、時代が違つてゐたゝめ、福澤の者は手に觸れず、福地の幕府衰亡論など、それ等が民友社の出版であつたゝめ買つて讀んだが、そんなものよりも、德富氏の文章に一層私の心が惹かれた。深

く心に訴へた。これは、予の所謂る文學趣味なるものが、德富氏のそれと共鳴する所があつた爲めかも知れない。ところで、私は、今文學趣味について考へるに、福澤翁の初期の作品が、福地氏のよりも德富氏のよりも文學趣味に缺乏してゐたであらうか。少し大袈裟だが、ツルゲネーフの小說の方がドストエフスキーのよりも文學趣味に富んでゐると云はれないことは、露國文學の批評家の說によつても察せられる。スキフトの小說に花鳥風月の色彩りがなく、詠歎調も缺けてゐるために、文學趣味が缺乏してゐると斷定されさうでもない。

明治十年代から「國民之友」時代を經、高山樗牛時代に至るまでの文章家の文章には、外國の詩人、哲學者、政治家など、あらゆる種類の知名人の名を挿入することが流行してゐた。「ピット云はずや」「ミルトン曰く」「マコーレーの說に」とか、斷片的に何かの舶來の名言らしいものを引用することが盛んに行はれてゐて、我々少青年讀者は、筆者の博學に驚かされたのであつたが、それ等筆者は外國知名人の著書を熟讀玩味した上で論を立てたのではなかつたから、所論の視野が廣くもならず、深味を增す譯でもなかつた。維新前後に偶然手に入つた僅少の洋書によつて啓發され、獨自の見解を試みたところに福澤の天分が發揮されてゐて、說その物の不完全は別として、今讀んでもなほ、文章に多分の清

新味が感ぜられるのである。

○

小說が言文一致となり、新聞の論說をはじめ、各方面の論文家の文章も、その感化を受け、いつの間にか言文一致體を採るやうになつた。口語體では卑俗になるとか重味がないとか不平が云はれてゐるうちにつまりはその方が、書く方でも筆が自由になり、讀む方でも氣樂に讀めるので、現在の有樣に到着した。しかし、言文一致の企てられた以前、明治二十年以前には、新日本の國語文章をいかにせんかといふことが、識者或は無識者の間に問題になつてゐた。英語英文にしようかと眞面目に考へてゐたものゝあつたのは不思議の至りであるが、それは無反省な西洋崇拜の餘弊であるとばかりは云はれない。封建時代の惡臭から脫却せんとする強烈な慾望を突詰めると、そんな極端な氣持にもなるのであらう。新時代相應の思想や感情を現はすには、在來の言語文章では物足りないのである。

純粹の漢學者純粹の國學者は別として、筆者の思ひを充分に述べ、普通人によく理解される文章について思ひを致したのは、明治初年では、福澤と福地とであつた。「國民之友」に「今日の文章」と題して述べてゐた福地の文章觀は、私も朧げに記憶してゐるが、その

主旨は、俗に從つて平易に書いて品位を保つといふことであつた。福澤も同樣であつた。二人とも幾度か歐米に渡航した洋學者で、ともに文才もあり時世を觀る目も具はつてゐたが、福地の方は底が淺かつたやうである。

「西洋事情は恰も烏無き里の蝙蝠、無學社會の指南にして、……其新說の容易に實際に行はれて故障を見ざりしは、當局士人の漢學に入ること深からずして、一言これを評すれば其無學なりしが爲めなりと斷定せざるを得ず。緒方先生が日本國中の武家は大抵無學にして文字を知らずと云はれたるは、實際の事實にして、維新の有志輩が事を斷ずるに、大膽活潑なる其割合に字を知ることは甚だ深からず、假令或は之を知るも之を無頓着に附し去り、一片の武士道以て報國の大義を重んじ、苟も自國の利盛とあれば何事に寄らず之に從ふこと水の低きにつくが如く舊を棄るに吝ならず、新を入るゝに躊躇せず、變遷通達自由自在に運動するの風にして、淺薄なる西洋事情も一時に歡迎せられたる所以なり。卽ち日本士人の腦は白紙の如し。苟も國の利益と聞けば忽ち心の底に印して其斷行に躊躇せず。之を彼の支那朝鮮人等が儒教主義に養はれ、恰も自己大己惚の虛文を以て腦中縱橫に畫き散されたる者に比すれば同年の談に非ず。されば維新の當初我國の英斷は、當局士人の多數が漢文漢學を味ふこと深からざりしが故にして、奇語を用ふれば、日本の文明は士人無

學の賜なりと言ふも過言に非ざるべし」

維新當時の有力者の腦は白紙のやうであつたこと、日本の文明は士人無學の賜であつたことなど、意味深長なる時代批評で、諸藩の私塾などで漢詩漢文を學修してゐたらしい當年の志士達も、造詣淺く支那學の堂奥に達してゐなかつたため、容易にそれを振拂つて、新知識に心を捉へられたのかも知れないが、その理論を推すと、洋學の精神にも徹しないから、日本文化が植民地の文化見たやうになつたと云はれないこともない。福澤自身も俗衆に迎へられたため、そして新社會に手輕く間に合ひ役に立つ人物養成に興味を感じてゐたため、ジャーナリストらしい成功に甘んじ、豐かな天分を學問の追究に濺ぎ得なかつた。「文明論之概略」の如きは、啓蒙的の「文明開化論」たるに留らず、國家社會その他いろいろな思想について、もつと根本的の批判を含んでゐると思ふ。幕府の壓制に對する憤懣の思ひから類推して、西洋諸國對日本の將來を憂ひ、「今の外人の狡猾慓悍なるは公卿幕吏の比に非ず、萬々一にもこれが制御の下に居て束縛を蒙ることあらば、其殘刻の密なること恰も空氣の流通をも許さざるが如くして、我日本の人民はこれに窒塞するに至る可し。今より此有樣を想像すれば、渾身忽ち悚然として毛髮の聳つを覺ゆるに非ずや」と云ひ、「東西懸隔殊域の外國人に對して其交際に天地の公道を賴みにするとは、果して何の心

ぞや、迂濶も亦甚し。俗に所謂結構人の議論と云ふべきのみ」と云ひ、強固なる「自國獨立」の必要を結論の要點としてゐるので、明治初年の時世に照らして見ると、適切な啓蒙的訓戒であつたのだが、私などには、結論よりも途中の感想が面白かつた。大して外國の名著を參照したのでもなく、有り觸れた世間の材料を用ひて一見通俗向きのやうでありながら、我等が自由に忖度すると、深遠なる批判の影がほのめいてゐるやうに思はれる。だが、啓蒙事業に沒頭した彼は、自己の人生批判を深く進めようとはしなかつた。

この「文明論の概略」や、「學問のすゝめ」など、深遠なる內容を有ちながら、平易に分り易く自由に書き流されてゐるので、口語體と何の變りはないのだ。福地の文章だつて言文一致にする必要のないほどに筆が自由であり讀み易くもある。これ等二先生に比すると、他の政論家の文章は、內容が新型か舊型かのどちらにせよ、型に嵌つてゐるばかりでなく、文章そのものに生氣がない。古くさい。小說の方では、二葉亭以前のものは、すべて文章も內容も陳腐で、その文學價値から云つても、福地福澤の雜文に及ばない。長年月の漢文學の弊が積つて、死語の排列を喜ぶやうになつたのがいけなかつたのだ。「漢文社會の靈場を犯して其文法を紊亂し、唯早分りに分り易き文章を利用して」と、福澤の云つてゐるのは、文章革新の第一步なのだが、舊を破壞したゞけでは取りつく島がないので、大

抵の者がその方向に迷ふのである。駕籠を棄てゝ人力車を用ひ、人力車を止めて自動車を用ふるといふのなら、方針が極つてゐるが、舊を廢し新につくと云つても、文學藝術ではその新が分らないのだ。英語英文を使用せんと考へたのも、舊套打破の思ひ着きの一つであつたので、今日そんな馬鹿なことを考へる者はあるまいが、しかし歐洲の文章の妙所を取入れて新日本に適した新文章を造上げるのが、最も賢明なる方法のやうに云ふのも空言のやうに思はれる。「和漢洋を打つて一丸となす」と云ふと、如何にも尤もらしく聞えるが、文章の範圍で「洋」を理解するのは、さう手輕く出來ることではない。「元來文字は觀念の符號に過ぎざれば、觀念の形なき所に影の文字を求むるは、恰も雪を知らざる印度人に雪の詩を作らしむるが如く、到底無用の沙汰なれば、遂に自から古(いにしへ)を爲し、新日本の新文字を製造したる其數亦尠からず」と、福澤は自分の飜譯態度について云つてゐるが、物理とか經濟とか地理とかからの飜譯なら、困難の度も少く、譯語によつて原物を理解することも出來るのだが、文學的文章となるとさう手易くは行かない。粗末な飜譯書で讀み、或は原文を自分の頭で飜譯化しながら讀んでも、日本の新文章の榮養素とすることは甚だ六ヶしいのである。聖書の飜譯をはじめ、明治以來、西洋の文章の調子は盛んに取入れられてゐるが、それは、多くの日本人の語る英語のやうなもので、西洋の文章の美所を取入れて

日本文字に融和してゐるのではない。「打つて一丸」とされてゐるのではなくて、木に竹を接いだやうなものなのだ。鍍金してゐるやうなものなのだ。日本の新文明は士人無學の賜物であると福澤は云つてゐるが、西洋の文章らしい表現を無造作に用ひて新しいつもりでゐたのも、文人無學の賜物であつたのだ。民友社の文章はバタ臭いと非難されてゐたが、新時代人に取つては、そのバタ臭いところに魅力が感ぜられたのであつた。味噌臭いよりもバタ臭い方が好ましかつたのだが、鑑賞力が成長すると、そのバタの純良でないのに氣がつくやうになるのである。明治初年の西洋文明讃美者の言論が、福澤福地などは別として、他の多くは、バタ臭くつて、いつの間にか廢れて行つたやうなものだ。

木に竹を接いだやうなもの、鍍金してゐるやうなもの、バタ臭いもの。思想界の言論同様に、文章もさういふ不純無雜な新様な文體が嫌忌され、傳統的文章に愛着を覺える聲の聞えるのが、をり〳〵の例となつてゐた。自然主義時代の無技巧文章の後で、荷風潤一郎などの文章が好まれたやうに、プロレタリア文學の不純無雜な文章で荒されたあとで、洗煉された文章美が考慮されるやうになつたのも、明治以來繰返されてゐる自然の趨勢なのである。それで、今日の文壇では、他の思想問題と同様、文章の國粹性が尊重されかけてゐるやうである。日本在來の文章美を丹念に檢討して宣傳してゐる谷崎氏の「文章讀本」

が、非常の責行を示してゐること、漢學の註釋書や新研究者が續出してゐること、中學校や女學校で英語を廢止せんとする傾向のあることなど、蕪雜な外來のものを排斥して、國語文章の純粹性を保たんとする時代精神の現はれである。しかし、それが果して效果を奏するであらうか。

○

何處の國でも自國の言語は尊重する。國語と國家とは密接なる關係を保つてゐるので、世界の國々が自國の言語を廢止して、共通の言語を使用したら、相互の爲め便利なやうであるが、それは空想に留まり、小さな國でも、屬國でも、國のあらん限りは自國の言語は持續けてゐる。過去數千年の間、時代々々の文學を殘して來た大日本たるもの、他國の言語文章を有難がるのは腑甲斐ない次第で、過去の自國の文學文章は、新たに檢討して、隱れたる美を發揮させるばかりでなく、新時代の文章もそこから發足すべしと云ふのは、至當の理窟である。しかし、舊文學を二たび三たび檢討して、そこから新しい文章の種子を發見し得られるであらうか。

先日、能樂に趣味を有つてゐる某氏と話してゐた時に、氏は「能も二三年續けて見てゐると、型が極つてゐるので、飽いて來る。將來の者を豫想させない過去の藝術は物足りな

い」と云つてゐたが、將來そこから發展される要素を含んでゐない舊藝術を、あまりに有難がつてゐては、精神の萎縮を來すのである。

「自から古(いにしへ)をなす」と云つても、無から有を生ずる譯には行かないので、何處からか學んで來なければならぬ。和歌なら萬葉、俳句なら芭蕉、小說なら源氏物語、西鶴。日本の傳統文學の寶玉として尊重さるべきものであるが、將來の文學の源泉をさういふものに求めていゝのであらうか。明治時代には源氏、西鶴、或は德川時代の戲作物を學んでゐた作家が多く、言文一致體の創立者二葉亭にしても、三馬などを摸したと云つてゐるが、今日の若き作家には、日本の前時代の文學を讀んでお手本にする者は少いらしく、直接原書によつて歐洲の文學を熟讀して新文體を會得する者も少いらしく、今日の月刊雜誌と、粗末な飜譯物とくらゐによつて、作文術を學んでゐるのである。明治以前の文章家は、唐宋の八大家の作風を學ぶとか、遠く遡つて、秦漢の大家或は孔子や莊子の風格を學ぶとか、それ〴〵にお手本を持つのを例としてゐたが、現代ではさういふ態度はすたれて來た。「馬を水際まで引張つて行つても、水を飮ますことは出來ない」といふ諺の如く、古典的思想、古典的文章を奬勵するものがあつても、現代人をして衷心からそれを讃美させそれを模範とさせることは不可能であるらしい。古典尊重の理窟は立つてもそれに盲從することは出來な

くなつてゐる。他の方面はどうだか知らないが、文章の方面では、古典によつての統制は不可能である。現代以後の若き好學者が、古典文書を研究すると、德川時代の學者や或は今日の先輩の學者の見方におとなしく服從するとは限らない。まるで見解を異にするやうになるかも知れない。私などは生れた時代がまだ早かつたゝめ、「杜甫の「錦官城外柏森森」などを昔ながらに味はつて感激するのであるが、福澤翁がさういふ詞句についても舊を脫した鑑賞をした如く、將來の詩文鑑賞家はもつと異つた見解を有つやうになるであらう。明治以前の事相について傳統に捉はれない觀察をした福澤翁にしても、生れが舊い時代の人だから、自己の斬新な見解を徹底し得なかつたが、全然舊に捉はれない俊才が、今後は次第に現はれるであらうし、古典文學の檢討と云つても、新しい目で檢討したゝめに有難がらなくなるかも知れない。その陳腐に面を背けるかも知れない。

言文一致體になつたとゝもに、文章が無雜となり混亂し、一人々々勝手な文字を使役し、自儘な文體を作り出して、秩序紊亂の有樣と相成つたのだが、これも考へやうによつては甚だ面白いのである。文章國に強權者が存在してゐたなら、文章道の秩序紊亂を憤慨して、舊幕時代から傳來の壓制法を實行し、國定辭書に定められたる文字以外を用ひたる者は嚴罰に處すとか、特に許可したる以外の外國語を用ひたる者も刑に處すとか、長上には

敬語を用ゆべしとか、三十一文字、十七文字の規定に外れた詩は作るべからずとか、法令を下したいかも知れないが、これは實行不可能であるらしい。それで、文章の領域では、人間の頭の働きの混亂さが如實に出てゐるのが面白い。新しい文明を說き人間の自由を說いた福澤以來、開放された日本の世相の動き心理の動きがそれに見られるのである。蕪雜でも混亂してゐても、動いてゐるのはまだいゝので、將來の大成が（それは空想に過ぎないかも知れないが）期待される譯だが、小さく固まつては望みはない。大した頭腦を有つてゐない者どもが、かくあるべしと理窟を並べたつて仕方がないので、大詩人大文章家が出現でもしたら、それによつて、日本の言語文章も新たにさんらんたる光を放つことになるかも知れない。（これも、はかなき空想であらうが）（昭和十年六月　中央公論）

思想・無思想

私は近年、春と秋に故郷へ歸るのを例としてゐるが、往復の途中、大抵は京阪地方に一二泊することになつてゐる。それで、近年は連續して關西の春と秋とに親んでゐる譯である。

今年は、常例の春の歸省以來半年あまり、東京以外へは一歩も蹈出さず、それも、自宅に蟄居してゐるか、自宅の近所を漫歩するかしてゐただけで、朗かな自然にも勢ひのいい人事にも殆んど接觸することがなかつたので、秋の歸省は久振りの旅行として氣持がよかつた。汽車の窓から東海道の秋景色を見てゐるのも、いくらか物珍らしい感じがした。霖雨の霽れたばかりの清新な青空の下に、鮮明に型の如き姿を現はしてゐる富士山は、古來の詩や歌や繪で讃美されてゐるのに相應はしいほどに美しく私の目にも映つた。駿河灣は碧い波の美しさを湛へてゐた。熟した稻は黃いろく平野を色彩り、ところ〴〵の樹木は紅

に染まりかけてゐた。「日本の秋はいゝ。春よりも秋がいゝ」「私などが秋を氣持よく感じるのを空氣の溫度や濕度や、自然の色彩などで說明し得られる筈はなく、祖先以來おのづからつくられた日本流の鑑賞癖に依るとし、口でも筆でも言ひ現はされない日本趣味に基づくとする外はないのである」と、ふと、日本趣味を禮讚し、四季の風致を惠まれたことを感謝する氣になつたやうであつた。

有島武郎は、情死の覺悟をしてからも「も一度秋を見たい」と云つたさうである。私は武郎氏には、二三度會つただけであるが、一度「世界のうちで、景色のいゝ所はどこでせう」と私の方から訊ねると、氏は直ちに、ノルウエーの海岸と、瀨戶內海と、もう一つ何處かの海とを擧げた。日本の三景のやうに、世界の三景も海ばかりかと、その時の私は變に思つた。また或時、氏は「此間京都へ行きました。京都の秋は大變よう御座んしたよ」と云つた。

さういふ京都の秋景色にも接し、世界三景の一つである瀨戶內海沿岸にも滯在してゐられるのだから、甚だ幸福である譯である。私の故郷は、內海のうちでも、深く入込んだ海際の狹い漁村で、鐵道線路からも離れてゐて、山海村落の風致が私の少年時代に比べて左程異つてゐなかつたのであつたが、この頃になつて急速に變化した。殊に今度歸つて見て、

世の中の事は分らないものだと意外に感じたのだが、郷里はすつかり工場地になりかゝつてゐる上に、汽車の線路で横斷されることに決定されてゐるさうだ。靜寂な農村漁村が工業地帶となる近代文明の實現の小さな雛形をこゝに見てゐるやうである。猫額大の土地に幾つかの工場が建つて黑烟を噴出し、東京下關間の主要な鐵道が敷設されて、晝夜囂々と暴音を響かせるやうになると、そこは、私には懷かしい故郷ではなくなるので、先祖とゝもに安心して眠れなくなりさうである。鐵道敷地用として買收される幾十軒の住宅は、何處へ新しい宅地を求めて移轉するであらうかと、私は現在の狹隘な村落を見てひそかに氣遣つた。しかし、工場なんかゞ出來て土地が繁盛するのは、村民に取つて結構なことには違ひないので、この頃この土地には、失業者は全く無くなつてゐるさうだ。若い者は工場稼ぎで、日々二圓三圓の收入に有りつくのは難くはないので、漁農の仕事の多くは、老人によつて營まれてゐるらしい。

それで、煩瑣な社會問題の材料は幾つも存在してゐるやうだが、さういふ事を考へるのは、私には適任ではないので、誰かゝらそれについて聞かされても、たゞ聞き流すだけで仰々しく自說を述べたりなんかしなかつた。

今年は十月の下旬に歸鄉したのだが、まだ蚊が生殘つてゐて、晩餐の時には煩いくらゐ

手首や頸元へやつて來た。世界三景の一つたる内海の一端に位してゐる土地でも、秋の最中に蚊がゐるやうでは名勝地としての價値は餘程下落する譯である。それでも、昔に比べると、蚊も蠅も著しく減つてゐるので、私の幼少の頃には、蚊いぶしの濛々たる烟の中で辛うじて晩餐を採り、飯も黒くなるほどに蠅がたかつてゐた。今は、石鹸を使ふやうになつたので、自然にドブが消毒されて、蚊の發生の分量が少くなるし蠅の方は蠅取紙が使はれるために餘程減つたのである。

「昔の人は蠅なんか氣にせなんだ。この家は、昔は北の方はぴつたり壁で塞いで居つたから、夏のうちは家の中が蒸れるやうであつたが、それでも暑さをさう氣にせなんだ」と老母は云つてゐた。して見ると、文化的生活に馴れるのもよし悪しだ。

私の幼少の頃には、眞夏には、多くの漁夫はふんどし一つの丸裸で、あるひはそれなしに道を歩いてゐる者が多かつたし、女でも腰巻だけで日を暮してゐる者が多かつたが、巡査の駐在所が出來てから、巡査に見つかつたら、兩肌ぬぎは幾ら片肌ぬぎは幾ら、罰金を取られると脅かされて、私などは先づ裸體と罰金のことから巡査の恐ろしさを幼な心に刻まれた。これも明治政府の文化政策の一端であつたが、私もさういふ文化のすべてを至上のものとして柔順に受入れながら育つた。その時々の文化の流れに身を浮べて成長した。

激流に逆らつたこともなかつた。怒濤と闘つたこともなかつた。

（如何なる世にも如何なる土地にも、住み馴れゝば住めるのであらうが、明治以來の新日本に生きてゐたことは、いゝ時代に、いゝ國に生きてゐたと云はなければなるまい。）

嬰兒の時から、幼年期少年期を經過する間に、周圍から受ける感化は最も強く、一生拔け難いものであり、人間の精神的基礎工事はその間に出來上つてしまふものらしい。それで、私は明治十年代二十年代の文明開化の空氣を日本の場末でたつぷり吸收したことになるのだが、文化の吸收は、一つ〳〵がハツキリ目に見える譯でないから、何を吸收したのか、今回顧してもたゞ朦朧としてゐる。でも、讀んだ書物なら、幼少の頃のでもよく覺えてゐる。私が最初に——八九歳の歳の頃に——自分一箇の讀書力でどうにか讀通した小說は「岡山紀聞筆の命毛」と題された草双紙であつた。この世に生れてはじめて、文化の重〻雲な現はれである文學書に接したのだから、私の頭腦に與へられた感銘は淺少でなかつたに違ひない。この小說の著者は誰であつたか、幼い讀者として、はじめから心に留めなかつたので、後日專に觸れて思ひ出すたびに、多分岡山か或は大阪あたりのあまり有名でない戲作者の筆に成つたのであらうと獨り極めにしてゐた。ところが先頃本間久雄氏が新たに編纂した「明治文學史」を讀んでゐると、所謂明治開化期に多數の草双紙を著はして可

成り評判のよかつた高畠藍泉の作品の一が、例の「岡山紀聞筆の命毛」であつたことが分つた。私は藍泉の作品は他に一つも讀んでゐないのだが、この「岡山紀聞」は、本間氏の說によると、彼の代表作であるらしく、「これはもと芳譚雜誌第二百二十三號以下へ續載し明治十五年三月、繪入活版本として刊行されたもので、岡山藩主池田少將治政が、素行を亂して吉原江戸川玉屋の遊女花紫の許へ通ひ、且つ愛妾筆野の色香に溺れ、貞節の奥方に裸踊などをさせて、筆野と共に嘲笑して、奥方をして自害させるといふ有樣で、これがために藩中に、忠奸二派を生じ、正義權謀互に相軋轢を極めるといふお家騒動を綴つたものである」と、特に解說が附けられてゐる。この草双紙の大體の筋立をも、裸踊の挿繪をも、私は可成り鮮明に記憶してゐるが、本間氏の文學史の中に見本として挿入されてゐる明治開化期、すなはち明治二十年頃までの多くの小說類の挿繪と同樣に俗惡ないやらしい何の美感をも起し得ないものであつた。愛妾筆野は豆腐屋の娘であつたが、この一篇のうちで最も強く私の幼い柔かい頭腦に印象されてゐるのは、彼女が最後に熱病に罹つて危篤に陷つた時に藩主が見舞に行つて、彼女の頭から髪が落ちて、汚い禿頭の露出したのを見るところであつた。その實景描寫の挿繪がまた甚だ醜惡であつた。

要するに不愉快な小說である。世界の古今の文學を標準として、批評すれば、この小說

なとは最下級の作品、悪趣味の藝術となるのであらう。ところが、さういふ作品が、私などの幼少の頃には世間の小説愛好者に愛讀されてゐたのだ。あの頃の文化の程度がそれによつて想像されないこともない。

十歳未満の、まだ色氣づかなかつた頃の私は、鬢の落ちて素地の現はれた女の醜惡を、豫め心に印象さゝれた。藩主がさま〴〵に迷はされた揚句に幻滅を覺えたのとは異つてゐる。

この「筆の命毛」は行燈の光で讀んだのであつた。八犬傳水滸傳のたぐひ、それから稍々生長して、覺束ない英語の力で、最初にどうにか讀んだ英文アラビアン・ナイト。田舍の夜の光が、行燈から小さなランプに進んだ。日本の文化は我々を浮べて刻々に流れを進めてゐたのだ。私は、幼な心に、八犬士のやうに何處からか神祕力のある玉を授りはしないかと空想したり、夢の豐かな少年らしい心に、遠くアラビアの昔を追想したりした。財寶の充ちた岩屋の扉を開閉する魔法の言葉「オープン、セシーム」「シャット、セシーム」をよく獨語した。それを摩りさへすれば欲しい物が何でも獲られるといふアラディン所有の汚いランプを、自分の机の上の二分心の粗末なランプをモデルとして心に描いた。

トルコ、アラビア、バグダッド、ダマスクス。かういふ地理的名稱が、異樣な刺戟となつて、どんな土地であらうかと空想されたが、豫備知識のない當時の私には、空想するに

も空想の手懸りがないので、「オープン、セシーム」などと同様、不思議な呪文として印象される外無かつた。私に取つては平凡至極の土地となつてゐる故郷でも、異郷の人々には、想像も及ばない不思議な存在であるのと同様であらう。

世の中に不思議な存在があるのはいゝ事なので、不思議の正體を明かにしたいと思ふだけでも精神が活躍する譯であるが、私など、老いるにつれて、不思議感が衰へるばかりである。その時々の文化の流れに安んじてゐて、オープン、セシーム（開け、胡麻）の魔語を求むる氣にもならない。

澄んだ空には鳶が飛び、小山の麓には柿の實が熟し、海端の埋立地には新築の工場の煙突から油烟がのどかに上つてゐる。見覺えのある男女、見覺えのない老幼が歩いてゐる。話をしてゐる。さういふ故郷の秋の光景が私には不思議でもない。珍らしくもない。

近年、春と秋とに故郷の地を蹈む私も、村に於ける點景人物の一人で、海のほとり、山の小徑で出會ふ誰かゝら、たまには挨拶の言葉を掛けられることがあつた。祖先以來の家屋が昔のまゝにまだ存在してゐて肉親のまだ定住してゐるこの村へ私が歸つて來るのは、彼等には當り前の事と思はれてゐる。私が「いつもお丈夫で」生きてゐる人間として歸つて來たのが彼等の目に不思議な存在として映らないと同樣に、名前と顏とを知つてゐる

る村の誰彼が死んだことを聞かされても、私は少しも不思議には思はない。人間は生きられる間生きてゐるのも當り前であり、死ぬ時が來て死ぬるのも當り前である。

自分の顏が他人の目にどう映るか分らないが、自分の顏は自分の目によく分らないものらしい。私は自分の顏は理髮店で見るくらゐのものだが、その折に印象された自己の面影も、不斷は自分の心眼に朦朧としてゐる。ところが、去年の夏、シベリア經由で歐洲へ向つた時、滿洲國の首都新京でハルビン行の夜汽車に乘換へた際に、汗まみれの身體を洗面所で拭ひながら、鏡に映る顏を見るともなく見ると、それは憔悴を極めた詰らない顏であつた。鼻が尖つて頰骨が尖つて、顏が尖つて、目が落込んで、窶んだ頰に皺が寄つてゐる。「疲勞せる人間の顏」である。こんな身體で長途の旅行に堪へられるか知らんと、私は氣遣ひながら、蒸暑い寢臺に身を横たへた。そして、寢づらいまゝに、來し方行く末のことを考へるともなく考へた。八犬傳には、犬士の誰かゞ、當てのない旅を續ける間に、何處かの宿での夜半の睡醒めに、勇士に似合はず、心淋しく、來し方行く末の事を考へて、いつの日にか目的を達するだらうかと、センチメンタルになるところが叙せられてゐるが、犬士の旅行の目的が元來馬鹿らしい事であり、來し方行く末が現實離れした空々しい事なのだ。さういへば、私達夫妻の旅行だつて意味のないものであるらしいが、他人にはさう

見えても、當人達にはこんな旅行にも一縷の生命が通つてゐるのである。

旅行免狀を下附されるには、隨分煩瑣な手續きが要るので、私には根氣仕事であつた。東京府廳、警視廳、ソ聯領事館などへ幾度も足を運んだ。日本のツーリストビューローや、ソ聯のインチューリスト出張所へ行つて、旅行に關するさまざまな知識を求めてゐると、先方の事務員などが博學な人物のやうに見做された。汽車の切符の外に、車中の食券ソ領滯在中の宿料券食券を購つたり、旅券に必要なために、撮りたくもない自分の寫眞を撮つたり、正金銀行の信用狀調製のために、圓とドルとポンドの爲替相場の比較をしたりしてゐると、規則づくめで誤魔化しを許さないやうな實際生活と、讀書作文思索などの、少々どちらへ轉んでもいゝやうなことに心を向けてゐる我が日常生活との相違が感ぜられた。

初度の外遊の時には、私と洋行とは不似合に思はれたゝめニュースヴァリューがあつたのか、新聞記者の來訪があつたり旅行記の依頼があつたりして、出立前に身邊が賑やかで景氣がよかつたが、今度は世間的興味を惹かないのでその點はのどかであつた。日本も一文士の世界一周くらゐを問題にして洋行の是非を論じたりするのは、世界の三強國か五強國かの一つとして、あまりに料簡が子供らしい次第であるが、これも鎖國時代の名殘りで

あるか。私は、國家の重要な任務を帶びてゐるのではなし、自己宣傳を企てゝゐるのでもなし、文學の材料を取りに行くのでもなし、誰にも見送られない方がいゝやうに思つてゐた。

私達は急行車の富士に乘つて、同伴してゐた女中を、眞夜中頃に故郷近い驛で下車させたが、この女中は二年間私の家でよく勤めて、今度の機會に歸村したのであつた。村の女も近來、神戸大阪あたりまでは、女中奉公或は工場かカッフェー稼ぎに出掛けるものが多くなつたさうだが、東京はあまり遠過ぎるので職を求めて來るものはなかつた。この女中は、私の鄕家に勤めてゐたのが緣となつて、東京に憧れ、ことに、東京の私の家を特別に勤めいゝ所のやうに妄想して、私の家に奉公することになつたのだが、東京に來たつて女中勤めにいゝ事のあらう筈はなかつた。二年の間の苦役に靑春を枯らしたやうなものであつた。たゞ東京を見たこと、夜も晝の如く明るい銀座通りを見た事、三越で幾許かの買物をして食堂で何かを食べた事などが、村の知人に話の種になり、他日思出の興味にもなるのであらう。私などの海外旅行もそんなもので、高い旅費を使つて苦勞しに行くやうなものである。シベリアの列車内には、オリンピック關係で多數の日本人が乘つてゐたが、どの人々も何かの目的を有つて旅行してゐるらしかつた。たゞぼんやりオリンピックの世界

的競技を觀るための旅行ではなさゝうだ。無論熱心に日本の選手を應援するのであらうが、その外にも何か有用な企みを胸に持つてゐるらしい。私はそのオリンピックの會場にさへ、雜客を恐れてわざと近寄らず、近所を素通りして外へそれるつもりであつので、少し常識外れのやうだが、しかし、北歐の海を滿羅と見做して、現代的曠原の氣持で身を投げに來たのではない。地上の生命をほそ〳〵とでも保つために、肉眼心眼の餌を捜してゐるのぢやないかと、自分の旅行を自分で傍觀的に見る時もあつた。

ハルビンの北滿ホテルに泊つた時、私達は、大抵の客が漫遊記念に見て置くといふ名物キャバレーへ、人に勸められて出掛けた。夜遲く、眠いのを我慢して行つたので、樂しみよりもむしろ苦しみであつた。客の數も少く、それも、話の種にちよつと覗いてゐると云つた程度の客で、舞臺の方にも、華美な色彩も狂熱の調子もなかつた。踊り子と云ふのか、女給と云ふのか、何人かの若い女性が客待ち顏して片隅に集つてゐた。そのうちでいくらか目鼻立ちの整つてゐる女を招いて、私達の席に侍らせたが、側で見ると、色は白くても艶のない白さで、碧みがかつた目も潤みがなく乾いてゐた。をり〳〵微かな咳をするので、これは肺患者だと、私は直ぐに察した。年齡は十八ださうだ。見掛けはもつと古けてゐるが、嘘ではあるまい。父はロシア人ださうだが、母の國籍は曖昧であつた。自分で稼いで喰つ

てゐるのだ。私達は晝間、案内者に伴はれて市中を遊覽した時、場末の白系露人の住宅地を横切つたが、小さい粗末な家でも、他所目には住みよさゝうに見られた。純白なレースを窓に掛け、二三脚の椅子とテーブルは簡素でも、何かの花が挿してあり、隣家との間隙も清潔に掃除されてゐて、貧民窟とか裏長屋とか云ふやうな感じはしなかつた。祖國から放逐されても、こんなに小綺麗に暮してゐられゝばいゝだらうと、私は簡單に解釋したが、案内者の説明によると、他人の國に寄寓する彼等の不安、日常の苦心は可成りひどいさうである。

冬になつて、夜遅く家へ歸る時の寒さ淋しさを、キャバレーの女は、私達の問ひに應じて機械的に話した。父祖の故郷のロシアは知らないが、恐ろしいいやな所だから行きたいとも思はない。他所の土地へは行きたくも行けないから、ハルビンで働くつもりだと、淡淡と述懐してゐた。ダンスの相手にはなれないし、飲めもしない洋酒を前に置いて、不景氣な話を聞いたり聞かせたりするなんか、キャバレーのお客として甚だ不似合な譯であるが、彼女としては、相當のチップに有りつきさへすれば、我々のやうな客の相手になつてゐる方が、結句骨が折れなくてよさゝうだ。「僕は昨夕はこの町の友達に連れられて、町のキャバレーを一つ殘らず飲廻つて、東が白む頃に宿に歸つて來ました」と、釜山以來同じ

列車に乗合せた或青年は、疲れた様子もなく、翌日私達に話したが、私にはそこに少しも享樂の刺戟が感ぜられなかつた。

「孤衾水の如く既に三年」と、賴山陽が詠じてゐるが、これは、父の死後、古風の支那道徳に準じて、閨中の純潔を守つてゐたことを意味してゐるやうだ。「孤衾水の如く既に數十年」といふ心境を經驗してゐる私には、酒色の享樂的の話が他界の話題のやうに想像されるのである。(此處で自註を附して置くが——この一篇に私といふ第一人稱を用ひてゐても、その私を作者自身の事と斷定しなくてもよろしい。年少の頃、ホーソンの短篇小說集を英語の教課書として學んでゐた時、作中の「私」は作者自身の事かと教師に訊ねると、教師の答へは、「必ずしもさうではない。これは "Poetical I" と云つて、作者が或人物に假想して話をしてゐるのだ」とのことであつた。つまり、文筆業者は自分を失戀者に仕立てたり、人道主義者に化けて見たり、厭世家になつたり、さま〴〵に變形させて、一人で、八人藝をやつてゐるやうなものなのだ。)

私は、シベリア列車内の食糧品缺乏に具へるため、他の旅客同樣、アルコールランプや罐詰類を一包(こんなものはみんな無駄になつたのだが)買ひ調へたあと、滿洲里行の汽車に乘るまでまだ時間がたつぷり殘つてゐたので、喫茶店へでも行つて見ようと思ひつい

て、宿の者に、市中の優秀な喫茶店の名前を訊いて、獨りで出掛けた。ぶらり〳〵傍見しながら歩いてゐると、支那人の車夫が頻く乘車を勸めるので、うかとそれに乘つて、行先を知らせると、車夫は、「よく知つてゐる」といふやうなことを、覺束ない日本語で云つた。大通りから離れた薄暗い町へ入つて、或家の前で車が止つた。その家の戸はぴつたり締つてゐたが、車夫はベルを鳴らして節穴から覗いた。喫茶店としては變だが、こんな所にハルビンの特色があるのかと、車を下りて待つてゐると、やがて戸が開いて中老の西洋婦人が顏を出して會釋した。私は何の氣なしに內へ入つて玄關へ上ると、側の廣間に、十數人の西洋女が並んで腰を掛けてゐるのが、一どきに目に映つた。目を留めて見直すと、部屋の中は飾りはないが清潔で、女どもは、どれもさう美しくはないが醜くもなく、どれも皆何の表情もなく口を噤んでゐた。あたりは物音一つしないで寂としてゐた。私は西洋の修道を聯想した。

「お茶を飮みに來たのだが、こゝは喫茶店ぢやないのかね」と、私が訊ねると、

「こゝにはお茶ありません。女あります。二階へお上りなさい。五圓です」と、老女は答へた。

「ぢや、左樣なら」

私が戸口へ行くと、老女は、一たん鎖した戸を開けて、餘計な口は利かないで、私を外へ出した。私は虎口を免れたやうな氣持がしたが、なぜ二階へ上らなかつたのであらうかと、宿へ歸る途中で反省した。虎穴に入らずんば虎兒を得ずとのたとへがあるが、さういふ二階に上ることに於て、詩の種があり小説の材料があり、旅行の味が深くなるのではあるまいかと、私はよく人の云ひさうなことを心に浮べた。

キャバレーの女も、この祕密の家の女性も、異鄕に寄寓してゐる白系露國女性の悲慘なる運命であらうかと、彼女等の心身によく接觸しない私は、傍觀者らしい通り一ぺんの感慨を寄せた。かつて、奉天の銀座通りとも云はれてゐる靑葉町の艷樂書院とかいふ妓樓へ入つて見たことがあつたが、汚らしい少女が十幾人も左右から押寄せて來て、私の身體に絡りついてがや〳〵騷ぐのに驚いたゞけであつた。朝鮮の妓生の謠音機で習ひ覺えたといふ「東京音頭」などの日本の流行唄を聞いた時にも、鄕愁とかノスタルヂアとかいふ言葉で現はされてゐる感じを起さゝれなかつた。東京をも生れ故鄕をも思ひ出して懷かしみを覺えることがなかつたのだ。たかゞ半年や一年故鄕を離れてゐたくらゐでノスタルヂアに憑かれないのに不思議はないが、私は「岡山紀聞筆の命毛」や「八犬傳」や、或はそれ等の挿繪によつて現はれてゐるやうな文化——私が少年時代に心に浸み込まされた文化に鄕愁

を覚えるなんか咀ふべきことだと思つてゐた。

まだ出立時刻には間があつたので、誰かに手紙でも出して置かうかと、机に向つたが、「今夜ハルビンを立つて明晩はいよ〳〵ロシア領へ入ります」といふ簡單な知らせを、二三の知人に書く外に、心を籠めたしつこい音信も送りたいところは何處にもなかつた。夫婦だけの家庭を長い間營んでゐた私達が、二人連れで旅へ出てゐるのだから、思ひが故山に殘つてゐないのは當り前であるが、私の存在不存在を意に介してゐる者が世の中に有りさうには思へないのだから身が輕い譯だ。或仲間の會合に座興を添へるだけの生存價値もない私である。それで、妻に相談して手紙を出すところもなければ、妻に內しよで手紙を書く當てもないのだが、

「おれもお前も、こんなに身體が弱つてるんだし、ロシアの旅行は隨分厄介だらうから、何處でへたばるか分らないね。だから、此處から遺言狀を書いて送つといたらどうだらう」と、私はふと思ひついて云つた。旅先の危險を痛切に感じたのではないが、幾分の實際問題としての必要と旅中の座興としてさう云つたのであつた。

「誰に宛てゝ送るんです？」

妻にさう訊かれると、遺言狀を確實に誠意を以つて實行してくれさうな人間が、私にも

思ひ當らなかつた。あれかこれかと、肉親や知人の名を擧げて、二人で適不適の批判を試みながら、

「まあ、兄弟宛にしとくんだね。おれもいざとなると、信頼すべき人間が世界に一人もないんだから不思議だね」

「わたしにこそそんな人一人もありませんよ」

それは私はよく知つてゐた。でも、妻は私だけを信頼してゐる。私も妻を信頼してゐる。それは、男と女とが一つの家に住んで日常を過してゐるうちに起る因襲的の信頼で、大抵の家庭はさういふ因襲的信頼によつてどうにか浮世を生きるに堪へてゐるやうである。「君のやうに結婚したあとで、夫婦仲が自然に睦じくなるのがいゝんだね」と或知人が、女性關係の波瀾のある自分の生活に引きくらべて、譯知り顔に獨り合點の批評を私に下したことがあつたが、私には男女間の「睦じさ」の内容がちつとも分らないのである。妻の方では、「睦じさ」の味はひがどれほどか分つてゐるのかも知れないが、私には、どちらもが形影相憐んでゐるやうなみすぼらしさを覺えてゐるばかりだ。

「自分の持物を形見分けするのなら、ちやんと書いてお置きよ」

私はさう云つて、自分は自分だけで自己の所有物を列記して、處分法をも附け足した

が、死後の名殘りがそのなかに漂つてゐるのが佗しかつた。死後の名殘りばかりではない、生きてゐる間の人間一箇の生命がこのうちに寄寓してゐるのが、まざ〳〵と見えるやうであつた。他の人々の遺言狀が多分さうである如く、私の遺言狀にしても、本當は生存に別れる時の實感が入つてゐるのではなく、最後の瞬間まで所有物と別れる覺悟はないのである。

でも、その手紙をポストへ入れて、現在所有してゐる正金銀行の信用狀と旅行免狀とは袱紗に包んだまゝ胴卷に入れて身體に縛り付けた。そして、滿洲里近くのロシア領へ入ると、入國者の檢査所へ、すべての荷物を物々しく持込んで、檢査官に調べられるとゝもに、胴卷在中の一切の物をも微細に檢査されるのだ。役人は案外穩かで、鞄の中をも搔亂さないで、一つ〳〵を叮嚀に改めるのだが、現金をも信用狀の金額をも、衆人環視の下で調べて證明して呉れるのは、誰にも不快な印象を與へるらしかつた。全財産を人に見られるのは物騷であつた。「この土地では、財布を人に見せちやいけませんよ。附け狙はれてひどい目に會つた人がありますし」と、嘗て亞米利加へ上陸した時に、その地の日本人から注意されたことがあつたが、これは、亞米利加ばかりではない。どの國でゝも同樣であり、日本でもその注意を無視していゝ事はないのである。

財産だけではない。思想だつて、或は親子兄弟夫婦の間柄だつて、成るべく世間に吹聽

しない方がよさゝうだ。財産は今、ソヴィエート聯邦の官吏の前に隠すところなくさらけ出して、二人が半年ばかりの海外漫遊を為し遂げられる程度の旅費を確實に保つてゐることを示したが、自分の思想は明らさまに世間に示したことはない。胸底深く藏してゐるつもりだ……ところが、よく考へて見ると、自分には胴巻に堅くしまつて置かねばならぬほどの「思想」といふものが有るか知らと疑はれた。同行の旅客諸君も、胴巻の中に、或はポケットの中に、多いか少いか、旅費を有つてゐるには相違ないが、「思想」をそれ〴〵に有つてゐるだらうか。

シベリア列車の一等室は、殆んど日本人ばかりと云つていゝくらゐで、一週間の長い途中の退屈凌ぎに、お互に紛々たる世間話やシベリア沿道の見物感想談をしてゐたが、厖大な、底の知れない、不可思議な、薄気味の悪い土地を通過してゐるといふ感じは、みんな心に動いてゐるらしかつた。夏のシベリアは、豫想してゐたやうに荒涼としてはゐないで、眺めは豊かなのだが、恐ろしい思想の中を通つてゐるやうに思ひ做すのであつた。危害の加へられる恐れはないので、遊び気分でわざと怖い土地のやうに思つて、怖いもの見たさの興味を寄せてゐることは、人々の話の端々から察せられた。

バイカル湖も、緑葉影を落してゐるのどかな湖水で、蛇も鰐魚も住んでゐさうでなかつ

た。ウラル山越えも嶮悪ではなさゝうで、赫々たる日光が平野に満ちてゐた。ヴォルガには静かに悠々と水が流れてゐるだけであつた。無心にたゞ見てゐると、こんな有様なので「思想」といふものは、私などの目にはあり〳〵と映るものではなさゝうだ。

男と生れて女を知らないのは、戀愛を知らないのは、生甲斐のないやうなもので、痴呆人であるかも知れないが、「思想」を胴巻にもポケットにも持つてゐないのも、人の人たる甲斐性がないので、痴呆人であるかも知れない。(それとも「思想」に拘はつて、「思想」を相手に獨り相撲を取るのが痴呆人か)

厚ぼつたい二重窓で密閉されてゐる部屋で、私達は一週間汗まみれの垢を溜めたまゝ、上下の寝臺で過して、モスコーの宿に着いた時の入浴の樂しみを何よりも重大事のやうに豫想してゐたが、私は自分の衰弱した肉體が汗の臭氣を帶びてゐるのを、鏡に映す如く心に浮べてゐると、「醜骸」と云つた感じがした。自分を醜骸として見下すやうないやな「思想」から脫却して、優美或は剛健の風姿を具へてゐるつもりになつて、所謂朗かな、生氣潑剌な「思想」を保つてゐたい。

チタとかトムスクとかオムスクとかいふシベリア沿線の田舍町の停車場に、レニンとかスターリンとか、某々とか、有名な政治家や軍人などの彫像が、徒らに大袈裟な形で建て

られてゐるのが、痴者(こけ)夢かしのやうであつたが、あの巨大な風袋の中にどれほどの思想が籠つてゐるのか。

私の旅中の同伴者である妻は、醫者には殆んど診て貰つたことがなかつたが、身體中にいろんな病氣が巢くつてゐるやうであつた。病氣が五臟六腑を侵らせてゐるやうに、私には想像された。私だけにさう想像されてゐるので、私以外の人間の目には健かな旅行客の一人とも見られてゐるやうだ。私は、屢々妻が夢に魘(うな)される微かな音を聞くことがあつた。私も時としては夢のうちで苦しい聲を立てゝ、妻に呼び起されることがあつた。さういふ時には、私にも二人旅の有難さが感ぜられるのであつた。でも、醒めたあとでも、身體はむづ痒く、頭は重苦しく、窓を開けて夜風に觸れたくても、堅牢な扉は動かなかつた。

妻はどんな夢に魘されるのかよく知らないが。——一人で淋しい曠野をとぼ〳〵と歩いてゐると、不意に獅子か狼かに襲はれたと、夢から醒めた妻がかつて云つたことがあつたが、曠野の一人旅なんかは詩的であるが、私の夢に入つて來る風景は、いつもさういふ繪になるやうなものではなかつた。「夢のやうな話」と云ふと、ロマンチックな美しい、夢のやうなことが意味せられてゐるが、私の夢はさういふ夢ではなかつた。斷片的に浮沈して

ゐる夢は、邪惡醜陋と評すべきものらしかつた。醜骸の如くなつてゐる肉體に醜心が宿つてゐるので、それは同室の妻に對してさへ面はゆいのであるが、幸ひに、心は人に看破されないために、平然として生きてゐられるのだ。同床異夢といふ言葉があるが、列車内の人々は如何なる夢を見てゐるか。

私の幼い頃には、北海道といふと、監獄が聯想されて恐ろしい土地と思はせられてゐたが、世界知識に觸れるやうになつた頃から、シベリアといふと、世界の北海道で、最も陰慘な監獄地帶と思はされてゐた。このシベリアを、最初自分の領地に取入れたのは、殘虐王イヴン四世であつた。このロシア皇帝は、思ふ存分の暴威を揮つて殺戮を樂しみ、晩年には、熱愛してゐた長子をも發作的狂暴で撲殺したので、惡夢から醒めると、悔悟の苦悶に、人鬼の如き皇帝の心も打挫かれたさうだ。

皇子の恨めしさうな苦悶、皇帝の放心したやうな憂鬱は、レーピンといふ畫家に描かれて、その作品はモスコー博物館に掲げられて、觀客に戰慄を與へてゐる。——幼年時代に讀んだ「筆の命毛」の挿繪と、老境に達して觀た「イヴン四世と皇子」とを、我が心に並べて味はつてゐると、そこに何かの思想が湧いて來さうである。しかし來さうに思はれるだけで、信賴すべく尊重すべく、宇宙の眞理か世界の眞理か國家の眞理か、自分一箇の眞

理か、何かとして、後生大事に藏つて置けるほどのものは湧いて來ないのである。スペインの畫家のゴヤの「銃殺」の繪や、獨逸のベクリンの「四騎士」（火焰に包まれた町の上を骸骨の如き顏した一人の魔人が驅けてゐる）の繪などは、××××の意を烈しく含んでゐて、輸入禁止さるべきものであらうが、レーピンの繪も、觀客に激しい恐怖を感じさせるために、一時會場から撤廢されたことがあつたさうだ。

しかし、レーピンの繪などは、人心の一つの現はれであるにしても、私などの夢は邪惡醜陋に滿ちてゐて、容易に撤廢は出來さうでない。東洋でも西洋でも、古來、邪惡醜陋の表象として厭ふべく唾ふべく恐るべきものとして、屢々蛇を持出すのが習ひになつてゐる。「蛇のやうだ」といふと最惡の形容のやうだ。ルーベンスとブリューゲルの合作に、數多の蛇が首に捲付いてゐる死面の繪があつて、鬼氣人を襲ふの趣きがあつたが、傑れた美術家などが、蛇や虎や狼や、或は惡魔に托して、凄慘な光景を描くのは、そこに美化された遊びがあるので、レーピンの繪だつて、悲壯な題材を採りながら、觀る人に藝術的快感を起させるつもりで製作したのに違ひない。我々の夜の夢畫のまぼろしは、本當は繪にも詩にもならないのではないか。

身體がすこやかで、勞働をして、夢といふ夢を見ることなしに熟睡が出來たなら、それ

だけは私などよりも幸福であらう。私は、睡眠劑を服用して、そのお蔭で凶夢の數を減少させるか、老眼鏡を掛けて、縮冊本の漢詩集や歌集を、薄い光で讀んで凶夢の活躍をいくらか鎭めようとしたが、時々は、李白も人麿も、いくらうまくても、文字の上の曲藝をやつてゐるだけで、生存中日常考へてゐたことのエッセンスがかういふ詩であり歌であつたとすると、私などは、別種の存在である。「颯颯何の似たる所ぞ、天地一沙鷗」（杜甫の五言律詩のうちより）なんか、私の旅中の氣持をも、それに現はされてゐるやうに思つて微吟してゐると心が和やかになる譯だが、杜甫自身が逆境に身を置いてゐる際の眞實が少しも出てゐない如く、私の心の本當はもつともそこに寫されてはゐない。颯々と空を飛んでゐる鷗には夢がないだらう。地にぬたくつてゐて、醜惡の代表のやうに人間から濡衣を着せられてゐる蛇にも夢はあるまい。地に立つて歩いてゐる人類だけが、夢に惱まされてゐる。

私は故郷の秋に浸りながら、「思想追求者」の生涯を、さも自分がその一人である如く考へたが、正體の分らない思想なんかを追求して世界的旅行をしてゐると、地球の外へ辷り落ちて暗闇の中に沒するだらうと、心細く推察された。前にも云つた如く、幼い頃の印象は強いものだが、今は秋の日の冴えてゐる山麓の、寺の本堂のうしろの竹藪で、昔或女

が首をくゝつて死んだことがあつた。また、或家では、長櫃の中で男女が情死してゐた。顔面の引釣つてゐる或漁夫が、出刃か何かで妻子を斬付けてゐるのを私は目撃したことがあつた。漁に出た不在中の家族の不身持を憤つたのであらう。皆小説としての好材料であらうが、さういふ人々の行爲を繪そら事として美しく小説らしく描くには、自分の頭に巢くつてゐる邪惡醜陋の夢に蔽ひを掛けて壓へつけて置かなければならぬ。

逞しい大きな鷲に攫まつた小兒が、空中から小水を垂れてゐる繪畫があつたが、それは恐怖に襲はれたゝめなのだらう。小兒は岩の上に振落されて頭蓋骨を叩き潰されるかも知れない。或は軟かい青草の上にそつと落されて、慈悲深い誰かに拾はれて擁護されるかも知れない。夢のない鷲は思想的行動を取るのではないから、小兒は運次第である。私は鷲の爪に摑まつて大空を飛びながら、下界を見下して、「美なるかな、壯なるかな」と感嘆して、口笛でも吹いてゐるやうに朗かな氣持に浸つたことが、幼い頃にあつたか知らんと、私は鷲の代りに、實際に村の空を飛んでゐる鳶の悠然たる姿を仰ぎ見た。鳶はしやれに飛んでゐるのではない。餌をあさつてゐる。生きた魚でも腐つた魚でも喰つてゐる。野良仕事をしてゐた時、鳶に頭をつゝかれて死んだ百姓があつたが、鳶は人間の腦味噌をも腐つた魚と同樣に味はつたのであらう。（昭和十三年一月　中央公論）

劇場風景

連日の霖雨に心の腐る思ひをしながら、私は幾つかの芝居を觀て時を過した。近年は自動車に廉く乘れるので、演劇享樂も昔より一層完備した譯である。震災後間のない頃、私は市村座で、菊吉合同芝居を觀たことがあつたが、晝間の晴天が夜は雨になり、芝居の終へた時には、風をもまじへて、雨脚が可成り烈しくなつた。劇場附近の電車停留所には、歸りの客が續々と詰めかけてゐたので、私は和泉橋の方へ向つて歩いて行つた。歩くことには馴れてゐるし、衣服を濡らすことなんか何とも思はない私である。電車を諦めて歩いてゐる客も可成りあつたが、或夫婦連の樣子が特に私の興味を惹いた。妻君は子供を背負ひ、晴着の裾を端折つて、夫君は蝙蝠傘を差掛けてゐた。相合傘も唄の文句では風流であるが、實際はさうでもなささうだ。雨の用意をして來ればよかつたのに、あなたがせき立て

たからいけないんです。雨が降らないと云つて」、「芝居にはお前が望んだから來たのぢやないか。おれは此間からの眠不足を取りかへすために、今日は家で寢てゐたかつたのだ」「だつて、わたしは不斷芝居なんか見る機會はないですからね」

尖つた口調でそんなことを云ひ合ひながら、妻君は、自棄で夫君を離れて泥を跳ねてスタスタと急いだ。下級のサラリーマン夫婦のたまの芝居見物の日に、天は雨なんか降らせなければよかつたのだ。私は享樂の果てのみじめさを想像した。今なら五十錢で、劇場街から場末町まで、見果てぬ夢を運んで行かれるのである。

私は、今度の、數日連續の芝居見物に、銀座でコーヒーでも飲んで、ユックリ劇場へ足を運ぶのを例としてゐたが、或日劇場近くの街上で目についたのは、壁に貼付けられた幾枚もの小さなビラであつた。「危いぞ××座や××劇場へ行くな……」の文句が雨に濡れてしよんぼりしてゐた。それは、六十メートルの颶風襲來の豫告ではないので、下級從業員が或劇場の賃銀未拂に關して爭議を起してゐると云ふのであつた。表面は華美豪奢を誇つてゐる劇場にも、裏から見たらいろ〳〵な忌むべきことがあるのであらう。だが、さういふビラを見たゝめに劇場行を躊躇するものはあるまい。弱者のせめてもの腹癒せがビラに現はされてゐるだけであらう。文學者評論家の言論だつて、このビラに毛の生へたやうな

ものて、筆者の腹癒せ以上に、現實の社會に與へる實際の力はなさゝうに思はれる。劇評にしても、興行者や俳優の目には、壁に貼られたビラくらゐにしか思はれないらしい。

小林一三氏が、劇評といふものは興行者に取つて何の用もなさぬと云つたとかで、何處かの雜誌でそれを問題にして是非の評を下してゐたやうだが、小說の批評にしても、繪畫音樂の批評にしても、芝居の批評にしても、作家畫家俳優などが、それによつて啓發されることは、滅多にないと云つていい。元來、批評といふものは、讀者や見物人に讀ませるのを主な目的としてゐるのだ。讀者などに藝術の說明をすることもある。傑れたところ劣れるところを指摘し、その理由を明かにすることもあり、藝術としての價値を判斷することもある。發表された藝術家の作品を材料として批評家自身の人生觀や趣味を語ることもある。少くも世間を賑はす役を批評家は勤めてゐる。小說、芝居、音樂、どんな藝事にしろ、世間が何とも云はなかつたら、存在の影が薄くなるばかりであらう。それで、劇評家が何とか云ふことは、世間の噂の一つの代表であつて、間接か直接に演劇を賑はす用をなしてゐるのだ。新聞雜誌に現はれる劇評は無用であるとしても、街上や社交界で芝居の噂を誰もしないやうであつたなら、芝居は衰滅するばかりだ。文字で現はされた劇評の一つ一つを見て劇評を無用視するのは、小林氏の不聰明なる所以で、有象無象の噂の一端が劇

評の形で現はれてゐると見るべきである。從つて參考に價してゐるに極つてゐる。

私は數十年前に、續けて新聞の劇評をやつたことがあつたが、あの頃劇評家は、興行者からは劇場の寄生蟲見たいに思はれてゐたらしい。(美術批評も數年間やつてゐたが、あの頃の畫家からも寄生蟲見たいに思はれてゐたらしい)しかし、批評家は、さういふ侮蔑を受けなければならぬのかと、私は疑問にしてゐた。劇評に獨立した生命を保ち得られないかとひそかに問題としてゐた。「毎日芝居を御覽になるのは大變ですね」とある知人が同情した。文壇人はこの頃の芝居を見たがらないのを常例としてゐる。今の芝居は智慧の足りない人間の見るものゝやうに思はれてゐる。私も、近年は自分から進んで劇場へ向つたことは滅多にない。他の知識階級の人々同樣西洋映畫に一層多くの興味を有つてゐる。しかし、今度數箇の劇場に出入してゐるうちに、芝居だつて見てゐられないことはないと、新たに感じた。兎に角、生きた人間がそこで動いてゐるのだ。生きた人間が演じて生きた人間が觀てゐるのだ。俳優も見物も、頭腦すぐれた人間ではないかも知れないが、さう云へば頭腦のすぐれた人間は、社會のどの方面に頭を擡へてゐるのであらうか。野球などさまざまの勝負事も面白いにちがひないが、しかし、野球場に集つてゐる人間が劇場に集つてゐる人間よりも一層聰明叡智であらうとは思はれない。芝居見物は退屈である。しかし、

芝居を見なくても、人の世には退屈な時が多いのである。年中朝から晩まで緊張した生活をしてゐる人もあり、それを自慢にしてゐる人も少くないが、その生活の内容を見ると、さして羨ましく感ぜられないことが多い。

それで、劇評も、小説の批評、音樂の批評同様に、或はそれ以上にも、獨立性のある藝術行爲となり得るやうに私には思はれだした。時代離れのした古臭い芝居を演じてゐる俳優等の一擧一動に現實の人生を見られないこともない。

○

モリエールの喜劇「タルテュフ」が、或新劇團によつて演ぜられてゐたが、私はそれを舞臺では觀なかつた。吉江氏の新譯を讀んで舞臺の光景を書齋裡で空想しただけであつた。これは喜劇と云つても、日本の劇壇に通用してゐる喜劇とは異り、辛辣なる諷刺劇であるが、目下日本に流行してゐると噂されてゐる宗教熱を思ひ合せて、私には多少の興味を覺えた。タルテュフの如く何處の宗教家も日先はうまい。人たらしが上手である。モリエール時代には、雜誌も新聞もなかつたし、出版業も普及してゐなかつたが、今日の世に、

タルテュフのやうな宗教家が現はれたら、うまくジャーナリズムと結託して、どんなに民衆を蠱惑するであらうかと氣遣はれた。モリエールはかういふ現實暴露をやるので迫害されたさうだが、日本だつて、この程度に強權者の眞相を舞臺の上で描寫したら壓迫され禁止されるに違ひない。もつと巧みに、假面を被つて、上べは流俗に伍したやうな態度で、現代批評や人生批評を試みるより外ないのである。日本にそんな氣の利いた劇作家が現はれる筈はないが、しかし、凡庸な作家凡庸な俳優でも、不用意の間に、御當人達が意識しないうちに、人生批評現代批評を試みてゐることも少くないのだ。

片岡市藏の襲名披露の「口上」があつたが、口上は封建時代の俳優と見物との關係をよく現はしたもので、藝術家と鑑賞家とがよく親和してゐたことが察せられる。今日の俳優は地位が向上してゐるのだから、こんな卑屈らしい詭言や態度は好まないだらうが、見物はみんな悦しがつて聞いてゐるに違ひない。政治家だつて、宗教家だつて、文學者だつて、大衆の人氣を得るためには、この呼吸が必要なのだ。一方で御機嫌を取りながら一方で脅かすのが、民衆制御に必要な態度なのだ。舞臺には「豐臣三代記」の駿府城内大書院や「忠臣藏」の扇ヶ谷館の場面のやうに、歷史上に名聲を保つてゐる英雄をはじめ、さま〴〵な武士が顏を竝べ、見物席には現代のさまざまな男女が竝んでゐるのであるが、明治の初年と

は異り、今日の見物は、實際の武士の風俗は見たことはないので、芝居によつて武士の印象を得るやうに馴らされてゐるのだ。俳優自身だつて實際の武士を見たことはなく、舞臺の仕來りに由つて武士に扮したつもりになつてゐる。芝居がなかつたら武士に對する日本人の印象は稀薄になつてゐた譯だ。ところで、現今の劇作家は、概念的に武士を見てゐるため、武士型に入れた武士を描くやうになつてゐるが、昔の劇作家は、お武家のえらさを現はすとゝもに、武士の安つぽいところも現はすに躊躇しなかつた。それは武士の正體を平生よく見てゐるためでもあり、また、芝居として、御見物の御機嫌を取るために武士でも何でも面白可笑しく取扱はうとした爲めでもあつた。由良之助の祇園の遊蕩にしても思ひ切つて惡巫山戯をさせ「菊畑」の牛若丸でも若衆姿で踊らせてゐる。ところがこの頃の芝居では、肝心の「茶屋場」も肝心な前半の遊蕩ぶりを省略し、「菊畑」でも主要の登場人物の言語行動の條理が見物にはよく解らず、戯曲としては甚だアヤフヤなものとなり、低級卑俗な見せ物たるに過ぎなくなつてゐるとも思はれるが、この封建芝居の出し殻のやうなものを、見物席では口を開けてニコ〳〵して悦しさうに見てゐる。昔の見物のやうに由良之助が亡君の切腹刀の血汐を甜めて譯ありげな思入れをするのに同感するのでもなく、牛若主從の苦衷を憐むのでもないが、彼等が、何か人間としての尊い事、善行美事を企て

てゐるのだと思ふのが見物心理であるらしい。これ等の見物も出し殻でない、もつとフレッシュなものを與へられゝばもつと身を入れて芝居を鑑賞するに極つてゐる。

私の近所で美しい若い女性は、一人で見てゐた。幕間に御機嫌伺ひに來て側にしやがんだ藝人らしい男とのヒソ〳〵話をきれ〴〵に洩れ聞きすると、この女性は、或役者の出幕に限つて二三幕を、毎晩見に來てゐるらしい。私には女の素性を鑑別する目はないが、いい保護者を持つてゐる花柳界出身者らしく思はれた。かういふお客も隨分ゐるであらう。役者稼業の面白い所以である。

しかし、年中肉體を公衆の前に曝すことについて、俳優は自己嫌惡を感ずる時はないのであらうか。毎日机の前に坐つてゐる稼業も、馴れないものゝ目には苦しいものゝやうに思はれるであらうし、馴れゝばどんなことにも堪へられるものであるが、俳優は少くも自分の容貌風姿について何等かの自信がなければならない。落語家講釋師音樂家なども、公衆を前にして技藝を演ずるのだが、彼等は俳優のやうに肉體を批判の的にされるのではない。今日のやうに電燈の煌々たる所で「おれの面を見ろ」と、幾千人の目の前にまかり出るのは、氣の弱い者には出來る仕事でないやうに思はれる。それだけに容貌技藝に自信のあるものは、眼前で見物を魅惑するといふ、他人の知らない快感を經驗することであら

う。ところが我々第三者から見ると、立派とか華美とか形容し得られる俳優は極めて稀れなのだ。舞臺を見た目で見物席を見廻し見物席を見た目で舞臺を見ると「お互にまづい面を竝べてゐる」と感ぜられ勝ちである。無論これは概括的な感想で、個々の人間をよく見てゐると、舞臺にも、硬軟正奇の差別はあつても、審美的な風丰を持つた俳優あり、見物席にも男性として女性として傑れた肉體を具へてゐる者もあるには違ひない。しかし、今日の芝居が滿都の人氣を惹く力の弱い一つの理由は容姿の傑れた女優の出現しないことである。森律子とか竹久千恵子とかを、毎晩見るために、舞臺近くの見物席を豫約して、芝居に出掛ける熱心家もたまにはあるかも知れないが、彼女等はまだ多くの男性を惱殺させるほどの力は有つてゐさうに思はれない。全體現在の日本の舞臺にはエロチックな匂ひは稀薄である。女形が干涸びて來たせゐもあるが、女形の干涸びるのは時勢の變遷で、自然の運命で已むを得ないであらう。當然女優が現はれて活躍しなければならぬのだが、日本には藝者時代あり女給時代あつても、女優全盛時代は容易に見られないらしい。それは、日本の女性がまだ封建時代の風習から脫却しきらず、所謂精神の「解放」をされてゐないためである。放縱不羈の女性も續々現はれつゝあつて新聞雜誌などの材料にされてゐるにしても、一般にまだ陰性である。だから、藝者や女給のやうに私人に對して技巧の妙を發

揮しても、公衆の面前で自在に女性特有の魅力を露はすに適しないのである。

私は丸髷などに結つて丹念にお化粧した同じ顔の女に、あちらこちらの劇場で續けて出會つたので、かういふ有閑夫人が、芝居や百貨店を遊び場にして毎日日を暮してゐるのを侮蔑する氣になつたが、彼女等は彼女等としての眞實の生活をしてゐるのである。ロシアでさへ、近來美容術などが盛んであるさうだ。今まで壓迫された女性本能が猛烈に燃上つて粉飾慾美裝慾を恣まゝにしようとしてゐるらしい。西洋の大都會の目拔きの街を歩いてゐると、目ぼしい商店は大抵女性のための流行の品物を賣つてゐるのに驚かれたが、これが人間の眞實のやうに思はれる。生物は雌雄だけで人世は男と女だけによつて成立つてゐる。そして、男は女の歡心を得るために働くのが、古今を貫いての眞相なのではあるまいか。美しいヘレンか醜いヘレンかのために、男は戰爭を續けて來たのである。政治も經濟も宗教も文學も、上つ面は六ケしい理窟で論爭されてゐても、押詰めて見ると、男性といふものが女性の歡心を買ふために努力してゐることに根本問題があるのである。

日本では、銀座街にも、日本橋通りにも、まだ女性用品專門店が少過ぎる。世が榮えるにつれて、次第に殖えるだらう。劇場は、本來有閑夫人或は無閑夫人（私が市村座の歸りに會つたサラリーマン夫妻の如く）の遊び場とも云ふべく、文學も概して女性銷閑の具と

云ふべきものである。芝居や映畫見物に男一人で出掛けるのは、隨分氣の利かない話なので、本當は女性に隨行すべきでもあるらしい。男子は、わざ〳〵カッフェやキャバレーなんかへまで出掛けて、女給の歡心を買ひ、彼女等に衣食の料を提供して悔ゆることを知らないのである。舞臺に魅力を有つた優秀な女優が現はれたなら、觀劇慾を咬られないでゐられるものか。

○

「喜多村でも河合でも、その他の役者でも、みんな藝が巧いですね。あれほどの傑れた腕を有つた役者にあゝいふ物をやらせて置くのは惜しいと思はれます。」

「春色晝夜帶」といふ花柳界情話劇が終つた時、明治座の廊下で或知人が云つた。私も同感した。藝者の實生活を知らない私には、瀨戸英一氏の「二筋道」系統の芝居は、珍らしい世界を見せられてゐるやうで面白かつたのだが「晝夜帶」に現はされてゐる人情は、舊劇に現はれてゐる人情以上に、奇怪であり不可解であつた。或料理屋の若い女將が現在の夫が以前親しい朋輩であつた藝者に關り合ひをつけてゐるのを知つても嫉妬を起さず、却

つて「知らない女に夫を取られたのよりも、懇意な朋輩に關係されてゐる方が安心だ」と澄してゐるのが、この一篇の中心思想になつてゐる。私にはこの心理が腑に落ちない。「知らない女とならまだしも諦めがつくが友達に夫を取られるのは忌々しい」といふのが本當ではあるまいか。「晝夜帶」に現はされたキザな心理が藝者心理なのかも知れないが、それならそのキザな心理を特異のものとして取扱つたところがなければ見物の胸に應へて來ない。だが、見物には全體を通じての意味の有る無しはどちらでもいゝので、役者の言葉や擧動の瑣末な個所の可笑しさ哀れさなどを樂んで見てゐるらしい。

新派劇は現實の社會を寫してゐる筈だと豫想して見てゐると大間違ひだ。「七色珊瑚」でも「晝夜帶」でも、外形の風俗は現代であつても內容には現代そのまゝの姿は映つてゐないのだ。「引窓」なんかの方が却つて寫實に近いやうに感ぜられるくらゐだ。現代は不安な世である。新聞や雜誌に現はれてゐる物を讀んでも、現はれてゐないことについて聞いても、一日も安んじてゐられない樣に思はれるが、その不安の有樣が舞臺には少しも現はれてゐないのは不思議と云へば不思議である。かつて左翼の劇場で演ぜられてゐたやうな露骨な社會問題劇が大劇場に上されないのは當然だが、日常生活の不安な影が差して見物に思ひ當る思ひをさせるものは殆んど見當らないのは不思議である。「晝夜帶」の二人の女

性の闘争も「七色珊瑚」の家庭闘争も、見物の經驗してゐる所まで肉迫して來ないので、他所の世界の出來事のやうに感ぜられる。殺伐な劍劇が行はれてゐても、舞臺で振り廻す劍の切つ先が見物の胸元を目がけてはゐないので、他所の世界の遊び事のやうに感ぜられるに過ぎない。

だが、見物の心魂に蹈込んで來ないで、いつも一歩か數歩か隔たつてゐるところに享樂の餘地があり、享樂の妙味があるのであらうか。私は、明治座から自動車で歸る途中、車の窓から雨の中に煌々と光つてゐる歌舞伎座の外貌を見て、歡樂の殿堂を一瞥したやうな氣持がした。見物人は、無意識のうちに、現世の不安から、一時だけでもそれ等の殿堂に逃げてゐると解釋するのが、詩人らしい物の見方であらうか。「危いぞ歌舞伎座なんかへ行くな」といふビラが、たとへ神のお告げであつても、それは多數者の耳には馬耳東風である。

不安におびえてお寺に驅込んだにしても、芝居が退窟ならお坊さんのお說敎は我々にはそれ以上に退窟である。（昭和九年十一月　中央公論）

左團次・菊五郎・その他

仁左衛門が死んで、梅幸が死んで、歌右衛門も中車も老朽してゐる今日の歌舞伎劇の社會では、左團次と菊五郎との活躍、對立、角逐が期待されてゐるさうである。世の中はますます面倒になり、どの方面にも問題が多くつて、のんびりした平和な生活は得られなくなつてゐるが、芝居道の方でも、內輪はごつた返してゐるのであらう。「世の中は團十郎や江戸の春」と云つたやうな、歌舞伎芝居讃美の聲は、現代の日本の首都の何處にも殆んど聞かれなくなつてゐて、舊い傳統を大事さうに保つてゐた名優が次第に凋落して、歌舞伎といふものがつひに消滅することになつても、それは極めて少數の愛好者に惜まれるに留まつて、一般民衆に取つてはどちらでもいゝことなのである。全體古い者の保存に力を費すよりもその力で新しい者の創造を志す方が張合ひがありさうに思はれる。

しかし、現實の問題として、劇場經營者は、歌舞伎役者の殘黨を有效に利用して、能ふ限り、都會人の觀劇慾をそゝのかして、事業を繁榮させねばなるまい。俳優自身も自己の存在を光らせるために、さま〴〵な苦心をしなければなるまい。純文學者が純文學は世に適しないで早晩衰滅するにちがひないと思つてゐたら、執筆に氣乘りがしなくなるであらうが、舊派の俳優も、歌舞伎芝居の前途を悲觀しだしたら、舞臺に出る張合がなくなるだらう。羽左衛門や菊五郎のやうに、芝居は世界中で歌舞伎が一番傑れてゐると、盲目滅法に已惚れてゐるのも結構な譯だ。

そこで左團次と菊五郎とが現在の舊劇壇の明星として、どの位の程度かの光を放つかといふことが、好事家の問題になつてゐるらしい。私もつれづれなるまゝに、勝手に好事家の仲間に入つたつもりになつて、ひそかに視察を試みるべく、一月の歌舞伎座と東京劇場へ赴いた。熱心に見物した。

歌舞伎座には座頭級の俳優が幾人も出勤してゐるため、菊五郎の活動範圍も制限されてゐて、この一月興行によつて、この才優の現在を批評し將來を豫測することは困難である。「對面」の十郎や、「三人吉三」のお嬢吉三や、下駄を穿いての踊りに新趣向を見せる「高坏」くらゐでは、彼の眞面目を見ることは困難である。吉右衛門の「二條城の清

正」のやうな主演者の代表作が、今度の菊五郎の持役に見られないのは物足りない。だが歌舞伎座の一月の芝居を首尾を通じて辛抱して觀ながら、私は少からぬ興味を感じた。人生の縮圖を觀てゐるやうであつた。俳優の私生活も劇場經營者の魂膽も全く知らない私は、何等の偏見もなく、舞臺に親しまれた。「三日太平記」は、先代の左團次一座（か、或は他の小芝居か）のを見て何の事やら意味がよく分らなかつたのだが、今度はよく分つた。そして、封建時代の道德と趣味と人情とが、この巧みに仕組まれた一幕に濃厚に出てゐるのを面白いと思つた。俳優も容々しく型だけを演じるに止まり、多數の見物も何が何やら分らずに見てゐるのであらうが、何百年前の日本精神を宿したものが、煌々たる電燈の下に曝されてゐるのだから、なま中の論文や歷史書を讀むよりも、我々の頭腦に得る所が多いのである。藝術の力である。「繪本太功記」の十段目は、この「三日太平記」から暗示を得たものらしく、そして舞臺が派手であるため、引續いて持囃されて來たが、德川時代好みの武士道の型を現はしたものとしては、「三日太平記」喜平次住家の場の方が要領を得てゐる。無論德川武士道の現實描寫でないことは、「二條城の清正」が清正の現實描寫でないのと同樣であるが、あれが民衆の理想であつたかと思ふと、德川時代の人間生活は不思議な生活であつたと思はれる。

「三人吉三」は、默阿彌の代表作で、百兩の金をぐる〳〵廻して變化ある筋を作つてゐるのは面白い。この手法を現代に應用して新作を試みたら面白いに違ひない。默阿彌のは、双生兒が、兄妹と知らずに戀愛に陷るといふやうな、不快極まる趣向を用ひたりしてゐる上に、盜賊を英雄扱ひしてゐるのが、「三日太平記」の封建情調以上に我々には阿呆らしく思はれるが、强盜和尚吉三をして、例の百兩によつて親孝行を示させてゐるところに、舊劇慣用の日本精神の發揮があるから面白い。エロチックでグロテスクで汚された歌舞伎劇にも、德川期治世方針の倫理は、あちらこちらに潛在してゐる。そして、それが微かながらも今日の見物の心にも受入れられてゐるらしい。

だが、かういふ白浪古典劇は永續すまい。あるこじつけの賞讃と、一般民衆に殘つてゐる封建趣味と、興行者の頭の古さによつて、默阿彌物も、どうにか傳はつて來たものの、大川端風景も、本所割下水の江戸生活も、今日では、「三日太平記」ほどの歷史的價値もなくなつてゐる。「月も朧ろに白魚の篝もかすむ春の空」云々のやうな默阿彌特有の詩的臺詞に、私でさへ詩を感じなくなつた。谷崎潤一郎氏は「文章讀本」に於て、日本純粹の文章美を唱道して、そこに氏特有の豐富な鑑賞力を示してゐるが、舞臺に於ける從來の戲曲的文章は殆んど成つてゐないと云つていゝ。私はかねて、歌舞伎劇は痴呆藝術であると思つ

てゐたが、「對面」の臺詞なんか聞いてゐると、支離滅裂で痴人の文章である。默阿彌のは、德川文章の常套に習つてゐるにしても、兎に角、江戸ッ兒らしい詩趣を有つてゐるのが生命なのだが、今日の人心に訴うる力は失せてゐるし、第一、默阿彌の言葉を生かして我々の耳に傳うる技術を有つてゐる俳優は、今日の劇壇には存在してゐないのだ。左團次の音聲の如何に非音樂であるかは、多年私が遺憾に思つてゐるところで、この俳優が、少くも臺詞の上で、默阿彌の古典的詩美を生かすに適しないことは明かである。菊五郎も、新作物現代物に於ては兎に角、古典劇の臺詞に於ては、決して我々に音樂的快感を與へる種類の俳優ではない。お嬢吉三の形の變化には、彼らしい注意が施されてゐるが、あのせりふには詩を伴つてゐない。幸四郎に至つては論外である。聽いてゐて何時も不愉快である。私をして歌舞伎の古典的臺詞らしい藝術美を感受させるのは羽左衛門である。彼の所演によつて、私の耳に古典の藝術美が映ずるばかりではなく、耳にも古典美が傳はつて來るのだ。羽左衛門も若かりし頃には、締りのない甘つたれた語調であつたが、中年以後の彼の臺詞は爽かである。それから、吉右衛門の臺詞にも、或藝術味がある。この俳優はますます動脈硬化を來したやうに干涸らびて、「二條城の清正」の如き、新作であつても、昔の活歷以上の何物でもないものを、秀山十種とかに加へたりするほどに頭が古く、或金持の最負

から刀を貰つたことを、彼の藝談によると、眞面目に悦しがつて三拜九拜したほどに不見識で、何等の妙味もない俳句を作つてれい〳〵しく世間に發表するほどに、文學趣味が低級であるが、しかし、この俳優だつて、他の幾人かの現代名優に劣らないほどの名優的素質を持つてゐるのである。十年前、震災後の邦樂座で、私は彼の「縮屋新助」を觀て感歎したことがあつた。國藏などの及ぶところでないと思つた。この俳優の臺詞には沈痛な味はひがある。人間の憂欝の聲が洩れてゐる。今度の「清正」に於ても作意に沈痛の味はひがあるのではないが、彼の臺詞には自己意識を經ないで、をり〳〵沈痛の聲憂欝の響を傳へてゐる。現代の舊俳優の臺詞を耳にしながら、私が藝術感に惹かれるのは、羽左衛門と吉右衛門の二人を觀てゐる時だけである。

吉右衛門には、凄慘憂欝な近代劇の骨法を生かした新作を與へて演ぜさせたらよからうと、私は、彼の舞臺を觀ながらたび〳〵空想したことがあつたが、俳優彼自身は、縮屋新助たるよりも加藤清正たることを以つて名譽としてゐるらしいから仕方があるまい。これが遖さまで、新しい縮屋新助を演じて、秀山十種とすることに、渾身の藝術慾を湧立たせるやうだと、吉右衛門も强敵菊五郎を凌ぐやうな名優になれるのだが、それは要するに空想に留まるのである。この頃の日本の劇壇にも、男を泣かす芝居があるさうだが、二條城

の清正」なんかは多分その一つであらう。私はさう思つて觀ながら、現代日本の男性の精神、藝術感を推察した。今日の劇場の舞臺に、人生の縮圖を觀たと、私の云つた所以である。

私の空想は空想として、現實の吉右衞門は、清正式秀山十種に凝固まつて、動脈硬化を續けるつもりかも知れない。そこへ行くと、菊五郎は豐富な素質を有つてゐて、舞臺を面白くする才能を有つてゐる。（近々、先代の追善興行があるさうだが、）今の菊五郎も舞臺意識が親譲りなのであらう。親子といふものはよく似るものである。私も年を取つたので顏付が亡父に酷似して來たと、近親者に云はれるやうになつて、前途に不安を覺えてゐるが、菊五郎の十郎などを觀てゐると、私が見た晩年の五代目の目付や口付がふと思ひ出されて觀劇興味が一層增すのである。そして、人間はいくらじたばたしても、超然たるつもりでも、遺傳の法則から離れ、環境から離れた獨自一己にはなり得ないことを痛感するのである。

舞臺を面白く賑やかにしようと心掛けてゐた五代目の演劇趣味は六代目に傳はつてゐるのであらう。それはいゝことである。五代目は、團十郎や吉右衞門のやうに英雄豪傑に扮することを好んではゐなかつたらしい。むしろ市井の職人、與太者、ルンペンに扮するこ

とに興味を覚えてゐたらしい。今の菊五郎もさういふ舊い世話物趣味を遺傳的に持つてゐるらしく、そのために、長谷川伸氏の作品の上演を好んでゐるのであらうと推察される。私も、去年の十月、菊五郎羽左衛門共演の「長谷川物」を見て、舊役者にはつまりはかういふ者が適してゐるので、斬新な新作を彼等に與へようと考慮するのは見當ちがひであると思つた。

吉右衛門は、「二條城の清正」系統の趣味で進み、菊五郎は、「長谷川物」系統の新作に心を寄せ、左團次は、「眞山青果物」を本領として活動することが、現代舊劇壇の趨勢であると、我々は見當をつけていゝのである。興行者の複雜な、千變萬化の策略によつて、世人の目を眩まして、芝居人氣を煽り、興行價値の增大が企てられるにしても、それは外形だけのことで、舞臺藝術の正味を洞察すると、せい〳〵そんな所にあると見ていゝ。かの三種の戲曲は、要するに封建思想に據つた作品である。またさうでなかつたら、今日の大劇壇の實用に適しないのだ。見物も喜ばないに極つてゐる。

東京劇場の一月興行には、宇野信夫といふ新作家の「吹雪峠」といふ新作の短い一幕物が挿まれてゐるが、これは、新劇壇向きのものである。かういふ者を商業劇場で採用したのは、興行者が新作家奬勵の寬大なる心を現はしたものとして感心していゝのだが、戲曲

としてあまりいゝものぢやない。新劇團では吹雪荒れ狂ふの舞臺裝置を爲し得ないのだが、商業劇場では舞臺面だけで見せ物的效果を獲得しようと考へたのであらう。だが、人間の嫉妬と生の執着は、深刻な現實の姿であつても、それは作者の思ひ付きだけで、見物の共鳴を得るほどに徹底して書かれてはゐない。封建道德に基いた芝居を見馴れてゐる見物は、かういふ芝居には、不愉快な滑稽感を覺えるらしい。その感じが見物席に漂つてゐた。私が劇場に人生の縮圖を見ると云つた所以である。少しでも生き延びたい本能のためには、今までの親しみも情愛も棄てゝ顧みないのは、浮世の眞實であつて、多くの人間はさういふ生活を營んでゐるのだが、舞臺ではさういふ生活の眞相を見たがらないのが、現在の見物心理である。作者にも、反省力の乏しい見物の心を引摺つて、眞の世界を否應なしに見させる力を缺いでゐる。舊劇役者としては、こんな役は演じにくいであらうし、また演じることを好まないだらう。しかし、猿之助はかういふ役は適してゐる。現代の實生活を描いた脚本に於ては、菊五郎よりももつと眞實に迫るものを演じ得る素質を持つてゐると思はれる。すべてに於て菊五郎よりも安つぽく見られるが、人間の安つぽいところを巧みに表現し得られゝば名優である。加藤清正や大石内藏之助になつて納るよりも、女と睦み合つてじたばたする人間を如實に表現する方に我々は藝術の眞の味はひを感じるので

ある。猿之助は安つぽい人間味を徹底させることによつて活動の餘地が充分にあるのだ。

私は、自分に作劇の才能があると假定したら、吉右衞門を主役として凄慘な人世相を描いた新脚本を創作し、猿之助を主役として、安つぽい人間味を横溢させたものを作りたいと空想してゐる。誰かさういふ新作を試みようとする作者はないのであるか。興行者もさういふ考へを起すことはないのであるか。私は、評判の左團次菊五郎對立の兆候を視察せんとして、東劇と歌舞伎座とを觀たのであるが、却つて、吉右衞門と猿之助とが、持つてゐる傑れた素質を徒らに消耗させてゐることを惜しむの感を起した。世の中の事多くはさうしたものである。

先頃、左團次の「小山内薫追憶談」を何かの新聞で讀んだが、そのなかに、田舍興行の時、小山内が一度舞臺に出たがつたので、無言の百姓の役をさせたところ「芝居といふものゝ六ヶしいことがはじめて分つた」と、後で小山内が述懐したと話してゐた。それはさうに違ひない。しかし六ヶしいと云へば、小説だつて同樣だ。私など何十年、今古の小説を讀みつづけ、自分でも努力して筆を執つてゐるのだが、思ふやうに書けたためしがない。植木屋の仕事でも大工の仕事でも、素人の手でたやすく出來ることではない。芝居は

芝居として六ケしければこそ、俳優が多額の給金に有りつけるのだ。「吹雪峠」のやうな新劇向きの芝居でも、新劇團の俳優とはちがつた藝を見せてゐる。歌右衛門は、「對面」の工藤で坐つてゐるだけで、立派に貫祿を見せてゐる。多年錬へ上げた藝には動かし難い力がある譯だ。幹部の俳優諸氏には普通人の企て及ばざる技藝が具はつてゐるので、それなればこそ、「對面」や「三人吉三」のやうな古くさい狂言でも、「吹雪峠」のやうな未熟な新作でも、どうにか見てゐられるのだ。

しかし、それだけでいゝのかと、私は反問したい。新年宴會の餘興劇たるに甘んじてゐるのであらうか。どつちを向いても貧弱な現代の藝術界に、舊劇の方面では、菊五郎左團次の對立によつて、何等かの新氣運を起すのかと、世上の噂を信じて期待しても、それは興行者の政策だけで、御當人達が覺醒して、新味ある演劇を志してゐるのでもないらしい。文藝復興の空景氣同樣であるかも知れない。左團次は、素質が古典劇に適しないためであつたが、舊套に安んじないで、新しい天地を拓いて來た。そのために惡戰苦闘した。天分のあまり豊かでない彼が今日の地位を得たのもそのためであり、門下にさしたる秀才を藏してゐないのに、この一座は、音羽屋系統に對抗して、何か新味ある演劇を起すであらうと、一部の好劇家に期待されるのも、過去の苦闘の賜物である。私は左團次の藝術觀

について何等知るところがないが、昔小山内薫君に聞いたことがある。「高橋は隱退して、鎌倉のやうな所に住んで、時々自分の好きな芝居だけやるやうにしたいとよくそんなことを云つてゐますよ」と。この言葉に私は共鳴してよく覺えてゐる。ヂャーナリズムに迎合しないで、時々自分の書きたいものを書いて、靜かに暮したいと思ふ文學者の氣持と同樣である。左團次ほどの地位を得ると、興行者が容易に隱退させないだらうし、自分も名利の慾から超然とはされないのが現實の人生なのであるが、彼の心にさういふ消極的人生觀を有つてゐるのは、菊五郎の積極的態度に比して面白いと私は思つてゐる。こゝにも遺傳の影響が現はれてゐるらしいので、先代左團次が「自分のやうな者が假りにも團十郎菊五郎と比べられるやうになつたのは分に過ぎたことで、師匠默阿彌などのお蔭だ」といふやうな意味の述懷をしてたことが、默阿彌の傳記か何かに書かれてゐた。ところで消極的態度の處世法には一面に強味を有つてゐるのだ。興行主の無理解な興行政策に盲從するよりは、隱退して餘生を送る氣持に成りきつたら、人間としてすがゝしい生涯であると私には思はれる。よぼ〳〵の身體を舞臺にさらすのも悲慘だが、たとへ肉體が健全でも、いゝ歲をして興行主からやりたくもない役を押しつけられて、仕樣事なしに舞臺をまごまごしてゐるのも悲慘である。さうしてまで役者といふ世間的虛名を保つよりは、いさぎよく隱

退する知名の俳優が一人でもありさうに思はれるが、いまだに聞いたことがないのが遺憾である。さういふ役者があると劇壇覺醒の役にも立つのだ。地位も高く生活難の憂ひもない左團次の如きこそ、この消極的反抗を有效に持續し得られるのである。

だが、現在の彼は、その高潔なる消極的態度を徹底させる場合でなく、興行主と心を合せて劇界に新氣運を起さんと意氣込んでゐるのかも知れない。それなら、大雜誌社の社長と作家と氣持が合つて、作者が好きなことを思ふ存分に書き得られるのと同樣、結構至極である。ところで、現在の興行者と心の合ふ程度の演劇に、甘ざましく常套を脫したものがあるであらうか。自由劇場系統の新演劇だつて現在の興行者は好まないにちがひない。左團次の藝風は菊五郎とはちがつてゐる筈だ。この本領を發揮するには、興行者の演劇趣味とは根本的に意見を異にしなければならぬと、私などは想像してゐるが、それは我々の買被りであつて、この俳優も空虛な英雄劇に滿足してゐるのであるか。

菊五郎の方は、寺島某氏たる個人としてはどうだか知らぬが、由緒正しき六代目尾上菊五郎といふ舞臺人としては、興行者と藝術感が合致していゝ筈である。お芝居をお芝居として續けて、互に相背くことはない筈である。谷崎潤一郎氏は菊五郎讃美者であるが、どちらも自分の藝術に自信の強いことも似てゐる。それも世間で持囃すためで、世間が擧つ

てケチをつけ出しても敢然として自信を保つか否かは疑はしいが、兎に角、菊五郎が、「おれは日本一だ」と云つたやうな顔をしてゐるのも、非凡な藝術家には有り勝ちなことで、それが藝道精進の刺戟となつたら結構なことである。左團次が消極的で、吉右衛門が萎けて、猿之助がガサツであるため、菊五郎の積極的豊満な藝風が、歌舞伎らしい芝居として、いろんな階級の見物の人氣をさらつて行きさうである。猿之助も吉右衛門も左團次も、當分菊五郎に壓倒されさうである。菊五郎は先代に似て、見物を面白く遊ばせる手腕を有つてゐるのだ。歌舞伎芝居はそれを極致とし、それ以上を望むのは見當ちがひであるかも知れない。歌舞伎は日本のレヴューだと云はれるやうになつたが、菊五郎もレヴュー役者としては上乘である。

レヴューとしても、歌舞伎には封建時代の渣滓が溜つてゐて現代人の賞翫に堪へない分子が多いのだから、菊五郎の古典趣味保存もいつまで現代に迎へられるであらうか。

前に云つた如く、私は俳優の私生活については殆んど何も知らない。數年前に前進座連中が演じた「歌舞伎王國」といふ現實暴露劇によつて、歌舞伎俳優の實生活の一端を見て不思議に思つただけであるが、今、參考のために、「話」といふ雜誌の一月號を買つて來て、「菊五郎の生活を覗く」を讀んで、得るところが少くなかつた。菊五郎が野球でもゴル

フでも競馬でも狩獵でも、自由自在に快活に樂しんでゐることを知つて、さういふ趣味の人間だから、舞臺も陽氣になり派手になり、生氣に富むのであらうと察せられた。久米正雄氏がいつも若々しく遊戲好きであることが、その作品に影響して讀者を面白がらせる空氣が、自ら作品の上に漂ふのと同樣であらう。しかし、私の驚いたのは、この名優の「夜の生活」である。「芝居がハネた。眞直ぐに家へ歸る。これが大抵十時半から十一時だ。これからが彼氏一家の樂しい夜食が始まり」夜食後には、賑やかなお喋舌り會が始まつて、殆んど曉近くまでそれを續けるのださうである。當人の趣味として、趣味ある夜明かし生活をするのは自由だが、數十人の門弟達がよくそのお相手を勤めてゐられると、私には奇怪不思議に思はれる。封建時代の弟子と師匠の關係を現はした一つの縮圖であると云つていゝ。菊五郎一門に限らず、他の師匠と弟子ともこれに類似した生活をしてゐるのであらう。義太夫語りなどいろ〳〵な藝人の修業話は、御當人が得意で話してゐればゐるほど、私は感心するよりも、その愚劣さを感じるのを例としてゐる。毎晩々々師匠の遊戲やおしやべりのお相手になつて夜明かしをするなんか、私が若しその師匠の弟子の一人であると假定したら、實に呪ふべく戰慄すべき生活であるやうに想像される。しかし彼等門弟も誰も私のやうには思はず、さういふ生活に甘んじ、それによつて藝の修業が出來、立身出世

の道をひらかれると思つてゐるのかも知れない。かういふ私生活を基礎としてあゝいふ舞臺藝術が現はれてゐることを想像すると、舊劇の世界は別種の世界である。生活の上に封建思想の殘骸を守つてゐながら、舞臺の上で清新なる藝術を生み出すことを期待し得られるのであらうか。歌舞伎劇の沈滯を打破して新空氣を入れるには、幹部どもの古くさい封建的師弟制度を廢滅させ、若き俳優をして個性を自由に延ばさせることが、重大なる條件であらうと、「話」の「菊五郎生活」を讀んだあとで考へた。角力の社會はその性質から云つて、昔の親分子分の關係も必要であるかも知れないが、演劇の社會は個々の俳優の藝術を自由に發揮さすべきもので、師弟の情實關係で舞臺が支配されるのは、時代錯誤も甚だしい。文學の方では、封建的師弟關係は紅葉山人くらゐで終つてゐる筈だ。

一月の二大劇場の出し物のうち、完備した新作は、「二條城の清正」と「元祿忠臣藏」とであるが、二つの戲曲の狙つてゐる劇的效果は同樣であるから面白い。清正が本多佐渡を叱り飛ばしたり、家康に對して大阪訪問を强要したりする對外硬的言論が、單調なかの一篇の生命なので、御目附多門傳八郎が淺野長矩擁護の理窟を述べるのが他の一篇の生命なのである。見物には喜ばれたらしく、男の見物を泣かすのかも知れないが、私は、二氏の

作劇術の老練さは感じながらも、眞實感を舞臺から受入れられなかつた。加藤清正は悲劇的人物であつて、國十郎の活歷中の人物にもたび〳〵なつてゐるが、德富氏の近世日本國民史に描かれてゐるほどの眞實性を有つた清正らしい姿も現はされてゐない。日本の歷史劇では、作家が端的に昔の人間を描かうとはしないで、先づ武士道の定規を當嵌めて人間を描くのを例としてゐる。福島正則なんかは、清正より長生きしてあの時代の人らしい生存苦を經驗したゝめ、絶好の悲劇的人物として、戲曲家の材料とされていゝ譯だが、作家が舊套的武士道の鑄型を用ひないで、人間そのものを直視する態度で描いたら、今日の興行者にも見物にも喜ばれないかも知れない。

眞山氏の「忠臣藏」は史實をよく調べたもので、抱負の大なるものらしい。氏の「福澤諭吉」は、雜誌で讀んだ時には、さすがにうまいと思つた。この作者は、現代の劇作家としては群を拔いてゐるらしい。私は、「將軍江戶を去る」や「坂崎出羽守」や「元祿忠臣藏」など、この作者の近作を改めて熟讀して、日本の史劇の正體を知りたいと思つてゐる。（昭和十年二月　中央公論）

劇場にて

私は觀たくない芝居を觀に歌舞伎座へ行つた。今年の一月から、毎月或新聞に劇評を賴まれたのを、何とか云つて斷つてゐたので、先方でももう諦めてゐるだらうと思つてゐると、今月もまた賴んで來た。その根氣に負けて今度は承諾はしたものゝ、觀劇慾は少しも起らなかつた。觀たくない人に觀られて批評されるのは、役者も迷惑であらうし、さういふ氣乘りのしない批評は、讀者にも面白くないだらうと思はれるのに、世間は不思議なもので斷る者にはなほ更賴みたくなるものらしい。

兎に角、私は開演時間前に歌舞伎座へ入つた。現代好みの「大」の字はこゝでも常例として用ひられて、「大歌舞伎」と自己推薦をしてゐるが、私には昔築地小劇場の飜譯芝居に興味を有つてゐたことが思ひ出された。

與へられた椅子席は、昔の平土間の五つ目くらゐな所で、舞臺から適當な位置を保つて最も觀心地がいゝ。かうした大歌舞伎を鑑賞し得られるのは贅澤な沙汰と云ふべきだと考慮して、私は享樂すべきものをつとめて享樂しようとした。周圍の見物席には、爺さんもゐる。婆さんもゐる。娘もゐる。青年もゐる。舞臺では、幸四郎の扮した非人姿の惡七兵衛景清と、吉右衛門の扮した虛無僧姿の三保谷四郎國俊とが、心底に覇氣を含んだ勇士らしい臺詞を取りかはしてゐる。默阿彌が文久元年に書卸したといふこの「錣引」が青年時代の九代目團十郎や四世芝翫によつて初めて演ぜられた時には、この勇士景清や三保谷の強い臺詞を、役者は眞實の聲として吐露して、見物も眞實の聲として耳に留めたのであらうが、今の見物席の多數者には、彼等の臺詞は空疎な强がりとして聽えてゐるらしい。俳優自身も源平時代の勇士をもつて任じてゐるらしくもない。

心にもないこと、眞心から外れたこと、わざとらしいこと、外形だけきらびやかで綺麗さうに見えることを、世間で「お芝居のやうだ」といふ。「あの人はお芝居をやつてゐる」といふ。さうすると、日本で云ふ芝居——すなはち歌舞伎系統の芝居は、本來幸四郎の景清や吉右衛門の三保谷が今やつてゐるやうなのを指して云ふので、眞心から外れた茶らつぽこの所に妙味があるのかも知れない。「人生は劇場だ」とも云はれ、「劇場は人世の縮圖だ」

とも云はれてゐるが、「ちやらつぽこ」も人世の重要な部分を占めてゐるとすると、景清や三保谷の言葉も人の世の縮圖であり、歌舞伎座のこの一幕に人生が映つてゐると云つてもよささうだ。幸四郎や吉右衛門は、尤もらしい茶らつぽこの人生の代辯者のやうなものだ。

それで、かつて築地小劇場で觀せられた眞向から眞實を振翳した飜譯劇ばかりが、人世の眞實を現はしたものではなく、茶らつぽこの大歌舞伎でも、こちらの心構へ次第で浮世の縮圖がそこに見られないこともなささうだ。新聞を讀んでも一隅に小さく出てゐる親子心中や、貧故の萬引などに、讀者の心を痛ましめる人生の眞實が見られるばかりでなく、大歌舞伎式、豪華版的の何段抜きの大活字記事にだつて、讀者の心掛け次第で浮世の眞實が見られるのと同樣である。

かういふ劇場に於ても、一幕を通じて椅子に凭れて居眠りをしてゐる男がよくあるのだが、こんなのも一概に藝術を侮蔑する沒分曉漢とは云はれないので、その男は、俳優の快い音聲や舞臺の流麗な音樂に魘せられて、夢幻境に遊んでゐると云つてもよささうだ。今日も、私は、開近い後の席から鼾の傳はつて來るのに氣がついた。五月といふ眠い時節に、微妙な抑揚をつけた茶らつぽこの臺詞を聞かされてゐちや眠くもなる筈だと同感して、こつそり後を顧みたが、面積の廣い顏した大柄な女に遮られて、鼾の主は、薄禿の頭だけが

私の目に觸れたゞけであつた。幕が閉つてから廊下へ出るべく立上つた時に、ふと目に映つた薄禿頭の男は、私の記憶にある誰かであるらしかつた。あれかこれかと二三人の名前を思ひ出しては打消しながら、私は休憩所に腰をおろした。

次の幕「寺子屋」を觀てゐる間にも、をり〳〵その疑問の解決されないのが氣になつてもどかしかつたが、首實驗の緊張した舞臺面に、生粹の歌舞伎の妙味を感得さゝれてゐる時に、「アッ」と、私はふと、かの薄禿頭が誰の頭であるかを思ひ當つたのであつた。「他人の子だと思つてよくもズバリと打ちやがつたな」と、吉右衞門の松王が菊五郎の源藏に對して、憤懣を感ずる表情を洩らしたら、古典劇の新解釋として、見物の肺腑を衝くかも知れないと、妄想をめぐらしてゐる時に、私は、薄禿でなかつた青春時代のかの男の面差しを思ひ出したのであつた。彼、佐倉某は三十餘年前に、私同樣、新聞劇評家としてあちらこちらの劇場の招待席に來てゐたのである。たまに口を利いたことはあつた筈だが、彼の劇評行爲は極めて短い間であり、その後の彼については、私は全然知らなかつた。

鼾を掻いてゐた男の素性が分つたので、私は安心して、封建悲劇の怪異なる人間性を獨りで解剖しながら觀終つて、廊下で煙草を吸つてゐると、かの男が私の前を通つた。何氣

なく相手の顔を見上げると、先方も私の顔を見詰めてゐたが、やうやく分つたのか、輕く會釋して、昔を追懷した話をしかけた。

「私はすつかり田舍住ひをしてゐます。この頃、久振りに此方へ來てゐまして、東京の芝居見物も久振りなんです。あなたは、あれから續けて劇評をおやりになつてゐるんですか」

「いや、さうちやありません。たまに賴まれて詰らない批評を書くことはあるんですが」

「役者も變つてしまひましたな」

「役者も變つてゐるし、藝風も昔とはちがつてゐでせう」

「吉右衞門は昔子供芝居に出てゐたあの吉右衞門でせうが、今は餘ほどの老人なんでせうね。あの役者の親爺の時藏がこの座で春藤玄蕃をやつたことがありましたね」

それは團菊存在の頃であつたと、私が昔の大歌舞伎の記憶に觸れてゐると、かの知人は、雨を氣遣つてゐるやうなことを獨言のやうに云つて、便所の方へ向つた。それつきりで芝居のしまひまで會ひもせず會はうともしなかつたが、彼の鼾は次の幕にもその次にも、ともすると、私の耳に觸れて、近所迷惑だらうと、他人事ながら氣になつた。私の神經で、鼾でないたゞの呼吸をも鼾の如く感じたのかも知れなかつた。

近年は歌舞伎は日本の名物と世界的に極められたらしく、いつも何人かの外人客が見物席の色彩りとなつてゐるが、今日も五六人の西洋婦人連が私の前に並んで、筋書を手頼りに愉快さうに觀てゐた。西洋人の眼には、支那の芝居よりも印度の芝居よりも、奇異な不思議な形式と内容を有つたものとして映ずるのであらうが、空想力に富んだ物好きな外人が、廣重だの歌麿だの、北齋だの寫樂だの、さま〴〵な浮世繪を翫賞し研究し、特殊の美を發見して説明したやうに、歌舞伎の妙味をも、歐米人の頭腦で檢討したら、日本人の思ひつかないやうな突飛な感想があるに違ひない。文學、繪畫、演劇など、異國の藝術については、どんなにでも空想をめぐらし得られるのだ。自國の藝術についてさへ、鑑賞者の空想次第で、稚拙なものにも感激したり陶醉したりされるのだ。ヘルンの日本印象記を讀むと、よく氣がつくことだが、ヘルンが田舍の宿屋の主婦の態度を讃美したり、野道にある變な石佛を禮讃したりしたのを見て、本質的に主婦や石佛を非凡なものと買被つたら滑稽である。

能から取材されたといふ舞踊劇「春日龍神」には、佛道修業にわざ〳〵唐天竺へ渡航しなくてもよい、この土地に居りながら、佛に關したすべての知識は得られることを教へてゐるが、これを現代的に解釋すると、西洋へ留學する必要はない。日本に居て學んでも學

問の極致に達し得られるといふことなのだ。興行者も作者も俳優も、そこを狙つてゐるのであらうか。洋行無用論と云つてもいゝ一つの社會諷刺劇か。さういふと、貰被りで滑稽になり、茶らつぽこになりさうだが、西洋の文學論演劇論、沙翁劇讃美論なんかには、この種類のこじつけが少くない。英語の筋書本にその意味の事を説明して置けば、外人の觀客はその説明をそのまゝに受入れて、一層觀劇興味を感ずるかも知れない。

東京は東洋第一で、世界でも屈指の大都會でありながら、いゝ意味にしろ悪い意味にしろ、民衆の享樂場として取立てゝ云ふほどのものはあまりなさそうだから、歌舞伎座のやうなものも大切に保存しなければならぬのである。假りに「大歌舞伎」と名づくるものが全滅したとすると、日本の都會美の色彩がそれだけ褪せる譯である。それで、義理見物や商店の招待や何かの慰勞會の見物は、知らず〳〵國粹保護の役をしてゐるのである。外人客は今の所は數に於て云ふに足らないのだが、そのうち、多勢の日本觀光客が渡來して、それ等外來客によつて歌舞伎座も經濟的に保護されて、國粹藝術の隆盛になることを豫期するのは、ちやらつぽこの空想であるか。

「西洋人なんかに分りやすまいー」と思はれるが、他人の頭の中は分らない。あれで何かの意味で面白く思つてゐるのかも知れない。五六人の外國婦人は殆んどしまひまで觀てゐ

た。或は宿へ歸つても樂しみはないから、此處で辛抱してゐるのか。私にしても、一幕二幕見殘して早く歸つたつて仕方がない。銀座の喫茶店でお茶を飲んだつてはじまらない。舞臺の臺詞が茶らつぽこであるには相違ないが、知人の雜話を聞いてゐても、要するに茶らつぽこの感じのすることが多い。

ところで、私は、幕間に休憩室に入つて、そこに備へ付けてある新聞のうち、「日日新聞」の夕刊を興味をもつて手に取つた。德富蘇峰氏の短文を讀まんためである。平生、氏の夕刊隨筆を讀みつゞけてゐるのではないが、この頃「佛國革命史原稿の消失」について書かれてゐるのが、私の心を惹付けたのだ。氏は、第一回の書出しに、「婦人の心は分らない」と述懷して、それから、カーライルの革命史の原稿がミルの家の下女によつてストーブの焚附にされた話が持出されてゐた。この話は文學史上有名な挿話で、私も早くから知つてゐるが、それは單純に多年の努力が不慮の災難を被つたことにして、カーライルが改めて再びその雄篇を書上げた不屈の精神に驚嘆するに留つてゐた。ところが、今度德富氏が事々しく、「女性心理不理解觀」を洩らして、この話に觸れたのを見て、「さては何か譯があるのだな。ミルが女神の如くに尊敬し愛慕してゐたテーラー夫人に關係があるのだらう」と私は直感して、蘇峰氏の筆の續きを毎日待ち設けてゐた。氏の最近の政治論新刊批

評などは私は題目を見るに留めることが多いが、氏は人間觀察に於ては、案外凡庸でないのである。蘆花氏などの及ぶところでない。ミルがその愛婦テーラー夫人の頭腦を讃美してゐたのも、必ずしも夫人がえらかつたのではなくつて、善良なるミルは、自分の頭腦が相手に反映するのを、夫人その人の頭腦の正體と誤認してゐたのだと批判してゐるなんか面白い。

ところで、この問題に關する蘇峰氏の夕刊隨筆は、一回出ると、あと數日は途切れて、私にはどうでもいゝ時事評論や遊行記が現はれるのでもどかしかつた。芝居の幕間に見た夕刊にも出てゐなかつた。私は空想によつて追及して、名譽慾の強い婆婆つ氣の強いテーラー夫人（後年のミル夫人）のカーライルに對する嫉妬か何かのための故意の原稿燒失ではないかと疑つてゐた。イブセンの「ヘッダガブラ」が思ひ出された。イブセンはさういふ女を活寫してゐるのだ。

「ヘッダガブラ」は、ニューヨークで名女優の演技を觀たが、かういふ戲曲に接すると、舞臺藝術の茶らつぽこを考へる餘裕なんかはないのである。

私は、心の進まないのに一日を觀劇に費したことを悔ゆるでもなく、完全に大詰の元祿踊まで觀て、歸途に就いたが、今までの例によると、一圓數十錢を投じてタキシーに乘る

ところを、「五圓でいかゞです？」と、運轉手に吹掛けられたのに驚いて、バスか電車に乘ることにした。翌日の出勤時刻を氣にしなければならぬサラリーマンではないし、寸陰をも惜しまねばならぬ境地にゐるのでもないから、電車ででも人力車ででも結構なのだ。昔は早稻田から徒歩で歌舞伎座へ行つてゐたものだ。急いでも一時間半は掛つた。昔、私の知人は吉原通ひに、車賃を倹約するため、江戸川から乘合舟で、廻り廻つて山谷まで行つてゐた。享樂のためには肉體の勞を惜しまないものである。享樂準備に苦勞すればするほど享樂の味はひが加はるのであらう。（昭和十三年六月　日本評論）

文壇的自叙傳
（庫い-9268）
961

昭和十三年十一月二十五日印刷
昭和十三年十二月一日發行

文壇的自叙傳

定價五圓

著者 正宗白鳥

發行者 木田開
東京市麴町區丸ノ內二丁目二番地

印刷者 君島潔

發行所 中央公論社
東京市麴町區丸ノ內二丁目
丸ノ內ビルディング五八八區
振替口座東京三四番
電話丸ノ內 五三五番 五三六番 五三七番 五二八番

共同印刷株式會社印刷

國語國文
日本書房
東京・西神田

EAST ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03061 7815